

令和 2 年度 (2020 年度)

武庫川女子大学大学院

修士論文

大学女子カテゴリーにおいて全日本学生選手権
大会優勝経験を有するコーチの実践知
：ダブルゴール・コーチングに着目して

健康・スポーツ科学研究科 健康・スポーツ科学専攻

薦田 遥

大学女子カテゴリーにおいて全日本学生選手権
大会優勝経験を有するコーチの実践知
：ダブルゴール・コーチングに着目して

指導教員 坂井 和明 教授

健康・スポーツ科学研究科 健康・スポーツ科学専攻

薦田 遥

目次

第Ⅰ章 緒言	1
1. 勝利至上主義コーチングの現状と問題点	1
2. ダブルゴール・コーチング概念の多義性	5
3. ダブルゴール・コーチングで用いられるコーチング・メソッド	11
4. コーチング・フィロソフィーに関する研究	15
5. コーチの実践知を明らかにする質的研究の重要性	17
6. コーチの実践知を明らかにする質的研究の方法論	19
7. 研究目的	22
第Ⅱ章 方法	23
1. 調査対象者	23
2. 調査方法	24
1) アンケート調査	25
2) インタビュー調査	25
3) 逐語録の作成とメンバーチェック	26
4) SCATによる分析とメンバーチェック	27
第Ⅲ章 結果	28
1. 4ステップコーディング	28
2. ストーリーライン	28
第Ⅳ章 考察	47
1. 橋本コーチのコーチングに大きな変化をもたらした7つの経験	47
1) 自分のコーチングを意識的に客観視する経験	48
2) 無意識的にモデル化した生育史を土台に、コーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドを意識的にモデル化しコーチングに取り入れる経験	51

3) 勝利を第一優先に追い求めて試行錯誤するが勝てないまま強制・強要する指導方法に陥る経験	55
4) 勝てない原因を自分に求めて学び直し, 個に応じた指導・組織マネジメントで初優勝する経験	58
5) 勝ち続けることによってコーチング・フィロソフィーが明確になっていく経験	62
6) 勝ち続けることによってコーチング・メソッドが明確になっていく経験	68
7) 勝利の方程式に満足せず新しいコーチング・メソッドを探索する成長欲求を抱き続ける経験	74
2. 勝利至上主義コーチングに陥らないための現場への提言	77

第 V 章 結 論	81
-----------	----

謝 辞	83
-----	----

文 献	84
-----	----

資 料	
-----	--

第 I 章 緒言

1. 勝利至上主義コーチングの現状と問題点

研究を進めるにあたり，先ずコーチング，勝利至上主義という用語についての，本研究における定義を行う．

「コーチング」という用語は，日本においては主にスポーツを指導するコーチング（スポーツコーチング）の意で捉えられてきた．しかし，2000年代に入るとビジネス領域におけるコーチング（ビジネスコーチング）資格や職業が米国より導入されたことにより，コーチングという用語が，スポーツコーチングとビジネスコーチングの両方の意を包含するようになった．そのため，用語の使用において混乱が生じる場面が発生している（伊藤，2017）．本研究では，単にコーチングと表記する場合にはスポーツコーチングを指し，ビジネスコーチングの意は含まないこととする．また，指導する行為をコーチング，指導を行う人をコーチと表記する．

勝利至上主義という用語は，スポーツの世界において，勝利のためには手段を選ばずといった漠然とした概念として頻繁に使用される語彙である．しかし，大峰・友添（2014）が指摘しているように，論者が厳密な定義を行わず，その意味内容については曖昧さを残したまま使用されるケースが多い．NPO 法人スポーツコーチング・イニシアチブでは，Thompson（2010）が示した Win at all cost coaching という用語の訳出に勝利第一主義コーチングを用い，勝利至上主義と同義に使用している（トンプソン，2016）．勝利至上主義に関しては，結果としての勝利が重要なのか，あるいは結果にいたる過程が重要なのかといった問題が議論されている（岡部，2017）．川谷（2008）は，競技スポーツは本質的に競争という側面を持っており，競技スポーツに参加する者は勝利という結果を追求せざるを得ないと述べている．一方で神谷（2015）は，勝利至上主義とは勝つ事以外の（あるいは勝つことをめぐる）教育内容が具体的に明示・意識されていないで，指導や活動が行われている状

態とし、勝つことをめぐるプロセスの重要性を示唆している。本研究では、勝利至上主義について最新の論評を加えている関（2020）が用いた、勝利のみを目指す価値観や考え方という定義を採用し、以下に論を進める。

図子（2017）は、勝利至上主義のコーチングを行うことによって、命を危険に曝しても勝つことを目指すドーピングの問題、競技力だけ高く人間力が大幅に欠如したバーバリアン（野蛮な）アスリートの存在、勝利至上主義で育成されたアスリートがコーチになって起こすセクシャルハラスメント、暴力、金銭問題など、多数の深刻な問題が引き起こされていると述べている。また、図子（2014）は、体罰を受けて育った選手ほど体罰を容認し奨励することがスポーツ心理学の世界では自明になっており、尊敬するコーチから体罰を受けるとともにそれが成功体験と強固に結びつくと、体罰ありきのコーチとして成長を遂げ、自らが受けたコーチング経験が伝播・伝承されると報告している。さらに、文部科学省（2013）も、勝利至上主義によって、選手を統制・コントロールし、コーチ自らが感情をコントロールできず、体罰や暴言を加えて、選手の心を破壊してしまうことは、燃え尽き症候群（バーンアウト症候群）や使いすぎ（オーバーユース）によるスポーツ障害を生むような事態にもなっていると指摘している。金谷（2015）は、指導対象の年齢や性別に関係なくハラスメント行為が起こっていることを示し、競技者および指導者の性別の組み合わせで分類する、「男性指導者×男性競技者」の組み合わせが最も多く、次いで「男性指導者×女性競技者」、「女性指導者×女性競技者」、そして「女性指導者×男性競技者」の順になっていることを報告している。また金谷（2015）は、競技者と指導者の性別の組み合わせにおける体罰・暴力の行為の種類はいずれの年齢カテゴリーにおいても「殴る」などの身体的暴力行為が最も多いが、「女性指導者×女性競技者」の場合は、「男性指導者×男性競技者」および「男性指導者×女性競技者」に比べ、サンプル数は少ないものの「殴る」などの身体的暴力が低

く、「人格」を否定するような精神的暴力が高い傾向がみられたと報告している。

このように、スポーツのコーチング現場において、勝利至上主義が生み出す指導者の体罰・暴力などのバイオレンスを伴った指導が大きな社会問題になっており、指導者・コーチの哲学と倫理、資質と能力に対して大きな疑問が持たれ、スポーツの指導者・コーチへの信頼感は低迷し、コーチングは最大の危機に瀕していると言える。この危機的な状況を打開するために、文部科学省（2013）はスポーツ指導者の資質向上のための有識者会議、すなわちタスクフォースを設置した。タスクフォースでは、スポーツ指導を行う者の役割は、競技者やチームを育成し、目標達成のために、最大限のサポートをすることであり、このサポート全体のことを“コーチング”とし、すべての競技者やチームに対してコーチングを行う人材のことを“コーチ”とすると定義している。さらに、2015年4月に発表された日本体育協会（現日本スポーツ協会）、日本オリンピック委員会、日本障害者スポーツ協会、全国高等学校体育連盟および日本中学校体育連盟の5団体が開催したスポーツ界における暴力行為根絶に向けた集いにおいて採択したスポーツ界における暴力行為根絶宣言には、我が国の指導者、スポーツを行う者、スポーツ団体及び組織が一体となって、改めて暴力行為根絶に向けて取り組む必要があると表明されている。

これらのことは、勝利至上主義がもたらす体罰や暴力といったバイオレンスを伴う指導の危険性や違法性を理解しているにもかかわらず、バイオレンスを伴った指導が後を絶たない現状を打開するためには、単に理念を掲げて宣言することや、ペナルティーを設定して問題行動を起こしたコーチを罰したりするだけでは不十分であることを示している。したがって勝利至上主義を克服するために、コーチにはどのような思考と行動が必要になるのか、それはどのような契機によって修得していくことが可能になるのかという具体的な

事例を明らかにしていくことが，コーチングにおける極めて重要な研究課題になると考えられる．

2. ダブルゴール・コーチング概念の多義性

米国では、勝利至上主義コーチングを克服するための考え方として、Scoreboard（スコアボード）とMastery（熟達）という2つの目標に焦点を当てるダブルゴール・コーチングがThompson（2003）によって提唱されている。Thompsonの理念は、2010年に出版されたThe Power of Double-Goal Coaching: Developing Winners in Sports and Lifeにそのエッセンスが凝縮されており、Thompson自身がNPO法人Positive Coaching Alliance（PCA）を設立し、その普及を行なっている。日本においては、2016年にNPO法人スポーツコーチング・イニシアチブが前書の和訳版ダブルゴール・コーチングの持つパワー：スポーツでも人生でも勝者となる人材を育成するを出版し、ダブルゴール・コーチングの概念を導入し、その普及に力を入れている。また、ダブルゴール・コーチングの理念に基づいて指導を行うコーチを、ダブルゴール・コーチと表現している。

Thompson（2010）は、試合に勝ちたいという目標を持っているという点では、ダブルゴール・コーチと勝利至上主義コーチは同じであるが、ダブルゴール・コーチは、単に勝つことだけに注力するのではなく、技の熟達・向上に注力する指導を行うように己を律し、勝利は選手が技能熟達を達成しようとするその道のりで発生する副産物であると表現し、両者の違いを強調している。さらに、どんなことをしても勝たなければいけないという勝利至上主義のメンタリティがユーススポーツの前面に押し出されると、勝利が最優先されてしまうため、人格を育てる教育者であることは困難だと感じるコーチが少なくないと指摘している。そして、ダブルゴール・コーチとは、選手が競技から離れたずっと後になっても人生を変えてくれた人として思い出してもらえよう、そんなコーチのことであり、選手たちが試合に勝利するだけでなく、人生においても成功できるようにサポートすることが重要であると述べている。

公益財団法人日本スポーツ協会が行なっている公認スポーツ指導者養成カリキュラムにおいても、ダブルゴールの概念が指導項目に

入っている。これは、競技力・パフォーマンスの向上と人間力の育成という2つの行動基軸に焦点を当てた、図子（2017）の示したダブルゴールを基にした考え方（図1）であり、前述のThompsonのダブルゴール・コーチングと同じダブルゴールという語彙を使っているものの、以下に述べる通り、若干異なる概念である。

図子のダブルゴールの特徴は、ダブルゴールという語彙を、競技力・パフォーマンスと人間力という競技者を構成する2つの要素の意味で使っている点にあると考えられる。これは、コーチが競技者を評する際に、あの選手は競技力は高いけど人間力は劣るよねとか、あの選手は競技力はそれほど高くないけど人間力は素晴らしいよねといった使い方をすることがあるように、一人の競技者の能力を、競技力と人間力という2つの構成要素に分解して捉える立場と言える。そして、図子はこの2つの構成要素となる能力を向上させることがそのままコーチングの2つの目的となり、コーチの思考と行動は、競技力・パフォーマンスの向上を目的とする指導行動と、人間力の向上を目的とする育成行動に大別できると述べている。図子（2014）は、PerformanceとMaintenanceの2軸からリーダーシップを4つのタイプに分類する三隅（1966）のPM理論を援用する形で、2つの基軸からなる4つのコーチングスタイルを設定するコーチング型PMモデル理論へと発展させている（図2）。

このように、図子が競技者を構成する2つの要素とその育成にダブルゴールという語彙を用いたのに対して、Thompsonのダブルゴール・コーチングには、最初の著作The Double-Goal Coach

（2003）および前出の2010年の著作のいずれにおいても、競技者を構成する要素という視点はなく、コーチングの目的と目標という2つの階層で同じDouble-Goalという語彙を使用していることがわかる。ThompsonのDouble-Goalを要約すると以下の通りとなる。目的と目標の各レベルにおいて、それぞれDouble-Goalとして設定されている語彙に違いがある点に注意が必要であろう。

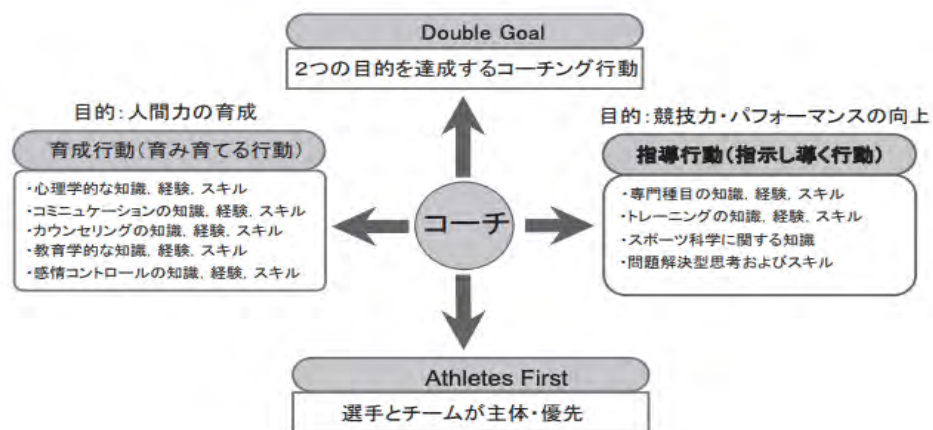


図 1. プロフェッショナルコーチにおけるダブルゴールと
アスリートファーストのための二つの行動基軸
(図子, 2014)

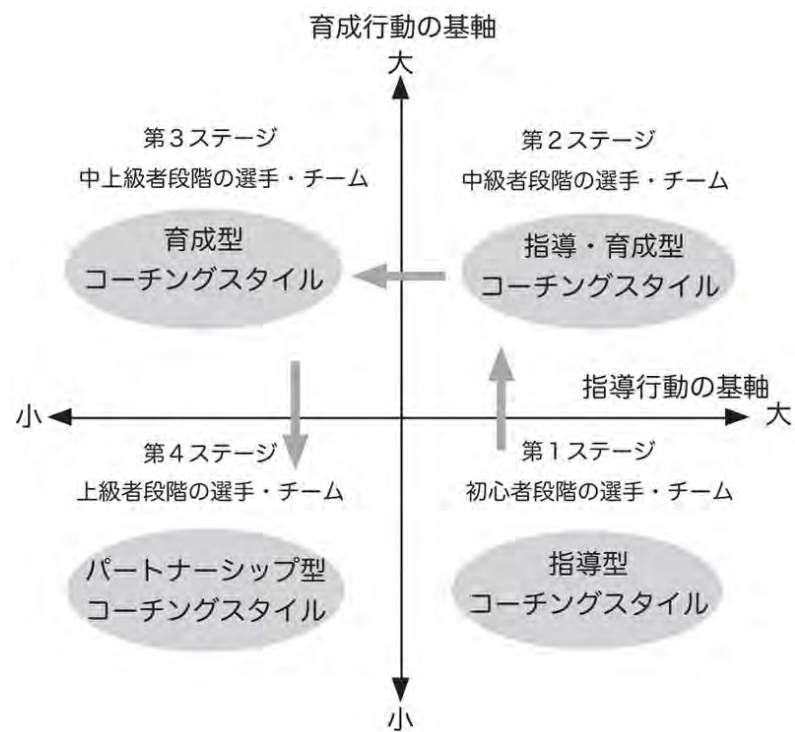


図 2. プロフェッショナルコーチのためのスポーツコーチング型
PMモデル（図子，2014）

- ・ 目的のレベルで使用される Double-Goal= Winning と Life lessons

これは， purpose や aim の意味で用いられる Goal であり， 何故スポーツをするのか？ 何のためにスポーツを行うのか？ という問に対応する Goal と考えられる

- ・ 目標のレベルで使用される Double-Goal= Scoreboard と Mastery

これは， goal setting（目標設定）の意味で用いられる Goal であり， 何を目指すのか？ 何を達成するのか？ という問に対応する Goal と考えられる

前述したように， 図子は， 競技力・パフォーマンス育成と人間力育成というコーチングの 2 つの目的を直行する基軸に設定し， そのバランスによって 4 つのコーチングスタイルを仮定している． この図子のコーチングスタイルの考え方は， 最も優れた指導スタイルというものはなく， 指導対象に応じて最適なコーチングスタイルがあり， コーチは指導対象に応じたコーチングスタイルを変えていくことが重要であることを表現している． これに対して， Thompson（2003）は， コーチングの目的を Winning に設定すると， どんな手段を使ってもいいから勝つことを目指すコーチング， すなわち勝利至上主義に至り， コーチングの目的を Life lessons に設定すると， 積極的な性格特性を獲得させることを目指すコーチング， すなわちポジティブコーチングに至ると述べている． このことは， Thompson はコーチングの目的によって， コーチングが異なる 2 つタイプへと必然的に方向付けられてしまうという前提に立っていることを示唆している．

また， 目標の水準では， コーチングの目標をスコアボードに設定することは， 換言すると「1 番になる」あるいは「〇〇に勝つ」などの outcome goal（結果の目標）を設定することであり， コーチングの目標を熟達に設定することは， 換言すると「〇〇のときには□□する」あるいは「次の試合では〇〇ができるようになる」などの effort goal（行動の目標）を設定することであると述べている． そ

して，Thompson のダブルゴール・コーチングの最も大きな特徴は，スコアボードと熟達という二つの目標のバランスをとるという考え方ではなく，Mastery の先に Scoreboard があるという考え方を強調している点であり，Scoreboard を追えば追うほど実際には - Scoreboard から遠ざかり，Mastery を追えば追うほど結果的には - scoreboard に近づいていくと逆説的に説いていることである．

本研究では，コーチが勝利至上主義を克服していくために有用となる知見を導き出すという視点に立つため，図子が設定した競技者の能力を構成する 2 つの要素としてのダブルゴールではなく，Thompson の Double-Goal の考え方を採用し，以後日本語でダブルゴール，ダブルゴール・コーチングと表記する．その上で，育成行動の基軸と指導行動の基軸を設定して 4 つのコーチングスタイルに分類する図子の考え方は，あくまでもコーチの熟達過程においてコーチングのスタイルが変化していく様子を解釈するための視点として使用していく．

3. ダブルゴール・コーチングで用いられるコーチング・メソッド

1) ELM tree of Mastery

Thompson (2010) は、勝利至上主義コーチングが持つ最大の問題点に、勝利は競技者やコーチ自身に直接コントロールすることができないものであり、直接コントロールすることができない結果としての勝利を意識すればするほど不安は高まり、自信は低下することをあげている。トップ選手のコーチングでは、ジュニア選手のコーチングよりも結果としての成果が求められる度合いが高くなる（坂井，2017）。また、ダブルゴール・コーチングでは、競技者の意識をコントロール可能なものに向けさせることによって不安を低下させ、自信を高める方法を提唱している。その具体的な方法が「ELM Tree of Mastery（熟達達成の為の ELM ツリー）」と呼ばれるコーチング・メソッドである。

ELM とは、Effort, Learning および Mistake の頭文字をとったものであり、コーチや競技者が自分自身でコントロールできる要素を表している。具体的には、ELM それぞれに以下の意味が込められている。

Effort：常に最善の努力を尽くす

Learning：自分たちに起こったこと全てから学びを得ようとする

Mistakes：ミスがあってもすぐに立ち直り自分たちの歩みを止めない

勝利至上主義コーチングとダブルゴール・コーチングでは、（表 1）に示したように意識を向けるポイントが異なるため、結果的に失敗に対する態度が変わってくる。勝利至上主義コーチングにおけるハラスメントは、主に競技者の失敗に対するコーチの叱責や体罰といった態度に現れることが多く報告されており（Thompson, 2010），ダブルゴール・コーチングにおける失敗に対する態度は、バイオレ

ンスを伴ったコーチングを克服するためにコーチに必要なとなる具体

表 1. 勝利至上主義コーチングとダブルゴール・コーチングの対比

	勝利至上主義コーチング	ダブルゴール・コーチング
意識を向ける ポイント	outcome goal (結果の目標) 相手に勝つこと	effort goal (行動の目標) 学習することや向上すること
	↓	↓
比較対象	他者との比較	自分との比較
	↓	↓
失敗に対する態度	失敗は許されない 失敗を避ける	失敗は成長のために必要不可欠である 失敗から学ぶ

Thompson (2010) から薦田作成

的な思考と行動として、極めて重要な意味を持つと考えられる。

2) Emotional Tank

Thompson は、上述した競技者の失敗に対するコーチの思考と行動に加えて、コーチングにおいては常に競技者の精神状態やエネルギーレベルに留意し、それが高まることを支援するための思考と行動を取ることの重要性を述べている。そのために、自動車のガソリントankをメタファーにした Emotional Tank（感情のタンク）という概念を提唱している。自動車のガソリントankに燃料が満タンであれば、自動車はどこまでも走っていくことが可能なように、競技者の Emotional Tank が満タンであれば、競技者はポジティブにスポーツに取り組んでいけるという考え方である。

この Emotional Tank について Thompson は、タンクを満たす人を Tank Filler、タンクの栓を抜いて Emotional Tank を空にする人を Tank Drainer という語を使い、ダブルゴール・コーチに必要な思考と行動について実践的な示唆を提供している。表 2 に、Tank Filler と Tank Drainer が使う言葉と態度の具体例を示した。

表 2. Tank Filler と Tank Drainer が用いる言葉の具体例

Tank Filler	具体例
嘘がなく，かつ具体的な誉め言葉	「よく頑張った！第 4 クォーターまでよく戦い抜いたよ」
感謝を示す	「ボール拾いを手伝ってくれてありがとう」
傾聴	「他にどうやったら相手方の ゾーンディフェンスを責められると思う？」
態度	微笑む，拍手する，頷く，グッドサイン
Tank Drainer	具体例
批判や訂正	「もっとルーズボールを取るべきだったよ。 もっと積極的にならないと．マリアみたいだね」
皮肉	「あのプレーの時，君は何を考えていたんだ？」
無視	「今はダメだ」「そのうちね」
態度	しかめ面，呆れた目，深いため息

Thomson (2010) から薦田作成

4. コーチング・フィロソフィーに関する研究

現在，指導者が持つ考え方については，指導観，メンタルモデル，コーチング・コンセプトといった様々な用語が用いられ研究が行われている（宗宮，2016）．本研究では，これらの全ての用語をコーチの哲学として捉え，より包括的で概観を探ることのできるコーチング・フィロソフィー（檜塚・坂井，2011）という言葉を用いて論を進める．コーチング・フィロソフィーの用語におけるフィロソフィー（哲学）の辞書的定義は，①世界・人生などの根本原理を追求する学問．②各人の経験に基づく世界観や人生観．また物事を統一的に把握する理念（松村，2012）とあり，この定義のうちで着目するところは②各人の経験に基づく世界観や人生観．また物事を統一的に把握する理念であり，このことがコーチング・フィロソフィーを定義する際に鍵となると考えられる．

スポーツにおいて指導者が確固たるコーチング・フィロソフィーを持つということは，コーチングの対象となる選手達に，どのような人生哲学，人生観，世界観を持たせるかに関わってくることでありと捉えられる（長門，2004）．吉井（1986）は，「コーチのフィロソフィーは，コーチのすべての物事に対しての考え方や態度のうえに反映する行動の規範となるものである」と定義づけている．また，後藤（2012）は，コーチング・フィロソフィーは，様々な経験から得られた独自の考え方であり，自己の最善を尽くす姿勢が反映されるものと定義している．したがって，指導者は指導上起こりうるであろう諸問題を，成功裡に解決することができるような汎用的なフィロソフィーを持つことや，そのようなフィロソフィーを持つべく努力することの重要性が説かれることになるのである（長門，2004）．本研究ではコーチング・フィロソフィーを，自身の体験で形成された知識・信念に基づく指導する際の根本的な考え方と定義する．これまで，コーチング・フィロソフィーに関して，以下の先行研究が行われている．北村（2004）は，プロフェッショナル・サッカー指導者の指導実践を手掛かりに，スポーツ選手の熟達化に作

用する指導者の思考の構造は、熟達化、意識化および支援の3つのカテゴリーによって構成されていることを明らかにした。岸

(2012)は、野球における指導法の相異が状況認識および意思決定に及ぼす影響について検討した結果、選手が自分の頭で理解し、意思決定を行い、プレーに活かせるようになるには、ティーチング指導ではなくコーチング指導、すなわち選手の考えを引き出す導出的指導が有効であることを報告している。

2つの研究は、いずれも指導者のコーチング・フィロソフィーがどのようなものであるかを明らかにするものであるが、コーチング・フィロソフィーの形成過程、すなわちどのように形成されていたのかに焦点を当てた研究ではない。トップコーチのコーチング・フィロソフィー形成過程に焦点を当て、コーチのどのような体験がコーチング・フィロソフィー形成に影響を与える経験となったのかを明らかにすることは、今実際にコーチングしている中堅コーチにとっては自身のコーチング活動を振り返り、指導の良い点と悪い点を再確認することに繋がり、これからコーチングを始める若手コーチにとっては、トップコーチのコーチング・フィロソフィーを自身のコーチング活動に活かすことに繋がると考えられる。なお、本研究では、体験という場合は、行動することそれ自体を指し、経験という場合には、行動をした上で、知識や技能を身に付けることを指すこととする(広松, 2018)。

5. コーチの実践知を明らかにする質的研究の重要性

本研究では、実践知を、実践の場で求められている熟慮された行為とともにある知（會田，2011）と捉える。熟達した指導者が獲得した実践知は、暗黙的、私秘的な動感身体知であるために（金子，2005），通常は実践の中に埋め込まれている（楠見，2012）。しかし、それは、他の指導者に分かる形にすることによって次の世代に受け継ぐことができる（會田，2014）。実践知のような量的な指標が存在しないものを対象とした研究に、質的研究がある（無藤ほか，2004）。質的研究の目的は、生きた人間がどのように身体を使い、ものを作り出し、また自らのそして他の人々の身体について考え、感じ、どのような人間関係を築いているかについて、明らかにすること（波平・道信，2005）である。その利点は、調査された人々の考えや体験、またその背後にある理論を全体的に理解し、データに根ざしたかたちで新しい概念や理論を発見できるという点にあり、質的分析で生成された概念や理論は日常生活や現場などの現実に着しているという特徴を持っている（小田，1999）。また、會田（2014）は、コーチングに関する実践知を事例として提示する意義を、①コーチとしての自己の学びに役立てられること、②他者の学びに役立てられることと述べている。

指導者の実践知に関する事例研究には、ハンドボールにおける指導観（楠本ほか，2015）、サッカーチームにおけるメンバー選考に関する実践知（小井戸ほか，2016）、卓越したテニス指導者におけるグラウンドストローク指導の実践知（北崎，會田，2020）などがある。いずれの研究においても、1名の指導者を対象に研究されているが、個別事例を対象とした研究で明らかになる実践知は、目の前の選手にも当てはまるかもしれないとコーチが類推できるように厚い記述（西倉，2005）で明示できれば、すなわち状況を全く知らない人でもその行動がよく理解できるように、行動そのものだけでなく文脈も含めて説明できれば、コーチングの実践現場において有用な、次の世代に伝承できる知になる（會田，2014）。また會田

(2014) は、熟達したコーチの直観的把握力とその形成過程については、コーチの学びの教科書になるとも述べている。

また近年、女性スポーツを発展させるための問題点や方策が示されている。金谷(2015)は、どの年齢カテゴリーにおいても男性指導者の数が圧倒的に多く、指導者の世界も一般社会の構造と同様に

「男性社会」の風潮が残っていること、女性指導者のスポーツとの関わりは、ライフイベント等のきっかけを機にスポーツから離れるという傾向が多くみられることを報告している。一方で、女性指導者のなかには、スポーツの現場から一時的にでも離脱することを望まず、自身のライフイベントを先延ばしにする、あるいはあきらめる者も少なくない(金谷, 2015)。このようにスポーツにおける数少ない女性指導者は幾多の問題と向き合いながら自分なりのスポーツとの関わり方を決め、日々競技者と向き合っているのである。

Werthner(2005)は、女性スポーツ指導者は女子選手に対して指導の道を勧める傾向があることを報告している。しかし Massner

(2009) は、現代の若い男性にとって女性の同僚・同級生の存在は当たり前であるが、そこからさらに女性のリーダーを自然に受容するようになるには女性リーダーの元で多様な経験をする必要があること、また若い女性にとってロールモデルとなる女性リーダーの存在は、自信の獲得や自分自身の潜在能力の実感に繋がるが、その存在が不在となると彼女たちはスポーツにおける自分のキャリアを諦める傾向があることを指摘している。山口(2017)は、女性の指導者が増えれば、指導についての新たな視点や視座が生まれてくる可能性があり、女性種目は女性が監督するのが当たり前で、彼女たちの活躍する姿が、次の監督候補である女性コーチの背中を押してくれればと、女性指導者の増加に対する期待を述べている。これらのことからライフイベントとスポーツ指導を両立させている女性のトップコーチがもつ実践知を、そのコーチの熟達過程という文脈とともに明らかにすることは、コーチング領域における極めて重要な研究課題であると考えられる。

6. コーチの実践知を明らかにする質的研究の方法論

質的分析の手法の一つにグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach: GTA）がある。GTAは、インタビューなどで得られた記述データを切片化し、切片化したデータをカテゴリーごとに分け一般化可能な概念や理論を構築するという特徴がある。データの切片化は、作業定型化を容易にするため解析過程に客観性を持たせやすい利点がある一方で、切片化されたデータからは文脈が失われることが多く、それぞれのデータが持つ語りが劣化する懸念がある。この欠点を補うため、木下は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach: M-GTA）を提示している。M-GTAは、データの文脈を意識し、データの切片化をなるべく避け、データそのものがもつ語りを多く残しながら、現象ごとの影響関係や行動推移のパターン、システム変化など、何らかのプロセスを構造化していく方法である。M-GTAのメリットは、インタビュー対象者などの語りとして収集されたデータが持つ文脈をそのままに概念をつくることで、データの持つ本来の物語がそのまま結果に反映されやすいことである。対してデメリットは、研究者の主体的解釈を積極的に活用するため、研究者の経験や質によって結果にばらつきが出やすいという質的研究の一面が表れやすいことである。

大谷（2007）が提唱しているSCAT法（Steps for Coding and Theorization）も、言語データを断片化して解析する質的研究のための手法であり、表3に示したSCATの分析フォームを用いて、セグメント化したデータをテキスト欄に記述し、それぞれに①注目すべき語句を抜き出す、②抜き出した語句を別の言葉に言い換える、③言い換えた語句を説明するようなテキスト外の概念で言い換える、④前後や全体の文章を考慮して記述内容を説明することができるテーマや構成概念を記述するという4つのステップコーディングでテキストの「脱文脈化」を図る。しかし、④のステップで抽出した構成概念間の関係性を検討しながらそれらを再構造化して「ストーリー

表 3. SCAT の分析フォーム（大谷，2007）から薦田が作成

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外概念	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
1							
2							
3							
4							
5							
6							
7							
番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外概念	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
ストーリーライン（現時点で言えること）							
理論記述							
さらに追求すべき点・課題							

ライン」と呼ばれる文章を作成する．つまり，ストーリーラインの作成において，4つのステップコーディングで脱文脈化した分析結果を「再文脈化」する手法であると表現できる．テキストのセグメント化とそれに基づく4ステップのコーディングによって脱文脈化を行うことで，テキストの文脈の制約から解放されつつ分析を深めながら，最後にストーリーラインで再文脈化を行い，意味を再生・再創造する．最終的に，ストーリーラインを基に理論を記述する分析方法である．

このように，まず脱文脈化してそれを再文脈化するという特徴的な手続きと，再文脈化した結果から理論記述を行うという手続きを有しているため，SCAT法はきわめてコンパクトなデータ分析手法でありながらも高度な質的分析を行うことができる（大谷，2019）．また，SCAT法では，コーディングの手順と手法が明確に定められており，研究資料としたテキストデータ全てを分析に使用するという特徴があることから，研究者の主体的な解釈を積極的に用いながらも一部の都合の良いデータだけを用いた恣意的な解釈に陥る危険性が少なく，質的分析の初学者にも取り組みやすい手法と考えられる．また，SCAT法は，一事例のインタビューデータや，アンケートの自由記述欄などの比較的小さなデータの分析にも用いられている実績がある（大谷，2007）．本研究では，一事例という比較的小さなデータを扱うことや，文脈そのものの取り扱いに不慣れた初学者がデータを取り扱うことから，大谷（2007）のSCAT法を用いて分析を行うこととした．

7. 研究目的

本研究では，勝利至上主義コーチングに陥らずに大学日本一を達成したトップコーチが，どのような体験を契機にコーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドを確立していったのか，そのプロセスをダブルゴール・コーチングに着目しながら，質的研究の方法を用いて明らかにすることを目的とした．

第Ⅱ章 方法

1. 調査対象者

本研究は，勝利至上主義コーチングに陥らずに大学日本一を達成したトップコーチとして，2020年10月現在武庫川女子大学カヌー部のプロコーチである橋本千晶氏（以下「橋本コーチ」と略す）を調査対象者とした．

橋本コーチは，武庫川女子大学においてプロコーチとして11年の指導実績があり，2012年の全日本学生選手権大会（以下「インカレ」と略す）でチームを女子総合優勝に導いた後，2020年までインカレ9連覇を達成中である．また，国内大会に限らず，国際大会で活躍する選手も多数輩出するなど指導実績が豊富であることから，トップレベルのコーチとして本研究の対象とした．以下に，橋本コーチの指導歴を記す．尚，以下の内容は本人へのアンケート調査およびインタビュー調査によって得られたものである．

1969年4月24日生まれ（2020年10月現在満51歳）の橋本コーチは，高校時代はバレーボール部の選手として活動した．武庫川女子大学入学と同時にカヌー部へ入部した．大学卒業後も選手生活を続けるなど，カヌー選手としても活躍した．現役引退後は一般企業へと就職するが，1996年（27歳）に台湾でカヌーのコーチを始めた．翌1997年（28歳）に北海道南富良野高校カヌー部の外部コーチを始めた．更に翌1998年（29歳）に武庫川女子大学カヌー部学外コーチに着任した．2009年4月（40歳）からは武庫川女子大学カヌー部プロコーチとなり，2012年のインカレにてチームを女子総合優勝へと導いた．以来，現在に至るまでインカレでは毎年総合優勝を重ね，9連覇を達成している．

橋本コーチには，調査に先立ち文書と口頭にて本研究の趣旨や調査内容を説明し，調査協力を依頼し，承諾を得た．また，いずれの

質問項目についても回答を拒否できることを伝えた。本研究では、研究成果を実名で公開することから、対象者本人への了解を得た。なお、対象者の実名を公開することは、読み手が個別事象の中により深く降りていくために必要な情報である。個人のプライバシーの権利は、ひとりにしておかれる権利という消極的な概念に加えて、自己に関する情報の流れをコントロールする権利という積極的な概念を包含するものになってきている（堀部，1994）。前田（2011）は、看護研究の分野において、対象者の固有名詞を排除しても個人が特定されるケースが存在し、固有名詞の排除が必ずしも個人情報排除にならないと述べている。本研究では、固有名詞を排除しても個人が特定されやすい事例であることと考え、実名での公開とした。

2. 調査方法

本研究は、コーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドに関する実践知を明らかにすることが目的であることから、数値化し難いデータを扱うことになる。すなわち、対象者の視点や、経験で作られた世界観、世界と対象者の関係性、対象者にとっての物事の意味などを探ることから、質的研究の手法であるインタビュー調査法を採用した。対象者には研究の目的と概要を説明し、会話をICレコーダーに録音する了承を得た。インタビューする内容については事前に質問や流れを決め、インタビューの経過、内容次第で質問や順番を変える半構造化面接法を採用し、データ収集を行った。なお、本研究では、具体的に以下の1)～4)の手続きによって、橋本コーチのコーチング・フィロソフィーおよびコーチング・メソッドに関する語りのデータを取得した。

1) アンケート調査

語りの内容は，対象者へのインタビュー調査によって収集する．限られたインタビュー調査の時間内で，コーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドを聞き出すためには，インタビュー調査に先立ち，対象者の内省を活性化させておくことが重要である．本研究では，インタビュー調査の前に，調査内容に対して自由記述式で回答を求める會田（2011）のアンケート調査票を参考にした事前アンケート調査票を作成し，対象者に回答してもらった．

巻末の資料に，実際に使用した事前アンケート調査票を添付した．その内容は，以下の9項目である．

- （1）属性 氏名，年齢，競技，過去の指導成績
- （2）コーチ生活全般について
- （3）自分のコーチング・フィロソフィーの特徴について
- （4）他者のコーチのコーチング方法と自分のコーチング方法を比較して
- （5）全日本学生選手権大会で優勝するためには
- （6）ダブルゴール・コーチングについて
- （7）コーチングにおける厳しさについて
- （8）競技成績や指導方法の変化について
- （9）コーチング目標について

2) インタビュー調査

- （1）聞き手の現場感覚および生成的視点

対象の詳しい記述が必要である質的研究のインタビューでは，聞き手の現場感覚および生成的視点が重要である（無藤，2004）．実践知を聞き取る先行研究においては，聞き手が語り手と同様の経験を積んでいることが役に立つと報告されている（桜井・小林，2005）．本研究における聞き手は本研究の筆頭著者であり，カヌー競技を専門とし，橋本コーチの指導を4年間受けたインカレ4～7

連覇時の選手である。現在は、橋本コーチと共に武庫川女子大学カヌー部や附属中学・高等学校カヌー部の指導を行っている。このことは、インタビューの聞き手が対象者の語りを深く理解し、語りにリアリティーを感じる現場感覚および生成的視点をもっている（會田，2008）ことを意味していると考えられる。

質的研究では、他の研究者がその調査研究を行ったとしても、同じような結果が得られるという意味での信頼性は問題にされない。むしろ、調査者の技法の違いを積極的に認めて、その違いや特徴が明確な形で伝えられ理解されることが重要である（桜井・小林，2005）。本研究においては、他の質的研究の方法と同様に、調査者と調査過程を記述することによって、手続きの透明性を高め、研究の信頼性を保証する（大谷，2008）。

（2）インタビュー調査内容と方法

インタビューは、半構造化面接法に則って行った。インタビューガイドは、事前に対象に行った事前アンケート調査票を元に作成した。具体的な質問内容は、①コーチ歴について（コーチになるきっかけ）、②コーチング・フィロソフィーについて、③コーチングにおける厳しさについての3点とした。

インタビュー調査は、2020年2月13日に行った。インタビューは90分間程度であった。すべての発言は、ICレコーダーを用いて録音した。

3) 逐語録の作成とメンバーチェック

質的研究における信頼性を保証するために、どれが被調査者の言ったことで、どこから研究者の解釈が始まるのかがチェックできるような形で、データの成立過程を明らかにしておくことが重要である。本研究では、初めにインタビュー調査で収集された音声データから全ての会話を逐語録にした。次に語りの内容を対象者に送付し、対象者の語りに加筆や修正がないかを確認した。

4) SCAT による分析と・メンバーチェック

本研究では，大谷（2007）の SCAT の分析フォーム（表 3）を用いてステップコーディングを行い，以下の手順で橋本コーチのコーチング・フィロソフィーおよびコーチング・メソッドの特徴を明らかにした．

手順 1. セグメント化したデータをテキスト欄に記述する

手順 2. ステップ①注目すべき語句を抜き出す

手順 3. ステップ②抜き出した語句を言い換える

手順 4. ステップ③抜き出した語句を一般的な概念で言い換える

手順 5. ステップ④記述内容を説明することができるテーマや構成概念を記述する

手順 6. 必要に応じて疑問や課題を記述する

手順 7. 構成概念を紡いでストーリーラインを記述する

手順 8. ストーリーラインを橋本コーチに送付して解釈に誤りがないか確認する

手順 9. 手順 8 を経たストーリーラインを熟読し，橋本コーチのコーチング・フィロソフィーおよびコーチング・メソッドの特徴についての理論記述を行う

本研究で使用した，アンケート調査用紙，SCAT のフォーマット，全ての資料は資料として巻末に添付した．なお，本研究は武庫川女子大学研究倫理委員会の承認（承認番号 No. 19-60）を得た．

第Ⅲ章．結果

1. 4ステップコーディング

表 4 に，SCAT の分析フォームを使った 4 ステップコーディングの一例を示した．テキスト欄に記述されたインタビュー調査の逐語録から，SCAT の 4 ステップコーディングの手順 1～手順 5 を経て，表中の太枠で囲んだテーマ・構成概念の列に全 118 個の構成概念を抽出した．構成概念は，全て名詞句で抽出した．分析フォームの一番左の列にはインタビューの時系列に沿って 1～181 の通し番号を割り当てた．巻末に，資料として 4 ステップコーディングを行った全データを添付した．

2. ストーリーライン

4 ステップコーディングによって抽出した全 118 個の名詞句の構成概念を全て使い，接続詞や動詞で紡ぎ，構成概念間の関係性を表したものをストーリーラインとして記述した．橋本コーチがコーチングを開始してから現在に至るまでの約 24 年は，コーチのおかれていた環境，体験した出来事，コーチの思考と行動の変化といった観点から，大きく 4 つの期に別けることができた．表 5，表 7，表 9，表 11 に，第一期から第四期までの SCAT 分析フォームを使ったステップコーディングを示した．橋本コーチが 1 つの発言のまとまりの中で複数の期に含まれる内容を語っている行があるため，表 7，表 9，表 11 の期ごとの分析フォームの一番左の列の番号はその期を含む全ての行が番号順になっている．

表 6，表 8，表 10，表 12 に，第一期から第四期までの SCAT による分析から作成された橋本コーチのストーリーラインを示した．ストーリーラインの文章中の「 」内は，4 ステップコーディングによって抽出した構成概念を表している．

表4 SCAT分析フォームを使った4ステップコーディングの一例

番号	発話者	テキスト	①テキスト中の注目すべき語句	②テキスト中の語句の言い換え	③左を説明するようなテキスト外の概念	④テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	⑤疑問・課題
1	聴き手	「あなたの人生で最初にコーチになりたいと思ったきっかけは何ですか」					
2	コーチ	きっかけは一般企業で働いている時に、それまでも何かに教えたいと思っていたんですけど、自分にはまだそんな知識も何もなかったんで、自分に引き出しを色々つけてからそういう職業に就きたいなと思っていたのが、その一般企業で働いている時に、今やと思ったからです。	きっかけ/何かに教えた い/今やと思った	最初のきっかけ/自分の夢/直観	生涯の中でやりたいこと/自分の人生を変えようとした瞬間	自分の中にある本当の欲求と の出会いの瞬間	・一般企業での経験 で生かされていることは何か
3	聴き手	「その今や、は急にですか」					
4	コーチ	事務作業という普通のオフィスで働いていたので、ここでは自分の何か可能性が見つけられないと思ったもので、やっぱり何か教えたいとすごく思いました。その何日か後には社長室に行って辞めさせて頂きに行きました。	事務作業/オフィスで働いていた/自分の何か可能性が見つけられない/何かに教えた	一般企業のOL/書をされた 未来/自分の夢/違和感	一般職への違和感/未来への閉塞感/転機/決断	企業の一般事務職への違和感と 未来への閉塞感から辞職を 決断	・どんな気持ちだったのか/バックパッカーの経験について
5	聴き手	「それいくつ時ですか」					
6	コーチ	26、ちょっと待ってください。あまりにもいろんなことがありすぎて26か7です。どっかが忘れました。					
7	聴き手	「27歳でコーチになったということですね。いきなりコーチになったのが台湾のコーチとすることですね」					
8	コーチ	海外に興味があったので、できることなら海外のコーチとか先生になりたかったです。	海外に興味/ 海外のコーチ、先生になりたかった	国際的/自分の夢/国際交流/グローバル/教師	グローバルな活動	グローバルで活躍するコーチ	・海外への興味はいつからあったのか
9	聴き手	「これはどんな縁が台湾にあつてですか」					
10	コーチ	海外に行きたかったんで、カヌー連盟に自分で問い合わせをして、台湾がカヌーを始めた頃だったので、もしかして行けるかなと思い聞きました。これは夏限定とかで1年も行ってないです。そういう契約でした。	海外に行きたかった/自分で問い合わせ/台湾	グローバル/積極性/縁	主体的な行動で得た海外での指導機会	縁を手繰り寄せる主体性	・初めての指導が海外に決まった時の迷いや不安
番号	発話者	テキスト	①テキスト中の注目すべき語句	②テキスト中の語句の言い換え	③左を説明するようなテキスト外の概念	④テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	⑤疑問・課題

表5. 第一期のSCAT分析フォームを使った4ステップコーディング

番号	発話者	テキスト	①テキスト中の注目すべき語句	②テキスト中の語句の言い換え	③左を説明するようなテキスト外の概念	④テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	⑤疑問・課題
1	聞き手	「あなたの人生で最初にコーチになりたいと思ったきっかけは何ですか」					
2	コーチ	きっかけは一般企業で働いている時に、それまでも何かに教えたいと思っていたんですけど、自分にはまだそんな知識も何もなかったんで、自分に引き出しを色々つけてからそういう職業に就きたいなと思っていたのが、その一般企業で働いている時に、今やと思ったからです。	きっかけ/何かに教えた/今やと思った	最初のきっかけ/自分の夢/直観	生涯の中でやりたいこと/自分の人生を変えようとした瞬間	自分の中にある本当の欲求とこの出会いの瞬間	・一般企業での経験で生かされていることは何か
3	聞き手	「その今や、は急にですか」					
4	コーチ	事務作業という普通のオフィスで働いていたので、ここでは自分の何か可能性が見つけられないと思ったもので、やっぱり何か教えたいとすごく思いました。その何日後には社長室に行って辞めさせて言いに行きました。	事務作業/オフィスで働いていた/自分の何か可能性が見つけられない/何かに教えたい	一般企業のOL/蓋をされた未来/自分の夢/違和感	一般職への違和感/未来への閉塞感/転機/決断	企業の一般事務職への違和感と未来への閉塞感から辞職を決断	・どんな気持ちだったのか/バックパッカーの経験について
5	聞き手	「それいくつの時ですか」					
6	コーチ	26、ちょっと待ってください。あまりにもいろんなことがありすぎて26か7です。どっちか忘れました。					
7	聞き手	「27歳でコーチになったということですよ。いきなりコーチになったのが台湾のコーチと言うことですよ」					
8	コーチ	海外に興味があったので、できることなら海外のコーチとか先生になりたかったです。	海外に興味/海外のコーチ、先生になりたかった	国際的/自分の夢/国際交流/グローバル/教師	グローバルな活動	グローバルで活躍するコーチ	・海外への興味はいつからあったのか
9	聞き手	「これはどんな縁が台湾にあってですか」					
10	コーチ	海外に行きたかったので、カヌー連盟に自分で問い合わせをして、台湾がカヌーを始めた頃だったので、もしかして行けるかなと思い聞きました。これは夏限定とかで1年も行っていないです。そういう契約でした。	海外に行きたかった/自分で問い合わせ/台湾	グローバル/積極性/縁	主体的な行動で得た海外での指導機会	縁を手繰り寄せる主体性	・初めての指導が海外に決まった時の迷いや不安
11	聞き手	「じゃあ北海道の南富良野高校はそこから帰ってきて、これも何かの繋がりで?」					
12	コーチ	帰ってきた時に、連盟の人にじゃあこれも探してるけど行ってくれへんと言われて、探していたのでやりますという感じで、これも夏限定。	連盟の人/じゃこれも/行ってくれへん/探していた	再び訪れた指導機会/タイミング/指導が評価される	海外での指導が評価され次に得た国内での指導機会	コーチングが自分の職へと転換していったきっかけ	・高校生への指導で得たこと
13	聞き手	「これは先生とかじゃなくてコーチだけですか」					
14	コーチ	コーチだけで、カヌー部を教えていた先生がいなくなったかなんかで、カヌー部はもともとあったので、それに行きたという感じです。台湾の時も一応カヌー部というより、学校単位ではなく市とか省とかなんているんな子が集まっているクラブチームみたいな感じでした。	コーチだけ/カヌー部はもともとあった/台湾の時/クラブチーム	専門職/国際的/地域の触れ合い	コーチング/グローバル化	カヌーを教えるという夢と海外で教えるという夢の同時スタート期	・台湾のどう受け入れられたのか/ホワイトボードで説明するのはこの時の経験からなのか
15	聞き手	「台湾だと中国語ですよ。それは何か通訳か何かについているんですか」					
16	コーチ	お世話になったお家のおばあちゃんが少し喋れました。あとは筆談で、漢字を書けば理解してくれるので、筆談で、ノートを持って、メニューの説明とかをしていました。	お世話になった家のおばあちゃん/筆談/メニューの説明	言葉の壁/できる限りの指導方法	今、できる最大限の方法を使った指導	説明責任 思考の言語化	・台湾の指導で得たこと
17	聞き手	「一般企業で働いていて、教えたいという欲求がもともとあったと思うんですけど、この台湾に行った夏ですね、それから北海道の高校生に対する集中的な指導この2つは教えたいという欲求を満たすきっかけにつながったんですか」					
18	コーチ	もっと教えたいと思いました。なかなか思っていることができなかったし、知識とかもなかったんで、もっとやりたいもっとやりたいと思いました。けどカヌーのコーチというものが日本にはなかなか無かったので、それだったら先生になって、どこかにカヌー部を作ろうと思って考えました。	もっと教えたい/もっとやりたい/もっとやりたい/カヌー部を作ろうと思って	自分の欲/自分の夢をかなえたい気持ち	教師志望ではなくカヌー指導を強く志望	更なる指導意欲のめばえ	・先生になってカヌーを教えたいと具体的にどのような行動を起こしたのか
番号	発話者	テキスト	①テキスト中の注目すべき語句	②テキスト中の語句の言い換え	③左を説明するようなテキスト外の概念	④テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	⑤疑問・課題

表 6. SCAT による分析から作成された橋本コーチのストーリーライン

橋本コーチストーリーライン第一期

橋本コーチは、「自分の中にある本当の欲求との出会いの瞬間」を経て「企業の一般事務職への違和感と未来への閉塞感から辞職を決断」し「コーチングが自分の職業へと転換」していった。「カヌーを教えるという夢と海外で教えるという夢の同時スタート期」では「縁を手繰り寄せる主体性」を活かし「グローバルで活躍するコーチ」となる。台湾では日本語が通じないため、「思考の言語化」を行なった上で「簡潔で明確な説明」を筆談によって行うことを体得すると同時に、「更なる指導意欲のめばえ」を感じた。

表7-1 第二期のSCAT分析フォームを使った4ステップコーディング

番号	発話者	テキスト	①テキスト中の注目すべき語句	②テキスト中の語句の言い換え	③左を説明するようなテキスト外の概念	④テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	⑤疑問・課題
19	聞き手	「それで武庫川女子大学のカヌー部に就いてそこから10年くらい学外コーチだと思うんですけどそれはどんな経緯で」					
20	コーチ	私が選手だった時にコーチだった方がおられたんですけど、その人に手伝ってと言われて行く様になって、最初はずっと海外に行かれていることが多かったのでお留守番みたいな感じで、コーチが退かれたので私一人になったのでそこから、一人で見るようになりました。	手伝ってと言われて/コーチが退かれた	アシスタントコーチ/外部コーチになる	母校に戻る/チームの引き継ぎ	アシスタントコーチからヘッドコーチ	・母校のカヌー部に戻れた時の思い
21	聞き手	「一人の期間は学外コーチの間どのくらいあったんですか」					
22	コーチ	10年くらいですか78年くらいですかね。その時はすごく1番苦しかったです。なにか。	8年くらい/すごく一番苦しかった	指導経験の中で一番苦しかった時期	コーチ生活の苦難の時期	苦節10年	・苦しさをどう力に変えたのか ・その苦しさは今どんな場面で活きているのか
23	聞き手	「なにが苦しかったですか」					
24	コーチ	もちろん結果も出ないですし、自分も他の仕事を終わって来て、非常勤で先生になってカヌーを教えるしかないと思っていたので、非常勤をしながら、やってみました。非常勤もフルで入っていたので、結構な時間でした。まあ、ほとんどボランティアなので、経済的にもなかなか苦しかったですし、色々使わないとできなかったもので、結果も出ないし、自分の力がなかったもので、選手は育たないし、選手はなかなかバラバラになっていくし、どうしたらいいかなって毎日悩んでました。	結果も出ない/ほとんどボランティア/自分の力がなくて/選手は育たない/選手はなかなかバラバラ/毎日悩んでいました	思い通りにいかない/自分の生活がある/考えるばかりの毎日	時間的困難 経済的困難	ボランティアコーチの限界 ダブルゴールの未達成 苦悩の日々	・何を優先して考えていたのか ・諦めることはなかったのか ・何を目標にしていたのか
25	聞き手	「それでも教えたいという欲求は変わらずですか」					
26	コーチ	それは、なんか辞めたいと思うこともありましたが、私がやめたら武庫川のカヌー部が潰れてしまうという気持ちがあったので、いまみたいな環境ではなかったの、潰したらあかんという気持ちでやっていました。	私が辞めたら武庫川のカヌー部が潰れてしまうという気持ち/潰したらあかんという気持ち	どうにかしたい/やめられない/潰したくない	責任感/危機感	母校愛 忠誠心 義務感・責任感でのコーチング	・武庫川カヌー部の関係者に相談したことはあるのか
27	聞き手	「2009年にプロになってじゃあここからカヌーだけ、指導だけ、という生活に入ったわけですか」					
28	コーチ	はい。					
29	聞き手	「コーチングで1番大切にしていることを(の)に)と思わないと書かれていましたが、の)に)と思わないということ、コーチングはどのように関係していますか」					
30	コーチ	あの目的というか、1番の目的は選手が幸せになるとか、目標を達成するとか、夢を掴むということなので、私の満足感とかは、必要ないと考えるから、なにか教えたから、絶対私になにか返ってくるものではないと心の中で強く思っています。答えになってないですね、なんやろ、もう一回質問を教えてください。	1番の目的は選手が幸せになる/目標を達成する/夢を掴む/私の満足感が必要な/私になにか返ってくるものではない/心の中で強く思っています	選手の将来・未来まで考える/選手の幸せが自分の幸せ/	コーチが確立しているコーチの役割	無意識的にモデル化 父の口癖 見返りを求めない生き方	・いつ頃からそれを感じるようになっていたのか ・その考えに人や環境、経験は影響しているのか
31	聞き手	「コーチングで1番大切にしていることを(の)に)と思わないと書かれていましたが、の)に)と思わないということ、コーチングはどのように関係していますか」					
32	コーチ	なんか多分こうやっていいように書いてますけど、多分これ逃げやと思うので、なんか自分が苦しみたいために思っているのかもしれない。でなんか私コーチングというか、自分の父親がなんか大好きで、父親像がすごくあって、その父親がいつも言っていたのが、なんかそんなやつことに見返りを求めるなみたいなのをいつも言われていたので、なんかそれがすごく入っているのかもしれない。	逃げやと思う/自分が苦しみたいために思っている/父親がなんか大好き/父親像/やっつことに見返りを求めるな	自分への言い聞かせ/影響力のある自身の親/幼いころからの教え	生まれ育った家庭の中で得た考え方の基礎	無意識的にモデル化 父の口癖 見返りを求めない生き方	・母親の考え方の基礎はどんな感じだったのか
33	聞き手	「支援学校での経験あるいは、体験ということとのに)と思わないということとはどんなきっかけがあってそう思われたんですか」					
34	コーチ	支援学校にいる時に思ったのが、やってあげるとか、サポートしてあげることが、全てじゃないということと子どもに教えてもらったんですね。与えるだけが指導じゃなくて、待つとか、見えないサポートとか、この子たちが必要としていてることを見極めるのが、指導なんだということ支援学校で1番教えてもらいました。なんで、私がやったからといってすぐにできるようにならないし、えー、すぐこう言ったやんとかって言ってしまうがなんでですけど、支援学校ではそれは必要なことで、彼らの成長を得たないといけないんで、言ったの)に)か教えたの)に)かかなきゃというの)は考えないでおこうと支援学校では思っていました。それは私の欲であって、あの、生徒の本当の速くの方にある幸せには繋がらないと思います。	支援学校/やってあげるとか、サポートしてあげることが、全てじゃないということと子どもに教えてもらった/与えるだけが指導じゃない/見極める/成長を待たないといけない/本当の速くの方にある幸せ	特別支援学校/生徒からの学び/判断すること/選択すること/想像すること/忍耐/	支援学校 ・個別性 ・漸進性の原則 対比の学び ・与えるー待つ ・変えるー変わる ・私の欲ー生徒の幸せ ・コーチングの成果ー ・コーチングの評価 ・教えたことー必要としていないこと ・見えるサポートー見えないサポート	指導観・コーチングフィロソフィーの基礎との出会い	
35	聞き手	「支援学校での経験というのは、武庫川女子大学のコーチをしている間いろんな非常勤に行かれたなかの一つですか」					
番号	発話者	テキスト	①テキスト中の注目すべき語句	②テキスト中の語句の言い換え	③左を説明するようなテキスト外の概念	④テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	⑤疑問・課題

表7-2. 第二期のSCAT分析フォームを使った4ステップコーディング

番号	発話者	テキスト	①<1>テキスト中の注目すべき語句	②<2>テキスト中の語句の言いかえ	③<3>左を説明するようなテキスト外の概念	④<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	⑤<5>疑問・課題
36	コーチ	支援学校は非常勤ではなく、常勤でどっぷり、そのあとに一般校の支援学級でも仕事もしました。	支援学校/常勤/一般校の支援学級	援助を必要とする生徒の指導に関わる	特別支援学校での指導経験	健常な大学生と特別支援学校の生徒のギャップ	特別支援学校の生徒を見ながら、同時に大学生を指導するにあたって何かギャップや違和感などは実際あったのか
37	聴き手	のについて見返りを求めてはいけないうつというの子どもに教わったっていうふうに言われたんですけど、先輩であるとか、同僚から言われたわけではないんですか					
38	コーチ	ないです。ただ私が1年目のティームティーチングなんですけど一緒に一つのクラスだった先生が、すごいベテランの方で、1年間を通して1人の重慶の子を育てたというの、一つのことをできるようなしたんですけど、それを遠くでずっと勉強させてもらって、感じたものはすごく大きかったです。お茶を自分意思で飲むということやったんですけど、最初はなんにも考えんと、朝きたら、2リットル全部飲むんですけど、それを1年かけてできるようになったんですね。その教え方というか順序建というか、その時に全然見返りを求めてなかったし、全然そんな言葉もなかったその時に感激しました。いま思い出しましたけど、その先生との出会いは大きかったです。その方が特別支援の免許の第一号かなんかで超ベテランで。	一緒に一つのクラスだった先生/1年間を通して/育てた/1年間かけてできるようになった/見返りを求めてなかった/先生との出会いは大きかったです	日々の成長を確認/生徒のために/大きなきっかけをくれた出会い	指導者像のモデルとなる教師との出会い/指導の基礎の学び	指導観・コーチングフィロソフィーの基礎の形成期	・その先生以外で同じような指導を見たことはあるのか ・その先生の指導を最初に見た時、どう感じたか
39	聴き手	「他の先生の生徒への接し方とは全く違う感じですか」					
40	コーチ	全然違います。なんか押し付けっぽいですよ。知的障害の子への指導って。やりなさい!みたいな無理やりやらす感じで、なかなか授業も進まないの、その先生はちょっと違って、なんかもうすごくその子が段階をおってできるようになっていくのが目に見えて分かったの	押し付けっぽい/知的障害の子への指導/無理やりやらす感じ/段階をおってできるようになっていくのが目に見えて分かった	強制的/無理矢理/徐々にできるようなる/	強制的にやらせる指導/スモールステップ	他律的で強制的な指導法/自律を生む支援的な指導法	・同時に大学生を指導しながら、その時に生かしたものは何か
41	聴き手	「じゃあそのやらせるような指導も一方で見る機会もあったんですか」					
42	コーチ	はい、ありました					
43	聴き手	「その指導をみてなにかどんなふう感じたんですか」					
44	コーチ	仕方ない面もあるんですけど、成長などはなくて、その場限りのできた、できないだけで、その本人の幸せとか充実にはつながってないのかなと思います。なのでそれは教員の自己満足でないかと思いました。	その場限りのできた、できない/本人の幸せとか充実にはつながってない/教員の自己満足	身につけていない/生徒の思い通り、望み通りではない/自分主体	段階や一貫性のない指導	支援学校での両極端な指導者との出会い	・外からこのような指導を見た時に何を感じたか ・ベテラン教師と比較して何の違いがその指導を生み出したと考えるのか
45	聴き手	「じゃあもしそのベテランの先生との出会いがなければ、どんなになってたと思いますか」					
46	コーチ	もうちょっとこう言葉が多くて、ガミガミいうタイプになってたのかもしれない。	言葉が多く/ガミガミいうタイプ	威圧的な指導者/指導者の思い通り	コーチ自身の経験がコーチングモデルになる世代間伝達	意識的にモデル化	・選手と指導者の関係はどうあるべきかと思っているのか
156	コーチ	私の指導は、変化を感じるだと思っているので、ちょっとした目標の変化だとかを過ぎないようにとは思ってみたいです。勝てなかった時は見えてなかったと思います。小さな変化というのは、視野を広くして今は見えているんですけど、その時はグーって1点だけを見ようとしていたの、他のことが何もみえていなかった気がします。森の中でカメレオンだけを探しても見つけれないから、森を見ようというのは思っています。	変化を感じる/ちょっとした目標の変化/視野を広くして今は見えている/勝てなかった時は見えてなかった/森の中でカメレオンだけを探しても見つけれないから、森を見ようというのは思っています	小さな変化を過ぎさない	全体視/ズームイン/ズームアウト	変化を感じる事ができる指導者/学生のあらゆる変化を広い視野と多様な視点で見逃さないコーチング	
179	コーチ	桜宮高校でバレーをしていたんですけど、バレーは全然で補欠やったんです。で、自分の中でそれでも頑張れない自分が嫌で、3年間、なにかに達することとして絶対上まで行ってやるとおもっていたので、その気持ちで4年間カヌーしたんですけど、その時の嫌な気持ち、高校3年間の頑張れなかった自分とか補欠とか、Bチームとかの気持ちとかは今の指導にだいふ生きます。	バレーをしていた/補欠/やった/頑張れなかった自分とか補欠/Bチームとかの気持ち	過去の自分の経験/Bチームの部員の気持ち/顧問との関係	コーチングの本質の理解・体験	Bチームの競技者としての自分を評価し認めて欲しかった苦い経験	
180	聴き手	「父親の考えが相当根っこですね」					
181	コーチ	すごく好きで、お父さんが、大阪のだんじりの祭りの頭みたいな人やうたんで、なんで若い時から若い衆がいっぱい家に来て、勝手に食べたり飲んだりという家で育ってきているので、そういう組織をまとめるのを見ていたの、ああそうやってまとめるんやうてのを勝手に思っていたと思います。お父さんが絶対に人のことを悪く言わない人で、みんなが悪いことを言ってもせやけど、あいつはこういうところあるで、とか言う人やったんで、そういうところはわたしの中にも入っているかもしれない。	お父さん/大阪のだんじりの祭りの頭/組織をまとめる/たりするのを見ていた/絶対に人のことを悪く言わない人	自身の親/大人数をまとめる役/父親の考え方/人のいいところを見つけてのが得意/必ず強みを評価する父	リーダーのモデルとしての父親	無意識的にモデル化/父の口癖/強みを発見するリーダー像	
番号	発話者	テキスト	①<1>テキスト中の注目すべき語句	②<2>テキスト中の語句の言いかえ	③<3>左を説明するようなテキスト外の概念	④<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	⑤<5>疑問・課題

表 8. SCAT による分析から作成された橋本コーチのストーリーライン

橋本コーチストーリーライン第二期

武庫川女子大学カヌー部の「アシスタントコーチからヘッドコーチ」になったにもかかわらず、「ダブルゴールの未達成」を痛感する「苦悩の日々」は支援学校に勤務しながらの「ボランティアコーチの限界」を感じつつも、「母校愛」と「忠誠心」によって「義務感・責任感でのコーチング」を続ける「苦節 10 年」であった。橋本コーチは高校時代の「B チームの競技者としての自分を評価し認めて欲しかった苦い経験」と「自分には見えていない本質を見抜く先生との出会い」すなわち「指導観・コーチングフィロソフィーの基礎との出会い」から「変化を感じる事ができる指導者」を目指していたが、「他律的で強制的な指導法」と「自律を生む支援的な指導法」という「支援学校での両極端な指導者との出会い」は、カヌーを指導する「健常な大学生と特別支援学校の生徒とのギャップ」および「父の口癖」から「無意識的にモデル化」されていた「見返りを求めない生き方」「強みを発見するリーダー像」が土台となり、支援学校で学んだ指導方法を「意識的にモデル化」していく「指導観・コーチングフィロソフィーの基礎の形成期」となる。

表9-1. 第三期のSCAT分析フォームを使った4ステップコーディング

番号	発話者	テキスト	①<1>テキスト中の注目すべき箇所	②<2>テキスト中の語句の言い換え	③<3>左を説明するようなテキスト外の概念	④<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	⑤<5>疑問・課題
47	聴き手	「その支援学校で見返りを求めることができない環境だったと思うんですけど、そういう非常勤の生活から時間を減らして武庫川女子大学のコーチになるわけですけども、実際に大学生と接してコーチングしている時もやはりそのままだからでいいんですか。相手が要求できないという状況から、要求できますよね。実際大学生であれば、それでもやっぱりのについているのをもったまま、コーチングされてたわけですか」					
48	コーチ	はい、もってました。ただ、まあでもうまいかないなどは思っていましたけど、のにと思わないとか、見返りを期待したらあかんとか、思いますけど、実際それではなかなかうまくいかなくて、だから最初のうちはうまくいかなくて、待とうと待とうとだけしてたので、なかなか待っててなかなか伝わらないものだなあと感じながらそしたらあの最初うまくいかなかった2年間は、全部言葉で、特別支援の押し付けっけい方になってたと思います。	実際それではなかなかうまくいかなくて/最初のうちはうまくいかなくて/うまくいかなかった2年間は、全部言葉で、特別支援の押し付けっけい方になってた	挫折/思い通りにいかない/よくないと思う指導方法	知的理解/実践的理解	武庫川女子大学カヌー部プロコーチ就任 プロコーチに求められる結果責任 プロコーチに求められる結果責任が生み出す焦燥感 勝てない原因を他者に要求	・押し付けの指導を行うことで選手はどんな反応や行動、態度をとったのか
49	聴き手	「のについて言わないだけでは無理」					
50	コーチ	無理でした。最初は、言葉だけでわかって言っていたと思います。	無理でした/言葉だけでわかって言っていた	仕方がない/指導手段が不十分	理想と離れていても指導し続けなければならない現実	否定していたはずの他律的で強制的な指導法	・理想の思考と違う行動を取る現実にはどんな違和感を抱えていたのか
51	聴き手	「そのあとどんな変化が訪れましたか」					
52	コーチ	途中くらいから、いや私が成長しないと、なんかダメやなという私が変わらなダメやなというのを思い始めて、そこから勉強したり、知識を増やそうって思ったり、まず私を充実させようと思いましたね。そしたら、なにかこういう手段を持って学生と向き合えるのかなと思いました。	私が成長しないと、なんかダメやな/私が変わらなダメやな/勉強したり、知識を増やそう/私を充実させよう	選手の成長より自分の成長に目を向ける/相手に求めず自分を変える	自分にコントロールできるように意識を向ける	勝てない原因を自分に見出す自分の領域への意識の方向転換	・自分の思考を変えるきっかけは何だったのか
53	聴き手	「言葉で言うだけの段階から具体的にどんな風に変わっていったんですか」					
54	コーチ	なにかこう綺麗にまとめるようと思って必死にやっていたことが、ばらけすぎがゆえにまとめることがあるんじゃないかと思いついて、その時に大学院に行き始めたんですけど、バイメタとか生理学がすごく嫌いだったので、大学の時に、その辺の知識が少なすぎるとして入ったんですけど、その時にちょうど後藤先生に、心理学のカウンセリングの方が好きだったんで、学会を開きに行こうって言われたら行つた時に、組織を作る時に、円を作ろうとするけど全部が結びつくのは難しいっていう話やあって、例えばここをすごく強く結べば、ほかにいる人な結び付けができて、やがてはそれがひとつの円の中に入っていくって言う話やあったんですけど、その時にあ！そうやって全でを上手く収めようとしてたなと思ってたんです。それが考えを変えるきっかけになりました。	綺麗にまとめるよう/ばらけすぎがゆえにまとめる/大学院のカウンセリングの方が好きだった/全てを上手く収めようとしてたなと 思った/考えを変えるきっかけ	丸く収める/個々を強くする方が固結する/新たな知識を学びに行った/知識が増えたことで新たな手段を身に付けることができた	スポーツ心理学/組織論/集団のマネジメント/集団も個人も完全な状態	知識を増やすために入学した大学院 組織論の知識 チームの効果的なマネジメント法	・理想があったのか、それはどんな理想だったのか ・集団、選手としての在り方をどう思っていたのか
55	聴き手	「それは選手の関係性についてなにか考え方が変わったんですか」					
56	コーチ	はい。					
57	聴き手	「それまで、まとめるというのをもう少し別の表現でできますかまともようにしていただきたいと思います」					
58	コーチ	結構な話を私の言葉ですらでして、みんなおんなじ考えのはずやと思っていたんですけど、だげでなかなかうまくいかなくて、その時にいろんな考えがあって、みんな同じにしないでいいやと思えました。ありきたりかもしれませんが、個性を引き出して、生かす場所を作ろうとかは思いましたけど。	結構な話を私の言葉ですらでして/みんなおんなじ考えのはずやと思っていた/個性を引き出して、生かす場所を作ろう	自分の考えを全て学生に言っていた/理想と現実のギャップからのアイディア/個の力を大切にしようとした	個性/個別化	指導の個別化 個性重視 構成メンバーの均質化 構成メンバーの異質化	・うまくいかなかった時に考えを変えるきっかけになったことは何か
59	聴き手	「待ってるだけではなかなかうまくいかない、自分から言葉で伝えて伝えて伝えてひとつにしていこうなかなかうまくいかない、って言った時に個を一人一人生かしてあげよう、個性の生かす場所を作ったようにしたということですか」					
60	コーチ	それはしました。ただその結び付けを強くしようということとは違う話かもしれませんね。なんかいま思い出したんですけど、ほっといてもやる子/全然話も伝わらない子/それ以外のなんとなんとできそうなくなっていく子、そのなかの、できる方に近い子というのを自分の中で分けて、とりあえずこっちだけでもたてて思ったかもしれませんが。申し訳ないけど後回しにした時期もありました。今はしてないですけど、勝てなかった時にはそういうふうにしたこともありました。	ほっといてもやる子/全然話も伝わらない子/それ以外のなんとなんとできそうなくなっていく子/とりあえずこっちだけ/後回しにした時期	できる方に近い子から順番に/選手との区別	coachable コーチングのレディネス	勝利のために指導対象に優先順位 結果を生み出すための最短距離の指導法 インカレ初優勝	・後回しにした時選手に不満や文句はなかったのか ・申し訳なきを持ちながらやった結果何か変わったのか
61	聴き手	「まず橋本コーチが思うスポーツコーチングに必要な厳しさってどんなふうに考えていますか。インカレの優勝を目指すというステージで、競技をする、コーチングをする、というステージで考えていただいた時に厳しさってなんですか、どういうふうにとらえていますか」					
62	コーチ	学生が求めることは、細かいことをどうやらやる、(昔)学生は嫌なんですけど、それだけやと思います。それはプレーの面だけでなく、私生活、学校生活、礼儀、全部においてです。厳しさが変わったのは今までは全部ダメなことは叱って来たと思うんですけど、最近は、細かいことはきっちりいうようにしてんですけど、大雑把なことは本人たちに任せて、または大きな失敗に関しては、なんでそうだったかと話をしたり、なにかそこは守ってあげないとかと話をしたり。	細かいことをきっちりやる/今までは全部ダメなことは叱って来た/細かいことはきっちりいう/大雑把なことは本人たちに任せて/守ってあげないとか	選手がやらなければいけないことは全てやる/今までは押し付けの指導だった/的を絞った指導を行うようになった/学生を信じてあげる/次事な場面は自分が責任をとる	その瞬間の指導 細部へのこだわり 指示的な行動の	指導行動が多く育成行動が少ない指導指令型コーチング 指導行動が少ない育成行動が多い育成、スーパーバイザー型コーチング	・カヌーを指導する現場でプレー以外の事を細かく求める理由は何か ・それにはどんなメリットがあるのか
番号	発話者	テキスト	①<1>テキスト中の注目すべき箇所	②<2>テキスト中の語句の言い換え	③<3>左を説明するようなテキスト外の概念	④<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	⑤<5>疑問・課題

表9-2. 第三期のSCAT分析フォームを使った4ステップコーディング

番号	発言者	テキスト	①<1>テキスト中の注目すべき語句	②<2>テキスト中の語句の言い換え	③<3>左を説明するようなテキスト外の概念	④<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	⑤<5>疑問・課題
68	コーチ	はい。しかもそれも強い口調で指導していました。	強い口調で指導していました	学生が委縮するような指導	押し付け/強制性	強制的で感情的な指導	・今とその時の口調の違いをどう思っているのか
117	聴き手	「コーチングをしていていま勝ちたいと思う欲求が強くなりすぎている瞬間ってありますか」					
118	コーチ	最近ないですけど、昔はもう思っていました。	昔は/思っていました	以前は勝ちたいという欲求が強くなりすぎていた	勝利欲求	勝利渴望期	
119	聴き手	「それはインカレ優勝する前ですか、どのくらいの頃ですか」					
120	コーチ	前ですね。一回勝ったあたりもありました。2、3連覇くらいまでは。	2、3連覇くらいまでは	勝ち続けたい	勝ち続けたいと思う欲求	優勝未経験者が抱く焦燥感	
121	聴き手	「そのあと勝ちたいという欲求が無くなったのかそれとも勝つということに対する意味づけが変わってきたのか、プロコーチですから、勝つという結果は当然求められているわけで すよね。その中で勝つという意識が変わってきたということなんですけどどんな風にかわってきたのか」					
122	コーチ	今までよく結果は後からついてくるからとかって言うじゃないですか、世間的に、凄く嫌いだったんですけど、それやったら絶対結果なんかとられへんはと思ってたんですけど、なんか今は、何でしようどっから変化したのかは分からないんですけど、あそこまでの道のりを楽しまなあかんはとか、結果はその日しか分からないとかって考えるようになっていました。 知らないうちに	結果は後からついてくる/凄く嫌いだった/あそこまでの道のりを楽しまなあかん/結果はその日しか分からない	以前までは/結果だけに意識を向けていた/現在/結果に向かうまでの日々/目を向けるようになった/やり切ってみないと結果はわからない	今の瞬間を楽しむ	楽しみよりも結果を出すためのプロセスを追求 結果を出すためのプロセスとして今その瞬間を楽しむことを追求	
127	聴き手	「先程勝つということは全てを教えてくれるということでしたけど、逆に負けることってというのは、コーチにとってどんな意味があるんですか」					
128	コーチ	負けて学ぶ事が多いってありますけど、私の中では負けてもちろん学ぶし、苦やしさが成長のなにかになる、エネルギーになるんですけど、結構学生は苦やしさはすぐに忘れるんですけど、喜びとか感動とかはずっと力になって、エネルギーになっている気がするんですけど、負けるっていうことは、... なんやろ。ずっと負けてはきていたんですけど、もうあそこに行きたくないとかは、思いますけど、なんですかね。	負けてもちろん学ぶし、苦やしさが成長のなにかになる、エネルギーになる/学生/喜びとか感動とかはずっと力になって、エネルギーになっている気がする/もうあそこに行きたくないとかは、思います	負けた人にしか分からないものを得ることが出来る/それが力になる/いいことが力になる/負ける苦しみを味わうより、勝つ喜びや感動を味わう方がいい	勝ちの記憶/負けの記憶	負ける事は戻りたくない場所	
129	聴き手	「負けたらどうしようっていう不安はあまりないほうですか」					
130	コーチ	ないですね。					
131	聴き手	「昔からない?」					
132	コーチ	勝てなかった時期はうわどうしようとかはありましたね	勝てなかった時期はうわどうしよう	負けていた時は悩むしかなく、やりたいことが見つからない		失敗不安	
139	聴き手	それって優勝する前は見えていたものですか					
140	コーチ	みえてないです。どれが正しいか自分の中ではっきりしてなくて、やっぱりあかんかった、やっぱりこれかなとか、いろんな本を読みまくったり、トレーニングを自分で書いて行ったりとか、全然自分の足元が固まっていなかったと思います。	どれが正しいか自分の中ではっきりしてなくて/全然自分の足元が固まっていなかった	模索中/やりたいことが明確になっていなかった		結果に繋がらない試行錯誤 裏付けのない試行錯誤	
157	聴き手	「森を見たら小さな変化はわかるんですか。こう見るから小さな変化がわかるんじゃない?」					
158	コーチ	はい、森をみたらカメレオンは見つかるとおもうんですけど、カメレオンだけを見つけようとしたら多分見つからないと思います。勝てないときにそれを学びましたけどね。	森をみたらカメレオンは見つかる/勝てないときにそれを学びました	広く物事を見るのと小さいことも見えてくる/勝てない時の経験	フォーカスイン/フォーカスアウト	自分が求める変化を望遠レンズのような狭い視野と1つの視点で見出そうとするコーチング	
177	聴き手	「勝ちたい勝ちたいと思ってたときに勝てなかったとして、勝って初めて分かったことってなんですか」					
178	コーチ	それまでは分かっていると思ってたんですけど、学生ってすごいんやなと思いました。学生ってほんまは力あるはずって思っていたんですけど多分心の中ではおもってなかったんで、わたしがなんとかしてやろうと思っていたんですけど、あ。この学生ってほんまに凄いやなと思いました。今の子今の子って言われるじゃないですか、もちろん変わったことではあるんですけど、でも絶対なにか力持っているからっていつも思ってます。だからその力をなんとか引き出すためにわたしはおるんやと考えます。	わたしがなんとかしてやろうと思っていた/学生ってほんまに凄いやな/絶対なにか力持っている/その力をなんとか引き出すためにわたしは	コーチ主体/学生を認める/学生を信じてあげる/信用してあげる	学生の持つ力への疑いから学生の持つ力を信じてることへの変化	無力な学生を教えるコーチ 有力な学生の力を引き出すコーチ	
番号	発言者	テキスト	①<1>テキスト中の注目すべき語句	②<2>テキスト中の語句の言い換え	③<3>左を説明するようなテキスト外の概念	④<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	⑤<5>疑問・課題

表 10. SCAT による分析から作成された橋本コーチのストーリーライン

橋本コーチストーリーライン第三期

「武庫川女子大学カヌー部プロコーチ就任」後は、「プロコーチに求められる結果責任」から「楽しみよりも結果を出すためのプロセスを追求」し「自分が求める変化を望遠レンズのような狭い視野と1つの視点で見出そうとするコーチング」を行う「勝利渴望期」になる。「プロコーチに求められる結果責任が生み出す焦燥感」や「優勝未経験者が抱く焦燥感」から「失敗不安」は高まり、「無力な学生を教えるのがコーチ」という前提から「指導行動が多く育成行動が少ない指導指令型コーチング」になり「勝利のために指導対象に優先順位」を付けるなど「結果を生み出すための最短距離の指導法」をとった。しかし、その方法は「強制的で感情的な指導」を生む原因となり、「否定していたはずの他律的で強制的な指導法」で「構成メンバーの均質化」を求め、「勝てない原因を他者に要求」し、「結果に繋がらない試行錯誤」、「裏付けのない試行錯誤」の日々は、同時に「勝てない原因を自分に見出す」「自分の領域への意識の方向転換」を発生させ、「知識を増やすために入学した大学院」で「組織論の知識」や「チームの効果的なマネジメント法」に出会い、「指導の個別化」、「構成メンバーの異質化」で「個性重視」の指導を行えるようになり「インカレ初優勝」し、「負ける事は戻りたくない場所」になった。

表11-1. 第四期のSCAT分析フォームを使った4ステップコーディング

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題
61	聴き手	「まず橋本コーチが思うスポーツコーチングに必要な厳しさってどんなふうに考えていますか。インカレの優勝を目指そうというステージで、競技をする、コーチングをする、というステージで考えていただいた時に厳しさってなんですか、どういうふうにとらえていますか」					
62	コーチ	学生に求めることは、細かいことをきっちりとする、1番学生は嫌なんですけど、それだけやと思います。それはプレーの面だけでなく、私生活、学校生活、礼儀、全部においてです。 厳しさが変わったのは今までは全部ダメなことは叱って来たと思うんですけど、最近では、細かいことにはきっちりいうようにしてまずけど、大雑把なことは本人たちに任せて、または大きな失敗に関しては、なんでそう言ったか話をしたり、なにかそこは守ってあげないと思った。	細かいことをきっちりやる/今までは全部ダメなことは叱って来た/細かいことにはきっちりいう/大雑把なことは本人たちに任せて/守ってあげない	選手がやらなければいけないことは全てやる/今までは押し付けの指導だった/的を絞った指導を行うようになった/学生を信じてあげる/大事な場面は自分が責任をとる	その瞬間の指導 細部へのこだわり 指示的な行動の	指導行動が多く育成行動が少ない指導指令型コーチング ・指導行動が少なく育成行動が多い育成・スーパーバイザー型コーチング	・カヌーを指導する現場でプレー以外の事を細かく求める理由は何か ・それにはどんなメリットがあるのか
63	聴き手	「細かいことができていない競技者が悪いわけじゃないんですか。それが細かいことができていない、ようするに指導できていない私に意識が向くんですか」					
64	コーチ	そうですね。					
65	聴き手	「それを選手に伝えるのが難しくなってきたというんですか。変わってきているというのはい」					
66	コーチ	わたしが多分年齢も上がってきて、優しくなったと思いますね。自分で言うのもなんなんですけど、あの子も考えたらできるしなとか、次もう一回許してきて次もあんなかったら言うてみようとかが増えてきて、結構タイムリーの自分の脳発力がなくなってきたのか、少し言葉を少なくしても、指導できるようになってきたのか、そこが分からなくて、迷ってます。	年齢も上がってきて、優しくなった/タイムリーの自分の脳発力がなくなってきた/言葉を少なくしても、指導できるようになってきた/迷ってます	性格や気性が穏やかになった/言わなくても分かってくるであろう/言葉以外の指導手段/模索中	寛容さと柔軟性の誕生/マンネリ化/指導手段の増加/	タイムリーに厳しく指摘し変える指導	・優しくなったと思う背景には何があるのか
69	聴き手	それがだんだん見逃すわけですか、待つわけですか」					
70	コーチ	待つですね。あっと何回かみてみて、とかそのかわり観察はすごくしてますけど、ちょっとでも変わってきたら、変わってきたら自分の中で消化したり、それが自分の成長なのか、自分の衰えなのかを見極めれてないです。	観察はすごくしてます/自分の中で消化/自分の成長なのか/自分の衰えなのか/見極めれてない	ちょっとした変化を逃さない	待てるようになった	タイムリーに指摘せずに変わるのを待つ指導	・親になる経験がどんな影響を与えているのか
71	聴き手	「一般的にスポーツ指導で厳しさと言うと、悪い方に出ると、バイオレンス、身体的なバイオレンスもあれば言葉のバイオレンスもあると思うんですが、そちらには一貫して、いかにいう手段にはいかなかったんですか」					
72	コーチ	言葉ではあります。でも変わりましたね。具体的に叱るようになってきましたね。今の学生さんは、次どうしたらいいかとかも、なかなか出てこないの、今のほうだから本当はどうしたらほうが良かったかと思うとか、そういう指導になってきたと思います。例えば今までは、アホっていったら終わりやったのが、そっからの説明をするようになりました。	変わりました/具体的に叱るようになってきました/今までは、アホっていったら終わりやったのが、そっからの説明をするようになりました	以前との変化/ポイントの変化	厳しさに対する捉え方の変化	離れて自得を引き出す指導の近づくに質問や説明を使う指導	・アプローチの仕方を変えた時、良かったと思う出来事は何か
73	聴き手						
74	コーチ	なんかこう言葉じゃなくて、自分の中で段階があって、言葉じゃなくて次は目で教えられるようになるうとか、次は心で教えられるようになるうとかなんか段階があって、それが進んできているのかなと思っています。	段階があって/言葉じゃなくて次は目/次は心で	指導の中でやりたいこと/何も言わなくても学生に伝える	コーチ自身の熟達段階の定義	コーチとしての熟達段階の定義	・いつ頃から思っているのか ・何をきっかけにそう思うようになったか
75	聴き手	「目で指導するとか心で指導するってどういうコーチング方法ですか」					
76	コーチ	なんかこうほんまに思っている目のかかって学生ってすごく敏感なので、心はまだいけてないと思います。心に行く前に優しくするところにいるのかなとは悩んでいます。	心はまだいけてないと思います/心に行く前に優しくする	言葉や表情を無くして指導することが今はできていない/自分の指導に模索中	言葉→目→心 言葉→チームの文化を創る段階 目→チームの文化を共有し自主的に体現する段階 心→チームの文化、価値観が共有され浸透した段階	熟達途中	・具体的にどう違うのか
77	聴き手	「言葉で強く伝えたり、あるいは目で強く指導した時に学生たちがコーチの目とか言葉とか、コーチを気にするようになりますか」					
78	コーチ	なります。見るのでそういうのすごく嫌いなので、でもそれが指導なんですかね。自分も自分に目を向けるんですけど、学生もなにかあったらこないだの森のこととかあった時も、じゃあ自分に目を向けたら、自分はもうどうだったのという自分に矢印を向けるっていうのは、常々言っていると思います。わたしをみてってなるとそうではないので、そうではないのでダメななって思います。	自分も自分に目を向ける/自分に目を向けると、自分はもうどうだったのという自分に矢印を向けるというのは、常々言っている	自分にコントロールできることに意識を向ける/私は何ができて、私にしかできないことは何なのかということを考えさせる	自主性/主体性	動作の改善・修正のために自分自身を理解させ自分の領域に意識を向けさせる指導	
番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題

表11-2. 第四期のSCAT分析フォームを使った4ステップコーディング

番号	発言者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の内容	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題
79	聴き手	「コーチの事が気にならない、コーチの言葉にビクビクしないとか、コーチの視線が気にならない、でも学生たちが細かなことに、気を遣ってきつたりできるようにってほしいって、思っているという事ですか。その方法がまだ今はわからないという事ですか」					
80	コーチ	そうですね。自分は自分でわかりなさいっていうのをずっと言っているんで、どうやってそこに持っていくのかわからないのを悩んでいます。	自分は自分でわかりなさい	自分を自分で充実させる	自分自身の理解	動作の改善・修正のために自分自身を理解させ自分の領域に意識を向けさせる指導	
81	聴き手	「優しすぎるなって思われる事はありますか」					
82	コーチ	めっちゃあります。なんで今言わなかったんやろうとか、タイムリーに言うべきやったなとかありますね。	なんで今言わなかったんやろう/タイムリーに言うべきやった	後悔/その場で指導	タイムリーの指導	タイムリーの厳しさ	
83	聴き手	「言わなくて学生たちが気がついた時はそう思わないですね」					
84	コーチ	そうですね。例えば、この学年やと、ほとんどにもしなくても勝手にやるじゃないですか、今はもう全然そうじゃない学生さんたちじゃないので、わたしの指導を変えないといけないという難しさはあります。	わたしの指導/変えないといけない/難しさ	学生に応じて、その時の学生にあった指導を行う/問題	同じ方法では通用しない	学生スポーツ 毎年構成メンバーが変わり 同じ方法では対応できないという学年間の特性の違い	
85	聴き手	反動はですか?優しくなったなとかっていう思った後に次にまたあ、今、おかしいって思った時は反動で強くなったりとか、変わったりしますか」					
86	聴き手	それは経験した事がないです。					
87	聴き手	「じゃあもっと個に応じてとか、学年に応じてっていうような方向で変えていく事ですか」					
88	コーチ	でもそれを見極めるのが今はちょっと、後手後手になっているような気がします。どういう学年で、どういう風に、見えなさいサポートしてあげたら動けるのかとか、全くこころはほっといてもいいのかとかっていうのが、さっきの優しさというようにうまく機能していないのかなと思います。	見極め/後手後手/見えなさいサポート	見極めることが困難になっている/学生に見えなさいと導いてあげる	新たなコーチング領域への気づき	コーチとしての引き出しの少なさ	・学年の役割(チーム運営)を変えたことによる問題とは
89	聴き手	「橋本コーチが実際には競技をされていた頃は、どんな厳しさをコーチングされたんですか」					
90	コーチ	先生じゃなくて先輩からですけど、無茶苦茶というか、高校時代ですけど、自分は嫌やなと思うことをそのままやっても良くならんやんって思ってたんで、大学になって自分が現役の時も、弱かったんで、どんどん先輩に言っておきました。	先生じゃなくて先輩から/無茶苦茶/嫌やなと思うことをそのままやっても良くならん/どんどん先輩に言っておきました	上下関係/不合理/請うために必要なことをするために自分から動いた	組織のルールの排除・撤廃 年功序列制民主主義	体育会系に内在する絶対的上下関係への嫌悪感 負の世代間伝達の断ち切り	
91	聴き手	「厳しくされると自分が上級生になると同じようにしてしまう事が多いんですけどもそうは なかったんですか」					
92	コーチ	そうですね。ほんとに強くなりたかったんで、それに必要なことは、排除したいと思っていました。だから今教える立場になって、無駄なことも必要だし、全てが合理的じゃなくてもいいと思うので、そういうちょっと間違えたことも必要なのかなと思っています。理不尽なことも好きなんです、理不尽も必要やと思っています。	必要ないことは、排除したい/無駄なことも必要だし、全てが合理的じゃなくてもいい/理不尽なことも好きなんです、理不尽も必要	必要なことを全うする/非合理を経験すること、で、合理的なことが明確になる/筋の通っていないことも必要	全てが合理的でなくてもいい	非合理性の排除 非合理性の持つ有用性	
93	聴き手	理不尽になにか対応をうえからされるっていうのは競技にかなり影響ありますか」					
94	コーチ	なんか嫌なことも分かりますし、それによって横の繋がりが出ると思うんですよ、縦のつながりはそこでギクシャクしますけど、自分が上になった時に、理不尽じゃなかったなと感じる時もありますし。	嫌なことも分かります/横の繋がりが出る/ギクシャク/自分が上になった時	相手の気持ちがかかる/同期の関係が強くなる/先輩・後輩の関係に違和感を感じる/見えなかったものが見える	理不尽な要求に対する不満 下級生にの時に見えなかったものが上級生になって見える	先輩の理不尽な要求が生む後輩の結束力	
95	聴き手	「あえて横の繋がりを作るために、きつく理不尽な要求をすることってありますか」					
96	コーチ	1番上の学年がまとまってないとか、うまく行っていない時に無理やり無茶苦茶にしてやろうとか、問題提起を無理やりパンでだしてもめさすように、もめたら喋るじゃないですか、もめさせます。	無理やり無茶苦茶にしてやろう/問題提起を無理やりパンでだしてもめさす/もめたら喋る	あえて困難な課題を出す/学生に本音で語る機会を与える	本音で話し合わなければ解決できない状況設定/本音で話し合わせるための外圧	理不尽な要求 意図的に問題を創出する確信犯 コーチが演じる悪役	
97	聴き手	「揉め事を起こさないようにおさめるんではなくて揉め事を意識的に起こす。その事で結果的に話をさせる事、お互いに本音で話し合わせる事それが厳しきなんですかね。学生たちって今、本音でものをいうことを嫌いますよね。」					
98	コーチ	バスケ部もですか					
番号	発言者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の内容	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題

表11-3. 第四期のSCAT分析フォームを使った4ステップコーディング

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題
100	コーチ	うちは地方の子が多いのでどっちかと言えば内向的な子がすごく多い。それも関係するのかなとも思っていましたけど。そうではないんですね	地方の子/内向的な子	本音で言えない	マイナス面	内向的である事のマイナス面が作り出す本音を言えないチーム	
101	聴き手	「遠すくらい問題を投げかける、それで学生たちはなにか変わっていきますか」					
102	コーチ	ちょっとずつですけど。	ちょっとずつ	小さな変化	小さな変化の積み上げ	スモールステップ	
103	聴き手	「本当にばらばらになったことはないんですか」					
104	コーチ	あります。この間ばらばらになりました。					
105	聴き手	シーズンの最後に空中分解で終わっちゃったみたいなのはないですか」					
106	コーチ	あーそれはいいですね。最後の1日だけまとまったらええとはいっても言います。仲の悪い学年とかでも、最後の1日最後の日にわたしら頑張ったって言えばいいやんとは言います。	最後の1日だけまとまったらええ/最後の1日最後の日にわたしら頑張ったって言えばいい	終わった時に満足感や達成感を味わってあげたい	終わりをければすべてよし	インカレ最終日組織のピーキング	
107	聴き手	「なにかチーム愛が大事だっているのを書かれていますか？なにかそれはつながるんですか？ね。なにか一体になるとか」					
108	コーチ	それがふと人生の中に残らないですか。色濃く。なんか自分だけの満足やと、そんなに残らない気がするの、せっかく入ってきたので、なんか入ってよかったとか、4年間しんどかったけど楽しかったなとか思ってたんですけど、人のためにはやっぱり自分じゃなくて、人のためになができるかとか、形のないものを見てほしいなと思います。それがチーム愛だと思います。	自分だけの満足やと、そんなに残らない/自分じゃなくて、人のためになができるか/チーム愛	誰かと一緒に味わった満足感や将来語り合える/共有できる/自分の居場所がここにあったなと思ってほしい/誰かのために自分を犠牲にしても戦ってほしい	チーム ・目的がある ・献身的 ・役割 ・責任	ワンチーム	
109	聴き手	「カヌーって基本的には個人の種目だと思うんですけど、いま何ってと一貫してチームですよ。個を伸ばしていくという視点を持ちながらも、チームの方が大事なんですか」					
110	コーチ	やっぱり人のために何かできる人っていうのは結局最後は自分のことも見えてくるので、とは思っています。あと、カヌーの特性として、水のスポーツなので、大変装束ですけど、命をかけてやっている、そういう一体感っていうのは競技的にあるのかとは思っています	人のために何かできる人/自分のことも見えてくる/カヌーの特性/命をかけてやっている/一体感	自分の視野を広げると自分の事も深く見えるようになる/水上は命にかかわる場所	貢献感が生む効力感 種目特性が生む結束力	セルフイメージを明確化	自分のことが見えるとは具体的にどういうことなのか
111	聴き手	「優勝することに対してどう捉えていますか」					
112	コーチ	全てのことを教えてくれる。抽象的ではありますが	全てのことを教えてくれる	再確認/新しい発見/課題の発見	答え合わせ	究極のフィードバック	
121	聴き手	「そのあと勝ちたいという欲求が無くなったのかそれとも勝つということに対する意味づけが変わってきたのか、プロコーチですから、勝つという結果は当然求められているわけで すよね。その中で勝つという意識が変わってきたということなんですけどどんな風にかわってきたのか」					
122	コーチ	今までよく結果は後からついてくるからと言って言うじゃないですか、世間的に、凄く嫌いだったんですけど、それやったら絶対結果なんかとらへんはと思ってたんですけど、なんか今は、何でしようどっから変化してきたのかは分からないですけど、あそこまでの道のりを楽しまあかんとはとか、結果はその日しか分からないとかって考えるようになっていました。 知らないうちに	結果は後からついてくる/凄く嫌いだった/あそこまでの道のりを楽しまあかん/結果はその日しか分からない	以前までは/結果だけに意識を向けていた/現在は/結果に向かうまでの日々を目を向けるようになった/やり切ってみないと結果はわからない	今その瞬間を楽しむ	楽しみよりも結果を出すためのプロセスを追求 結果を出すためのプロセスとして今その瞬間を楽しむことを追求	
123	聴き手	「勝ったコーチはそれは自分が優勝しないと、迫りつかないことですか。優勝したから 思うことなんですかねえ。」					
124	コーチ	そのような気がします。楽しんでとかって言うのも自分の中ではなかなか分らなかったんですけど、楽しむってなにかって思ってたんですけど、今はそういう、そのために練習できるってすごい楽しいやんって思うようになりました。連覇ってわたし本当に意識した事がなくて、本当に嬉しくて本当に、なんかその時間を楽しんでいるのかなとは思っていますけど。	楽しむってなにかって思ってた/そのために練習できるってすごい楽しいやんって思うようになった/その時間を楽しんでいる	勝負を楽しむは分からない/勝負のために練習できることは楽しい	自分にコントロールできない最後の瞬間ではない/その瞬間を楽しむということ	連覇期 結果を出すためのプロセスとして今その瞬間を楽しむことを追求	
125	聴き手	「学生たちの勝ちたいという欲求はみてて、優勝する前、連覇のあたり、続いていっているけど、学生たちの意識は変わっていったんですか、勝つということに対して。」					
番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題

表11-4. 第四期のSCAT分析フォームを使った4ステップコーディング

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題
126	コーチ	なんか最近では負けたらどうしようとか思っているような気がしています。学生をみていると。私たちの代でとぎらせたらどうしようとか、なんかそう思わせたらかわそうやなとは思ってますけど。	最近では負けたらどうしよう/そう思わせたらかわそう	連覇/重圧	連覇の重圧	学生スポーツが生み出す代の重みで増幅する連覇の重圧	
133	聴き手	「なんで今なくなっただんですかね」					
134	コーチ	負けてもまた頑張ったらええやんとかは思うようになりましてけど、一応そんなことも想定はするんですけど、インカレ前とかには、もしかしたら負けるかもなとか。まあでもまた頑張ったらええかとか。	負けてもまた頑張ったらええやんとかは思うようになりまして/想定はする/でもまた頑張ったらええかとか	聞き直りの考えを持っているようになった/いろいろな状況を予想できるようになった		失敗不安の消失	
135	聴き手	「ずっとその勝てなかった時代は、負けたらどうしようって不安になるんですよ、違うんですかね」					
136	コーチ	全然ちがいますね。なんでやなんでやって思っていました。あれもしたし、これもしたし、とか思っていましたけど、いまはなんかじやあというやり方やってみようかとは思っています。もし負けたら。でも今は結構勝っているんで、毎年いろんなやり方は変えてはいるんですけど、自分の中で新しく生まれ変わるとかいうのはなかなか思い切れてきていないので、負けたら全部変えてみたいなとか、楽しみにしているわけではないんですけど、そういう気持ちはあります。	新しく生まれ変わる/思い切れてきていない/負けたら全部変えてみたい	新しいことを始めるにはまだ勇気と覚悟はできていない	負けることの意味の変化	成功病の自覚 負けが生み出す変革 新しい挑戦への欲求 勝ちが対峙する変革	
137	聴き手	「今の状態でこれだけやっておけば負けなにかっていうのはあるんですか」					
138	コーチ	戦術とかテクニック面でですか?それはあります	戦術/テクニック面/それはあります	勝った後分かったこと	連覇後の理解	優勝するために必要な戦術的要素・技術的要素の明確な理解 競技力の構造の理解	
141	聴き手	「そうするとそれが勝った、優勝した、連覇したということ、あ、これでいんだという感じで自信になったんですかね」					
142	コーチ	そうですね。それと選手の動きとか漕ぎのレベルとかをみて、ああこのやり方でいけばこういう風になるんだというのは、計算できるようにはなりました。	このやり方でいけばこういう風になるんだというの、計算できるようにはなりました	想定できるようになった	やりたいことが明確化	勝ち続ける事で明確化した勝利の方程式	
143	聴き手	「勝つことと、学生たちを上手くしてあげるそれは違うことですか。勝つために上手くしていくのか、それとも徹底してとにかく上手くしていくのかっていう方法で勝ちとかをあまり意識しないのか」					
144	コーチ	それはないですね。意識します。なのであんまりこう何も気にせずに無意識にやる練習とか、そういうのも組み込みながら。カヌーのテクニックって意識したらできることでもほとんどはレース中に意識できないで無意識の練習をいれる。意識してやる練習の方が多くて、いれるようにはしています。全くの競争とか、ただきつだけとか。結構パーセンテージを低くしてずっと漕がしているの、それやだいたい頭を使えるので、それをつかえないような練習をしています。	無意識にやる練習/競争とか/		ダブルゴールコーティング 運動学/心理学/組織論	意識を結果に向けさせる競争的練習	
145	聴き手	「その割合って変わってきているんですか」					
146	コーチ	変わってきました。もっとも無意識の練習がめっちゃ多くなって、限界を超える!的な練習でしたけど、今は少ないです。特にシーズンオフはそういう練習がほとんどです。	無意識の練習/限界を超える!的な練習/	量的練習/感情的な練習	量から質への転換がむしやら無我夢中	動作の改善・修正のために自分自身を理解させ自分の領域に意識を向けさせる指導 追い込む指導	・考える練習にしたことで、練習以外で何か変化もあったのか
147	聴き手	「チームの状態があまりいい状態じゃない時にそういう無意識でやらせるんですか」					
148	コーチ	とかは多いですね。うわー。ってインターバルとか、感情が出てくるんで、私たちがうっ!って私に対して庄を出してくるんですね。そうしたらしめして思えますけど。	インターバルとか、感情が出てくる/私に対して庄を出してくる/	勝ちたい、抜かしたいの感情が大切/立ち向かってくる	意図的な練習方法	意識を自分の動作の改善・修正に向かわせる練習 意図的な無意識意図的な感情の破壊 量で追い込む指導	
149	聴き手	「答えるのが簡単ではない質問だと思いますけど、カヌーを教えることと、インカレ優勝することを教えることって違いますか。言葉になりますか」					
150	コーチ	カヌーを教えるっていうのは自分の中にも答えがないくらいすごい難しいんですけど、カヌーを教えるのは100人いたら100個のアプローチがあると思うんですけど、インカレを勝つことは、先程のチーム変にも繋がりますけど、なんかこうどうやったら矢印を一つにできるかなとか、それだけですかね。温度差を最小にするとか。	自分の中にも答えがないくらいすごい難しい/どうやったら矢印を一つにできるか/温度差を最小にする	模索し続けている/方向性を同じにするにはどうやったら矢印を一つにできるか/学生熱を同じにする	集団の凝集性 集合的効力感	集団のベクトルを一つの方向に向けるチームマネジメント	・目標像がたくさんあるのか ・ルートがたくさんあるのか
番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の概念	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題

表11-5. 第四期のSCAT分析フォームを使った4ステップコーディング

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外概念	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題
151	聴き手	「その事が身体的な準備とか、技術的な準備とか、戦術的な準備とかそういったもの全て引き上げてくれるんですか。優勝する水準まで」					
152	コーチ	上げてくれると思います。なんか学生の上手になりたいとか、テクニックあげたいとかっていう欲求は高いので、それはインカレ優勝にも繋がっているとは思っているとは思いますが、私よりは、私はその辺ちょっと離れてはいますけど、学生の中では繋がっていると思います。考えさせる練習が多いので、そういう熟達欲求の話はされていますけど、そういうのは多少はあるのかなと思いますけど。	上手くなりたい/テクニックあげたい/欲求は高い	学生のカヌーに対するモチベーションが高い	学生が持つ熟達欲求の高さ	高い熟達欲求	
153	聴き手	「学生たちが熟達していく、上達していく、上達度とこの水準に到達しない限りインカレ優勝はないってなった時に上達度の評価と到達度の評価はどう区別されていますか」					
154	コーチ	できてない時もありますけど、できるようになったことは、言うようにしますけど、もしできていない時ははっきり言います。でもこれやったら関カレ決勝にもいけないねとか。	できるようになったことは、言う/できていない時ははっきり言います	出来たことは認める/	熟達目標（熟達度）の明確な評価/到達度の明確な評価	上達度と到達度を両方フィードバックする指導	
155	聴き手	「じゃあやっぱり2つはわけて返すときに評価をするんですね。」					
156	コーチ	私の指導は、変化を感じるだと思っているので、ちょっとした目標の変化だとかを逃さないようにとは思っています。勝てなかった時代は見えてなかったと思います。小さな変化というのは、視野を広くして今は見えているんですけど、その時はグーって1点だけを見ようとしていたので他のことが何もみえていなかった気がします。森の中でカメレオンだけを獲しても見つけれないから、森を見ようというのは思っています。	変化を感じる/ちょっとした目標の変化/視野を広くして今は見えている	小さな変化を逃さない	全体視 ズームイン/ズームアウト	変化を感じる事ができる指導者 学生のあらゆる変化を広角レンズのような広い視野と多様な視点で見逃さない コーチング	
159	聴き手	「見ようとしたときに、みてないところに実は変化があったけど、それを見落としていたということですか」					
160	コーチ	あ。そういうことです。全体視をすればなにか特別なことも、入ってきますけど、なにかこれだけをみていたら、他の全体視はできないと思います。まあそうなっている時は多々あります。カメレオンだけを見つこうとしている時は。	全体視	広く物事を見ること	全体視一部分視	学生のあらゆる変化を広角レンズのような広い視野と多様な視点で見逃さない コーチング	
161	聴き手	「言葉でわーって言うそうすると言っている事がどうなっているかなってみますよね、そうするとこうなりますよね。(狭く)それは個性とかいろんなやり方があるっていいとかっていう余裕が出てくると先入観なく見えるんですかね。」					
162	コーチ	ただ、個性と言ってしまうと学生って甘えんと言いか、ラインがどどんあやふやになっていくので、学生の前では個性とかはあんまり言わないようにしています。個性を大事にとかは言わないです。	個性/甘える/ライン	曖昧な基準/学生を開き直させてしまう		妥協できない到達基準を設定した理想の渾身の追求	
163	聴き手	「勝つことと上手くなっていくことのバランスが変わってきていると書かれているんですが、これは本当にこんな変化ですか」					
164	コーチ	はい。そうだと思います。でもそれが正しいかどうかは迷います。最近のチームをみていると8:2のときに戻したいと思う時があるんですけど	正しいかどうかは迷います/8:2/戻したい	悩み中/模索中	成績目標 (Winning) と熟達目標 (Mastery) の追求比率	ダブルゴールの目的	
165	聴き手	それは学生の勝つという執着心が下がっているということですか」					
166	コーチ	だから技術の練習が多いのでそっちに目が向きすぎているので、1番大事なことを忘れてる気がするの、戻したいけど、どうして戻そうとか、私がわーと言っても仕方ないんで、言ったら勝つぞ!とかっていう感じやったんですがそうじゃないよとか迷っているうちにどんどん時間は経ちます。	1番大事なことを忘れてる気がする/迷っているうちにどんどん時間は経ちます	根本的な、競技で勝とうとする心/時間は止まってくれない	熟達至上主義の否定/ファーストゴール追求の模索/ファーストゴールが学生から出てくる探求	外発的な勝利の要求 内発的な勝利の追求 低い勝利欲求	
167	聴き手	「負けないとわかんないことなんですかねそうすると」					
168	聴き手	そうおもいます。					
169	聴き手	「なにかのきっかけで負けたときにふとやっぱり勝ちたいっていう欲求が全面に出てくるんですかね」					
170	コーチ	だからなんかもう一人の悪い自分は、負ければいいのにとっています。ここだけのなし。	もう一人の悪い自分/負ければいいのに	新しいことに挑戦したい	第三者の視点	連覇が途切れることで再生する勝利欲求	
171	聴き手	「連覇することで学生たちの勝つことに対する意識は下がっている。でも逆にまけたらどうしようは上がっているんですかね」					
番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外概念	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題

表11-6. 第四期のSCAT分析フォームを使った4ステップコーディング

番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテキスト外の内容	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題
172	コーチ	そうですね。ちょっと可哀想ですけどね。そこをなんとかしてあげたいとおもいます。	なんとかしてあげたい	選手優先の気持ち	失敗不安/連覇の重圧	学生スポーツが生み出す代の重みで増幅する連覇の重圧	
173	聴き手	「学生たちからそんな発言は出てくるんですか」					
174	コーチ	でてこないですね。みてて感じるという感じです。なんかどんどん私が歳いったのか可愛くなるんですよ学生が。お母さんですよ。学生の言葉の中にも実際出てくるんですけど、わたしのことお母さんみたいですね。っていうのをよく聞くので、お母さんになってしまってるんかと思う時は多いです	みてて感じる/お母さん/	母親的存在	選手にとって母親的 コーチの存在	コーチにとっての子ども世代 学生にとっての親世代	
175	聴き手	「それは良くないとおもいます?」					
176	コーチ	でもやっぱり地方から出てきているので、そういう場面もあったりんですけど、頼れる、でも優勝目指すとかジャパンを目指すとかになったらちょっとその色が濃すぎるのかなかと思えますね。本来なら、先輩を頼ればいいところをわたしに全部こくるんで、先輩後輩の関係の希薄さとか、まあ感じます。	先輩後輩の関係の希薄さ	人間関係の希薄さ	選手同士の関わり方の 変化	コーチと学生の擬似親子関係が生み出す先輩と後輩の 関係の希薄さ	
177	聴き手	「勝ちたい勝ちたいと思っていたときに勝てなかったとして、勝って初めて分かったことってなんですか」					
178	コーチ	それまでは分かっていると思っていたんですけど、学生ってすごいんですよ。学生ってほんまは力あるはずって思っていたんですけど多分心の中ではおもってなかったんで、わたしがなんとかしてやろうと思っていたんですけど、あ。この学生ってほんまに凄いやと思いました。今の子今の子って言われるじゃないですか、もちろん変わったことはあるんですけど、でも絶対なにか力持ってるからっていつも思ってます。だからその力をなんとか引き出すためにわたしはおるんやと考えます。	わたしがなんとかしてやろうと思っていた/学生ってほんまに凄い/絶対なにか力持ってる/その力をなんとか引き出すためにわたしはおる	コーチ主体/学生を認める/学生を信じてあげる/信用してあげる	学生の持つ力への疑いから学生の持つ力を信じてることへの変化	無力な学生を教えるコーチ 有力な学生の力を引き出す コーチ	
番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテキスト外の内容	<4>テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	<5>疑問・課題

表 12. SCAT による分析から作成された橋本コーチのストーリーライン

橋本コーチストーリーライン第4期
<p>その後、現在に至るまでの7回の優勝経験は「究極のフィードバック」となり「優勝するために必要な戦術的要素・技術的要素の明確な理解」すなわち「競技力の構造の理解」は「失敗不安の消失」に繋がり、「結果を出すためのプロセスとして今その瞬間を楽しむことを追求」できるようになり、「学生のあらゆる変化を広角レンズのような広い視野と多様な視点で見逃さないコーチング」を行う「連覇期」が続いている。学生には、「学生スポーツが生み出す代の重みで増幅する連覇の重圧」がのし掛かっているが、コーチは「有力な学生の力を引き出すのがコーチ」という前提に立てるようになり「指導行動が少なく育成行動が多い育成・スーパーバイザー型コーチング」に変わった。</p> <p>橋本コーチは、高校時代のバレー部で「体育会系に内在する絶対的上下関係への嫌悪感」を抱き、大学時代には自ら「非合理性の排除」を行い「負の世代間伝達の断ち切り」を行った。しかし、コーチの立場になり「先輩の理不尽な要求が生む後輩の結束力」という「非合理性の持つ有用性」に気づき、あえて学生に「理不尽な要求」をするために「意図的に問題を創出する確信犯」を演じることも多い。「内向的である事のマイナス面が作り出す本音を言えないチーム」も、「コーチが演じる悪役」の出現によって「スモールステップ」で「インカレ最終日」に「ワンチーム」に仕向ける「組織的ピーキング」を目指す「集団のベクトルを一つの方角に向けるチームマネジメント」、すなわち「勝ち続ける事で明確化した勝利の方程式」が出来上がっていった。しかし、「学生スポーツ」ならではの「毎年構成メンバーが変わり同じ方法では対応できないという学年間の特性の違い」によって「コーチとしての引き出しの少なさ」を痛感し、自ら定義した「コーチとしての熟達段階の定義」ではまだ「熟達途中」と認識している。また、「勝ちが封じる変革」という「成功病の自覚」から「新しい挑戦への欲求」が芽生え、「負けが生み出す変革」を求めたい、あるいは「連覇が途切れることで再生する勝利欲求」を感じたいとも思い始めている。</p> <p>学生に対しては、「妥協できない到達基準を設定した理想の漕ぎの追求」のために行う「動作の改善・修正のために自分自身を理解させ自分の領域に意識を向けさせる指導」や「セルフイメージを明確化」し「上達度と到達度を両方フィードバックする指導」、すなわち「質で追い込む練習」が「高い熟達欲求」を生み出していると理解しつつも、「低い勝利欲求」には物足りなさを感じている。そのため、「ダブルゴールの目的」を変えるために「意識を結果に向けさせる競争的練習」や「意識を自分の動作の改善・修正に向かなくさせる練習」すなわち「量で追い込む練習」を用いて「意図的な無意識」「意図的な感情の破壊」を引き出そうとするが、それは「外発的な勝利の要求」になってしまうので「内発的な勝利の追求」が現れてくる指導を模索している。また、「コーチにとっての子ども世代」と「学生にとっての親世代」に近づいていくコーチと学生の関係性の変化は、コーチが行ってきた「タイムリーの厳しさ」に影響を及ぼし、「離れて自得を引き出す指導」すなわち「タイムリーに厳しく指摘して変える指導」から「近づいて質問や説明を使う指導」すなわち「タイムリーに指摘せずに変わるのを待つ指導」に変わっていき、インカレ優勝を目指すチームとしては「コーチと学生の擬似親子関係が生み出す先輩と後輩の関係の希薄さ」に物足りなさを感じている。</p>

橋本コーチがコーチングを開始してから現在に至るまでの約 24 年は、コーチのおかれていた環境、体験した出来事、コーチの思考と行動の変化といった観点から、大きく「カヌーを教えるという夢と海外で教えるという夢の同時スタート期」→「指導観・コーチング・フィロソフィーの基礎の形成期」→「勝利渴望期」→「連覇期」の 4 つの期に別けることができた。（図 4）

ストーリーラインの分析結果

カヌーを教えるという夢と海外で教えるという夢の同時スタート期



指導観・コーチングフィロソフィーの基礎の形成期



勝利渴望期(前半・後半)



連覇期

図 4. 橋本コーチのコーチングの変遷からみた 4 つの期間

第Ⅳ章 考察

1. 橋本コーチのコーチングに大きな変化をもたらした7つの経験

本研究では、橋本コーチのコーチングの変遷からみた4つの期間それぞれについて、ストーリーラインに含まれる構成概念を、コーチのおかれていた環境、体験した出来事、そこから生まれる思考と行動の変化といった視点から関係性を図示することによって理論記述を行った。

この手続きによって生成される理論は、大谷（2008）が、SCAT法で生成される理論とは普遍的かつ一般可能な原理のようなものではなく、あくまで小規模データから得られた個別的具体的な結果であると述べているように、全てのコーチに一般化できるとは限らない。生成された理論は、あくまでも橋本コーチ独自の経験を理論化していったものであり、理論の一般化には限界がある。しかし、會田（2014）が指摘しているように、コーチングの熟達過程という文脈とともに記述していくことによって、コーチ自身が私にも当てはまる部分があるかもしれないと類推できる、コーチングの実践現場に有用な、次の世代に伝承できる知になると考えられる。本研究では、SCATから抽出した構成概念を「 」、各期の中で橋本コーチのコーチングに大きな変化をもたらしたと解釈できる経験を【 】で表した。また、抽出された構成概念の中で、先行研究の知見を基に橋本コーチの熟達過程という個別の文脈がなくてもコーチの熟達のためには必要な構成概念、すなわち全てのコーチに一般化が可能な構成概念であると考えられるものについては、特に『 』で示した。さらに、全てのコーチに一般化できない構成概念の中でも、特に橋本コーチの熟達過程のみに特徴的と考えられるものについては「 」で示した。

1) 自分のコーチングを意識的に客観視する経験

図 5 に示した第 1 期目の「カヌーを教えるという夢と海外で教えるという夢の同時スタート期」では，一般職の離職から「縁を手繰り寄せる主体性」を活かし，「グローバルで活躍するコーチ」となるが，海外（台湾）では，日本語が通じないため，選手へ『思考の言語化』を行なった上で『簡潔で明確な説明』を筆談によって行うことを体得した．これらのことから，橋本コーチのコーチングを変化させる第 1 の経験は，【自分のコーチングを意識的に客観視する経験】であったと解釈した．

橋本コーチは，カヌー競技のコーチングを台湾という日本語が全く通じない海外で開始したため，コーチング開始直後，競技者として養ってきた主観的で非言語的な暗黙知を，客観的で言語的な形式知に変換しなければコーチングが成立しない状況に身を置いたことになる．その際には，日本語で思考したものを漢字に変換し，さらに筆談という手段でしか伝えられないため，『思考の言語化』と『簡潔で明確な説明』が求められる度合いは，日本語でコーチングを開始する場合よりも遥かに大きかったと考えられる．

暗黙知と形式知について村田（2012）は，暗黙知とは言葉や文章で表すことが難しい，主観的かつ身体的な知のことで感覚という次元のようなものを指し，形式知とは言葉や文章で表現できる客観的で言語的な知，あるいは科学的知識を指すものと述べている．

金子（2002，p356）は，人間は他の動物と異なり概念で思考でき，それと同時に登場してくる言語こそが，その場にある対象物から人間を解放させると指摘している．しかし同時に，ポラニー（1980）が主張するように，言葉で語ることはできない多くのことが存在し，運動感覚の意識体験を言葉に表して伝承するにも，そこには多くの難問が潜むと述べている．これらのことは，スポーツのコーチングにおける言語化の重要性和その限界を示すものであると考えられる．

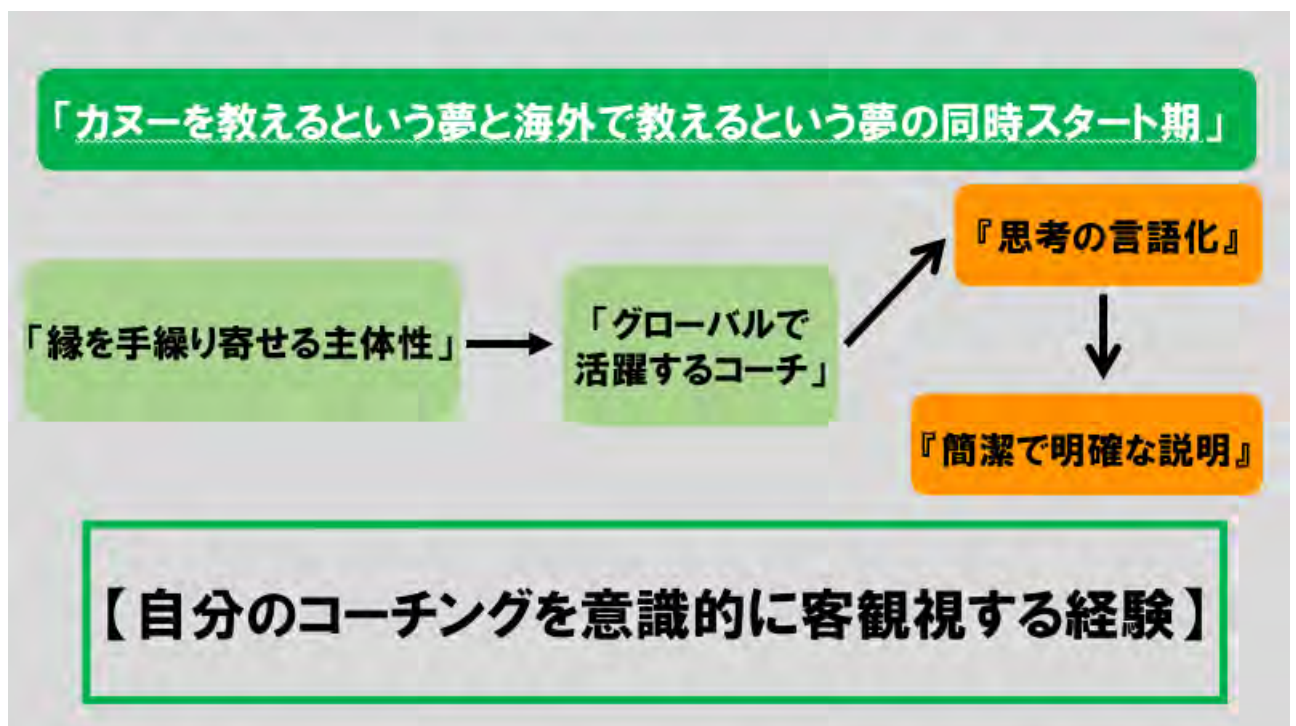


図 5. 第 1 期における体験と経験 ①

したがって、橋本コーチがコーチング開始直後に自分自身の思考や行動を言語化する体験を積んだことは、橋本コーチの熟達過程に特有の文脈であるが、スポーツのコーチングを全て指導者の師範示範と競技者の模倣だけで行うことが難しいことを考慮すると、可能な限り暗黙知を形式知に変換していく『思考の言語化』と『簡潔で明確な説明』という体験は、橋本コーチの熟達過程という文脈に関わらず、スポーツの指導を行うコーチには極めて重要であると考えられるため、一般化できる構成概念とした。

ストーリーラインから日本語が通じない、海外でのコーチングと責任ある有報酬でのコーチングという条件下でコーチングを開始したことによって、橋本コーチは熟達過程の極めて初期に意識的に自分のコーチングを客観視する経験を持ったことが明らかになった。このことは、日本語が通じるコーチングで、学校運動部内の先生と生徒という上下関係の学校運動部でボランティアとしてコーチングを開始することが多いという日本のスポーツ特有の環境が、『思考の言語化』や『簡潔で明確な説明』の必要性を低下させ、自分のコーチングを意識的に客観視する経験を積むことを疎外している潜在的な可能性を示している。また、自分のコーチングを客観視する経験が遅い、あるいは少ないということが、コーチングの成果が上がらないことを無意識に生徒の責任にしてしまう思考と行動を生み出している可能性も考えられる。対人関係の上下意識が指導者の優位意識へ繋がり、運動伝承の不首尾を指導者が一方的に受け手の努力不足ないしは能力不足に起因させてしまう危険性があることを金子（2002, p358）も指摘している。自分のコーチングに問題があるかもしれないという省察なしに、コーチが一方的に競技者に体罰を科すバイオレンスを伴った指導に陥らないためには、コーチ自身が意識的に『思考の言語化』と『簡潔で明確な説明』を体験する機会をつくり、意識的に自分の中の暗黙知を形式知へと変換していく経験を積んでいくことが重要であると考えられる。

2) 無意識的にモデル化した生育史を土台に，コーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドを意識的にモデル化しコーチングに取り入れる経験

図 6 に示した第 2 期目の「指導観・コーチング・フィロソフィーの基礎の形成期」では、『無意識的にモデル化』されていた「父の口癖」や高校時代の物事の「本質を見抜く先生との出会い」が土台となった。また，カヌーのコーチをしながら支援学校での勤務の日々を送る中で，「支援学校での両極端な指導法との出会い」は「自律的で支援的な指導法」と「他律的で強制的な指導法」というそれぞれ，良いコーチングと悪いコーチングと認識し，『意識的にモデル化』していった。これらのことから，橋本コーチのコーチングを変化させる第 2 の経験は，【無意識的にモデル化した生育史を土台に，コーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドを意識的にモデル化しコーチングに取り入れる経験】であったと解釈した。

Werthner and Trudel (2006) が，コーチとしての学びはコーチになってから初めて起こる訳ではなく，選手として活動しているときからすでに始まっていると述べているように，橋本コーチは高校時代の「本質を見抜く先生との出会い」が，選手の変化を感じる指導者になりたいという目標を持つきっかけになっている。また，Kenyon and McPherson(1973) が，コーチは選手時代のスポーツ参与期に両親の関わりが重要であると報告しているように，父の口癖が見返りを求めず人の強みを発見するといった物事の考え方の土台を作るきっかけになっていると考えられる。この二つの重要な他者との出会いは，橋本コーチ自身がインタビュー調査の中で「そういえば…～がきっかけだったかもしれない」と述べていることから，あくまでも無意識的にコーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッド形成に影響を及ぼしたと考えられる。一方，「支援学校で

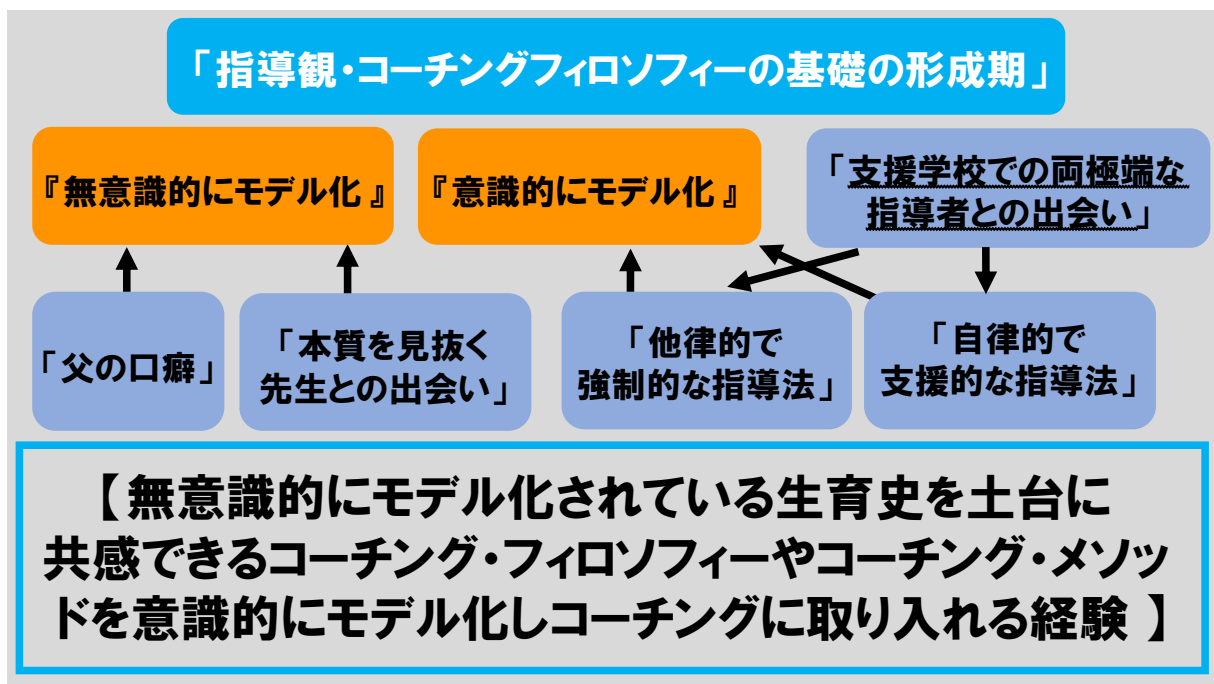


図 6. 第 2 期における体験と経験②

の両極端な指導者との出会い」によって、「他律的で強制的な指導法」と「自立を生む支援的な指導法」という、両極端な指導を同時に対比させることができたことは、橋本コーチがコーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドを意識的に形成していく上で重要なきっかけであったと考えられる。

「父の口癖」「本質を見抜く先生との出会い」「自律的で支援的な指導法」「他律的で強制的な指導法」は、橋本コーチの熟達過程に特有の文脈であり、また「支援学校での両極端な指導法との出会い」は、特に橋本コーチの熟達過程において特徴的な文脈であることから全てのコーチに一般化できる体験ではない。しかし、伊藤（2017, p22）が述べているように、指導者は他者との関わりから意識的であれ無意識的であれ様々なことを学び取っていることを考慮すると、『無意識的にモデル化』と『意識的にモデル化』の体験は、橋本コーチの熟達過程という文脈に関わらず、コーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッド形成にとって重要であると考ええられるため、一般化できる構成概念とした。

自分が無意識的にモデル化しているものを意識化する機会をつくることは、コーチの熟達過程にとって極めて重要であると考えられるが、自分が何を無意識的にモデル化しているかは、自分の思考と行動を自ら意識的に振り返るか、他者から指摘を受ける機会がない限り不可能である。しかし、ジョハリの窓 (Joseph Luft, 1984) で言われる自分は知らないが他人は知っている自己 (blind self) を自分自身の力で公開されている自己 (open self) にすることは極めて難しく、周りからフィードバックをもらって気づかせてもらうことが大事になる (佐藤, 2020)。そのため、Ericson (2007) は、指導者の熟達過程においてメンターコーチといわれるロールモデル的役割を取り入れる重要性を指摘しており、山田ほか (2016) も、コーチの熟達過程においてはエデュケーショナルコーチとの出会いが重要な要素であると述べている。これらのことは、どんなコーチにも、モデルとなる他のコーチのコーチング・フィロソフィーやコー

チング・メソッドを意識的に取り入れる体験，自ら求め，探し，実行してることが重要であることを示唆している．また，メンターコーチやエデュケーショナルコーチから第三者的に評価してもらう機会をつくることは，両親との関係性や自分が受けてきた指導を無意識的にモデル化している可能性が高いという点からも重要であると考えられる．

学校運動部の中で，顧問教諭が1名で指導するというケースが多い日本の現状では，他校にモデルを探す方法か，学内の他種目の指導者にモデルを求める方法のいずれかの方法を検討せざるを得ない．しかしその際には，Byrne(1971)が，二者間の態度が類似しているほど対人魅力は増大すると報告しており，類は友を呼ぶということわざもあるように，人はどうしても自分の価値観と類似した価値観をもった仲間を増やす傾向や，違う価値観からの意見は受け入れにくいという傾向が高いことを意識する必要がある．勝利至上主義やバイオレンスを伴った指導についても，その価値を受け入れているコーチ同士が仲間となって集まってしまう危険性が高い．勝利至上主義に陥らずに勝利という結果を達成しているコーチを探し，意識的にそのコーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドを取り入れていく経験を積んでいく経験が極めて重要であると考えられる．

3) 勝利を第一優先に追い求めて試行錯誤するが勝てないまま強制・強要する指導方法に陥る経験

図 7 に示した第 3 期目の「勝利渴望期（前半）」では、「武庫川女子大学カヌー部プロコーチ就任」後、『プロコーチに求められる結果責任が生み出す焦燥感』や『優勝未経験者が抱く焦燥感』からコーチの『失敗不安』が高まり、『勝てない原因を他者に要求』し『強制的で感情的な指導』に陥り、『楽しみよりも結果を出すためのプロセスを追及』するようになった。これらのことから、橋本コーチのコーチングを変化させる第 3 の経験は、【勝利を第一優先に追い求めて試行錯誤するが勝てないまま強制・強要する指導方法に陥る経験】であったと解釈した。

Drewe (2000) は、焦燥感や失敗不安について、多くのコーチが直面している非常に現実的なプレッシャーは勝利についてであり、また、Entine (2000) は、勝てなければ追い出されてしまうという事実が厳然として存在すると述べている。また、Thompson

(2010) が、コントロール不可能な事例の最たるものは競技の得点結果であり、試合の勝者が誰になるかをコントロールすることはできず、自分にコントロールできないことに焦点を置くことは、自信を低下させ不安を高めると報告している。したがって、ボランティアコーチから結果が強く要求されるプロコーチへの任用替えという体験は、試合結果に対する強い危機感や焦燥感で『失敗不安』に駆られ、コーチが第 2 期で形成しつつあったフィロソフィーやメソッドを見失い、『楽しみよりも結果を出すためのプロセスを追及』に傾斜する大きな原因になったと考えられる。

武田 (1985) は、経験の浅い指導者は、何をどう指導したらよいか具体的な方法が分からないと、力でもって押さえつけ、怒鳴りつけ、雷を落とすことにより自分の指導者としての無力さを隠そうとするようであると報告している。橋本コーチも、焦燥感や失敗不安が『勝てない原因を他者に要求』し、批判的な言葉や非言語的行動

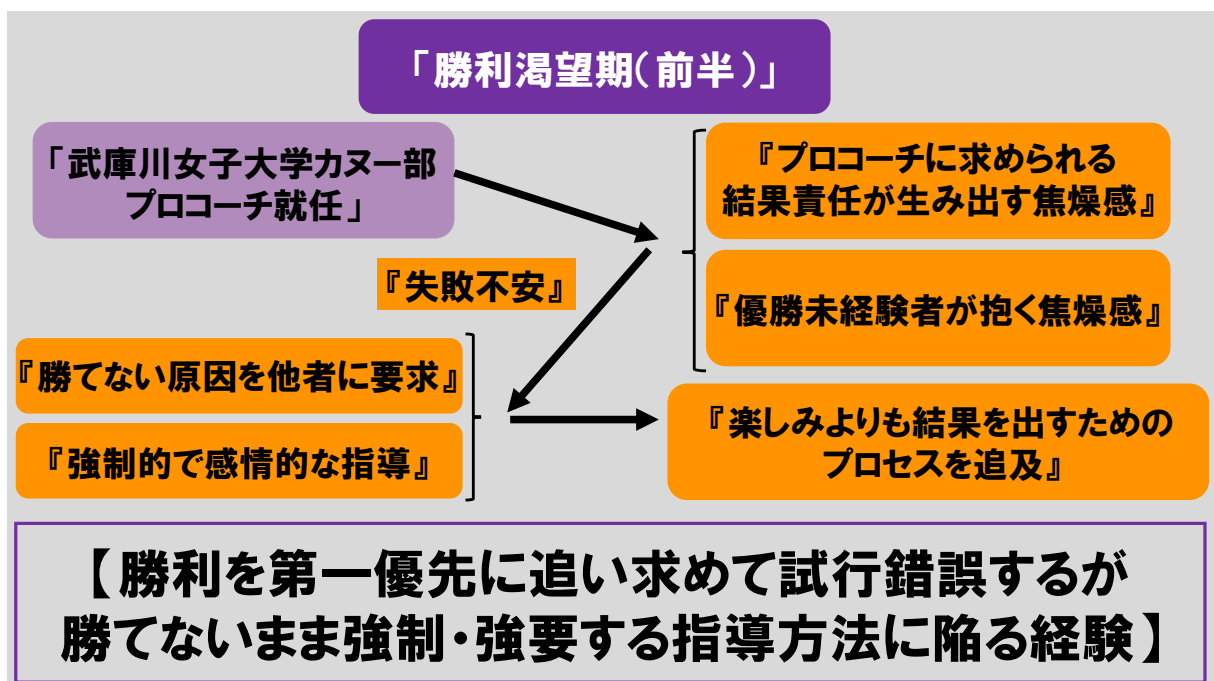


図 7. 第 3 期（前半）における体験と経験③

(Thompson, 2010) で『強制的で感情的な指導』を行うきっかけになったと考えられる。また、この指導は Thompson (2010) が述べている、選手の Emotional Tank を空っぽにする Tank Drainer の言動であると解釈できる。これらのことから、「勝利渴望期（前半）」の橋本コーチの指導は、Thompson (2010) のダブルゴール・コーチングの概念からみると、目的が Winning に設定され、インカレで優勝するという Scoreboard で示される目標を達成することを最優先する勝利至上主義に方向づけされていたことを示唆している。

「武庫川女子大学カヌー部プロコーチ就任」は、1 期 3 年契約という短期間で結果を出さなければいけないプロコーチとしての結果責任を、自分で背負い込む橋本コーチの熟達過程に特有な文脈と解釈することができる。しかし、コーチの置かれている環境の変化は、若手コーチが新しくコーチングを始める体験、アシスタントコーチからヘッドコーチになる体験、ボランティアコーチから有報酬のコーチになる体験、学校運動部の顧問としてある一定の成果を出していた先生が新しい学校へと転勤する体験（公立高校であれば 10 年で異動が一般的）など、様々なコーチが熟達過程において体験するものと考えることができる。したがって、コーチは自分の指導立場が変わるという体験に、思考と行動を無意識的に勝利至上主義コーチングへと向かわせる危険性があることを自覚しておく必要があると考えられる。これらのことから、この勝利渴望期（前半）で抽出した構成概念は、「武庫川女子大学カヌー部プロコーチ就任」以外は全てコーチに一般化できる構成概念とした。

4) 勝てない原因を自分に求めて学び直し，個に応じた指導・組織マネジメントで初優勝する経験

図 8 に示した第 3 期目の「勝利渴望期（後半）」では，橋本コーチ自身が『勝てない原因を自分に見出し』，『自分の領域への意識の方向転換』を行うと同時に，コーチングの「知識を増やすために入学した大学院」で「組織論の知識」を学び，「チームの効果的なマネジメント法」に出会い，『指導の個別化』で『個性重視』の指導を行えるようになりインカレ初優勝をした．これらのことから，橋本コーチのコーチングを変化させる第 4 の経験は，【勝てない原因を自分に求めて学び直し，個に応じた指導・組織マネジメントで初優勝する経験】であったと解釈した．

武田（1997）は，コーチングは自らの無知と未熟さを認めることから出発すると述べている．また，大嶽（2011）は，自身の指導方針，指導法，選手との関係など，指導におけるこれまでのさまざまな経験を振り返り，克服すべき点を洗い出していくことが一流指導者への第一歩であると指摘している．橋本コーチは，勝利渴望期（前期）において『勝てない原因を他者に要求』する思考と行動に陥っている．しかし，試行錯誤を重ねてもインカレ優勝に届かない体験から，自らの指導方針，指導方法，選手への関わり方を振り返り，自分で自分の未熟さや知識の少なさを自覚し，知識を増やすためにコーチをしながら大学院で学ぶという選択をしている．橋本コーチの思考と行動が，なぜ自分自身の無知に向かったのかについては，経験②で述べた見返りを求めない父の口癖や，支援学校で出会った自律的で支援的な指導法の影響が大きかったのではないかと推察される．インタビューに先立って行ったアンケート調査票にも，橋本コーチのコーチングの特徴はなんですか？という質問に対して，「のにと言わない」という言葉が書かれていたことは，自分がどのような指導を行ったか，自分がどれくらい指導を行ったかは問

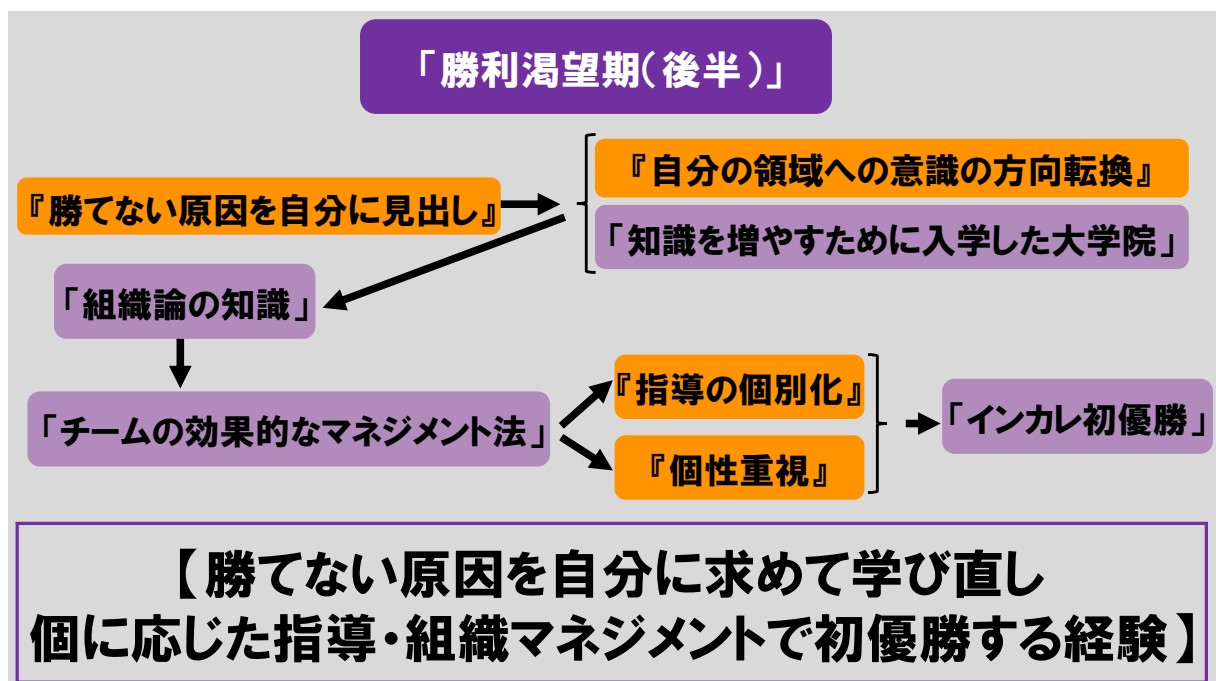


図 8. 第 3 期（後半）における体験と経験④

題ではなく，学生がどのくらい変わったかがコーチの評価であるという考え方を，橋本コーチが潜在的に持っていたことを示唆している．

橋本コーチは，大学院において「組織論」として「チームの効果的なマネジメント法」を学んだことにより，これまでチーム内の選手を均一化しようとしていたコーチング・メソッドから，『指導の個別化』と『個性重視』の指導へと転換するきっかけを掴んでいる．大嶽（2011）は，選手それぞれが個性を持ち，自己を認め，他を認め，多種多様な特徴がある選手が多くチームに存在することが大切であると述べているが，橋本コーチは，自らの指導を振り返り，学んだ知識を現場で実践し，多種多様な選手の個性や強みをうまく活かせる環境を作り，インカレ初優勝を体験している．指導の個別化は，スポーツトレーニングにおける個別性の原則（尾縣，2017，p139）の視点からも，重要な変化であったと考えられる．これらのことは，橋本コーチが，認知バイアスの一種である自分が持つ仮説や信念を支持する情報ばかりを集め，反証する情報は無視または集めようとしない傾向である確証バイアス（無藤，2009）を働かせることなく，自分のコーチングに足りないものを学びによって埋めていくことができたことを示している．これらのことから，大学院への進学，そこでの学び，インカレ初優勝という体験は，橋本コーチの熟達過程に特有な文脈であるが，『勝てない原因を自分に見出し』『自分の領域への意識の方向転換』『指導の個別化』『個性重視』という体験は，コーチに一般化できる構成概念とした．

アインシュタインは，狂気とは同じ行動を繰り返しながら違う結果を望むことであると述べており（Calaprice, 1977），コーチが試行錯誤を重ねていく熟達過程の中で，自分自身が研鑽を重ね新しい知見を取り入れ，コーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドを修正し，同じことの繰り返しから脱出していけるかどうか，勝利を渴望期するコーチの最も重要な課題になると考えられる．日本スポーツ協会の公認指導者資格養成事業においても，コー

チが自己研鑽を続けられる仕組みとして、資格更新のために様々な研修を義務付けしている。

5) 勝ち続けることによってコーチング・フィロソフィーが明確になっていく経験

図 9 に示した第 4 期目「連覇期」では，インカレで『優勝するために必要な戦術的要素・技術的要素の明確な理解』すなわち『競技力の構造の理解』が，コーチの『失敗不安の消失』につながり，「学生のあらゆる変化を広角レンズのような広い視野と多様な視点で見逃さないコーチング」ができるようになり，『結果を出すためのプロセスとして今その瞬間を楽しむことを追及』できるようになった．これらのことから，橋本コーチのコーチングを変化させる第 5 の経験は，インカレで【勝ち続けることによってコーチング・フィロソフィーが明確になっていく経験】であったと解釈した．

図子（2003）は，コーチとは，スポーツ実践の場で生じる様々な問題を合理的に解決し，選手・チームの未来を創造的に設計し，実現できる専門家であると述べている（図 10）．坂井（2011）も同様に，問題解決型思考サイクルに沿ったコーチングサイクルを提案している（図 11）．これらは，いずれも現状を正確に評価し，目標を明確に設定し，その差を問題と捉え，問題を生み出している原因を構造的に捉え，課題に優先順位を設定し，課題を達成する手段を選択・創造し，計画立案し，実際に練習や試合を経てその効果を評価し……という循環の重要性を示している．問題解決型思考サイクルに沿ったコーチングでは，指導している競技の競技力構造の理解が極めて重要になる．橋本コーチは，経験③や経験④の勝利渴望期から続く試行錯誤の連続の中で，この問題解決型思考サイクルを回し続けていたと推察できる．その結果，インカレ優勝を達成したことによって，インカレ優勝に必要な技術・戦術的要素，身体的要素，心的・知的要素それぞれの水準や，要素間の関係性についての構造的な理解が深まったと考えられる．このことは，橋本コーチが，目の前の学生の現在の水準と優勝に必要な水準との差を正確に

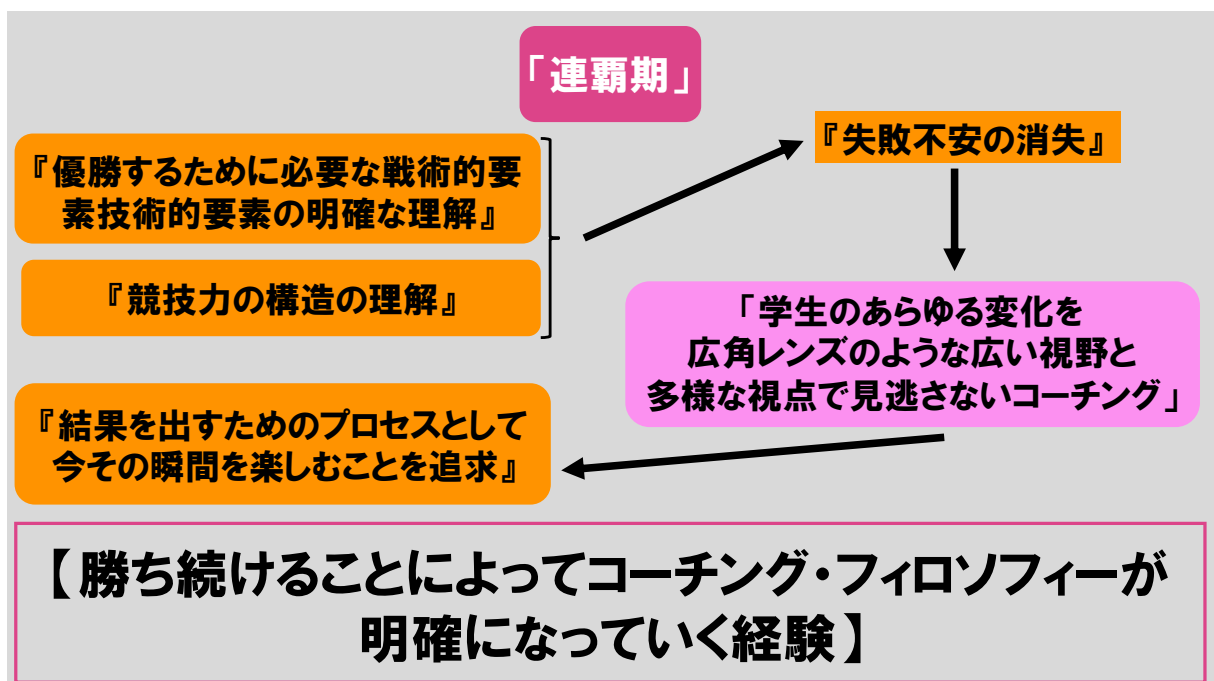


図 9. 第 4 期における体験と経験 ⑤

トレーニングとは？

錯綜し合う複雑な諸要因を構造的に組み合わせながら、
目標とするパフォーマンスに至る創造作業

目標の実現まで限らない試行錯誤を繰り返す

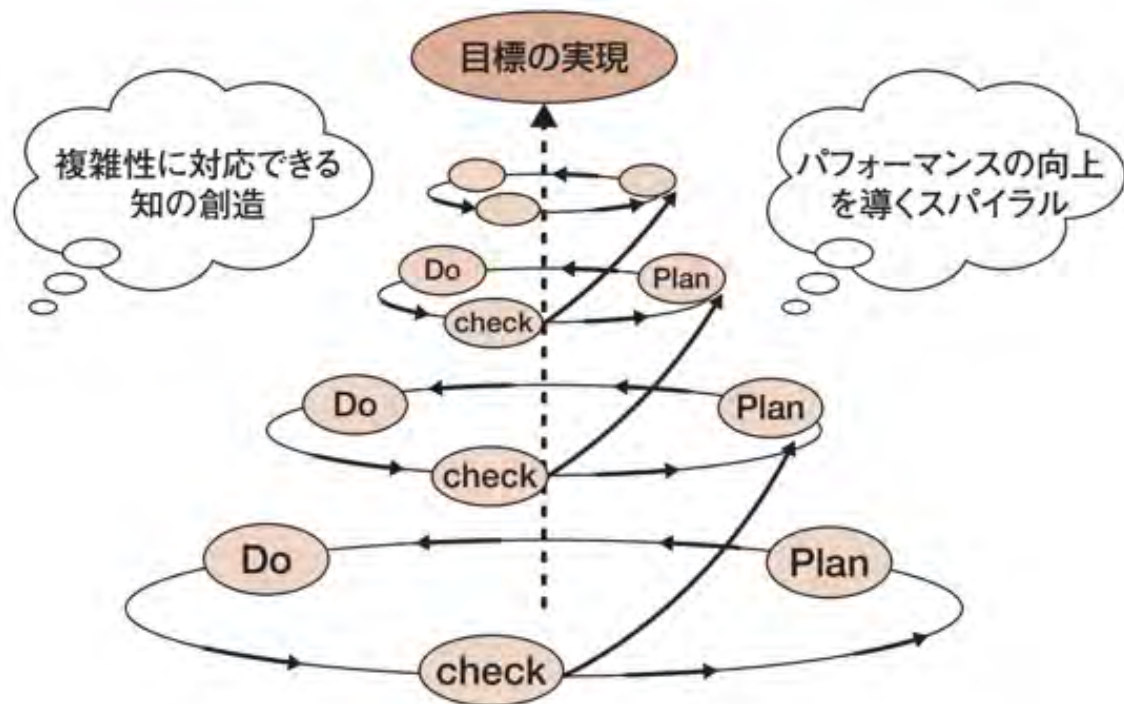


図 10. トレーニング現象と問題解決型思考・行動スパイラル
(図子, 2003)

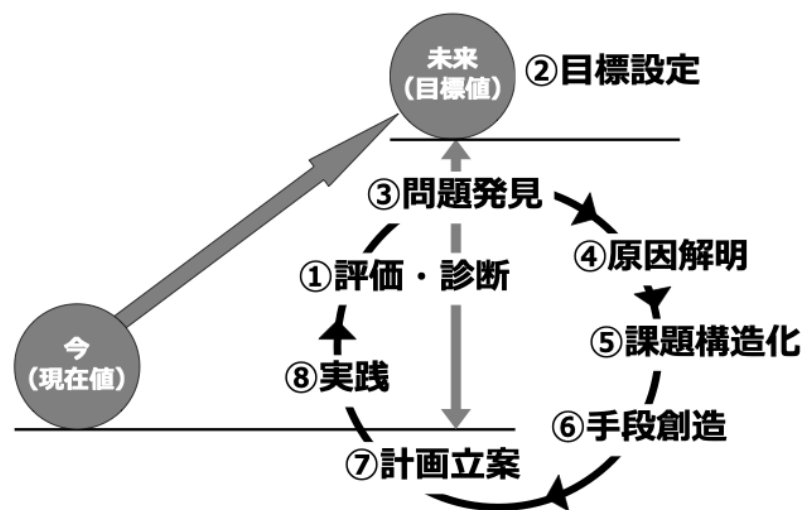


図 11. 問題解決型思考に沿ったコーチングサイクル（坂井，2011）

評価することができ、その差を生み出す原因、その原因を解決するための課題と手段を明確に理解できる状態になっていることを示唆している。

勝利渴望期における焦燥感の中で、この方法はあっているのだろうか？この方法はうまくいくのだろうか？といった不安感を抱きながら、結果が見えないまま試行錯誤を続けている状態とは異なり、連覇期では橋本コーチの心的負担はかなり軽減されたと考えられる。自分にコントロールできない未来の結果に対する不安が軽減されたことにより、橋本コーチがもともと目指していた「変化を感じる事ができる指導」を実現するために、意識を今その瞬間の学生の観察に向けられるようになり、学生の変化を引き出していくプロセスそのものを楽しめるようになったと解釈することができる。これはまさに、Masteryの先にあるWinningを目指すというThompson（2003）のダブルゴール・コーチングの思考と行動そのものであり、連覇期においては橋本コーチが勝利至上主義を完全に克服していたことを示している。

「今ここ」という考え方は、スポーツ指導だけでなく、フロー理論（Csikszentmihalyi, 1975）、マインドフルネス（Kabat-Zinn, 1990）といった集中力を高めることや、不安を低下させるための手法として広く用いられている。これらのことから、「学生のあらゆる変化を広角レンズのような広い視野と多様な視点で見逃さないコーチング」という体験は、橋本コーチが目指していたコーチングであり、橋本コーチの熟達過程に特有の文脈であるが、『優勝するために必要な戦術的要素・技術的要素の明確な理解』『競技力の構造の理解』『失敗不安の消失』『結果を出すためのプロセスとして今その瞬間を楽しむことを追及』は、勝ち続けるコーチに一般化できる構成概念とした。

しかし、橋本コーチが体験した連覇期を、コーチ全てが体験できるわけではないことは明白である。また、橋本コーチは連覇期において初めて失敗不安の消失を体験し、ダブルゴール・コーチングを

明確に実践できるようになっているが，このことは，勝ち続けられるようになるまでコーチから失敗不安が消失することはないのか？ダブルゴール・コーチングは実践できないのか？という疑問を生じさせる．本研究からは，この間に明確に答えることはできないが，少なくとも自分の経験を「省察」しながら問題解決型思考サイクルを回し続け，失敗経験も成功経験も全て自分の体験としながら競技力構造の理解を深めていく Thompson a Learning の思考と行動が重要になると考えられる．

6) 勝ち続けることによってコーチング・メソッドが明確になっていく経験

図 12 に示した第 4 期目「連覇期」では、「タイムリーに指摘せず変わるのを待つ指導」，「動作の改善・修正のために自分自身を理解させ，自分の領域に意識を向けさせる指導」，近づいて質問や説明を行う指導」，「上達度と到達度両方フィードバックする指導」，「集団のベクトルを一つの方角に向けるチームマネジメント」，「離れて自得を引き出す指導」などの，効果的な指導方法の理解が進み，インカレを『勝ち続けることで明確化した勝利の方程式』ができあがった．これらのことから，橋本コーチのコーチングを変化させる第 6 の経験は，【勝ち続けることによってコーチング・メソッドが明確になっていく経験】であったと解釈した．

勝利の方程式という用語は，プロ野球において西武ライオンズを日本一に導いた広岡達朗監督が勝者の方程式という書を著したことでスポーツ界に広まり，以後様々な種目において同様の書籍や記事が報告されている．また，勝利の方程式は，ビジネスの領域においても数多く用いられている．これらのことは，スポーツ界に限らず様々な領域における成功が偶然の産物ではなく，ある一定の法則的な型から生み出されていることを示していると考えられる．したがって，どのような具体的な手法を用いるかは，コーチのおかれている環境や指導する対象に依存するため唯一の正解はなく千差万別であるが，コーチが思考と行動に「型」を確立することは極めて重要であると考えられることから，『勝ち続けることで明確化した勝利の方程式』のみ一般化できる構成概念とした．

しかし，表 6（伊藤，2017. p188）に示したコーチングにおける自律性支援の成分と心理欲求との関係と，橋本コーチが連覇期で体得したコーチング・メソッドを対比させてみると，表 7 に示したように，5 つのコーチング・メソッドが，有能さの欲求，自律性の欲求および関係性の欲求を充足する具体例に近いと解釈することがで

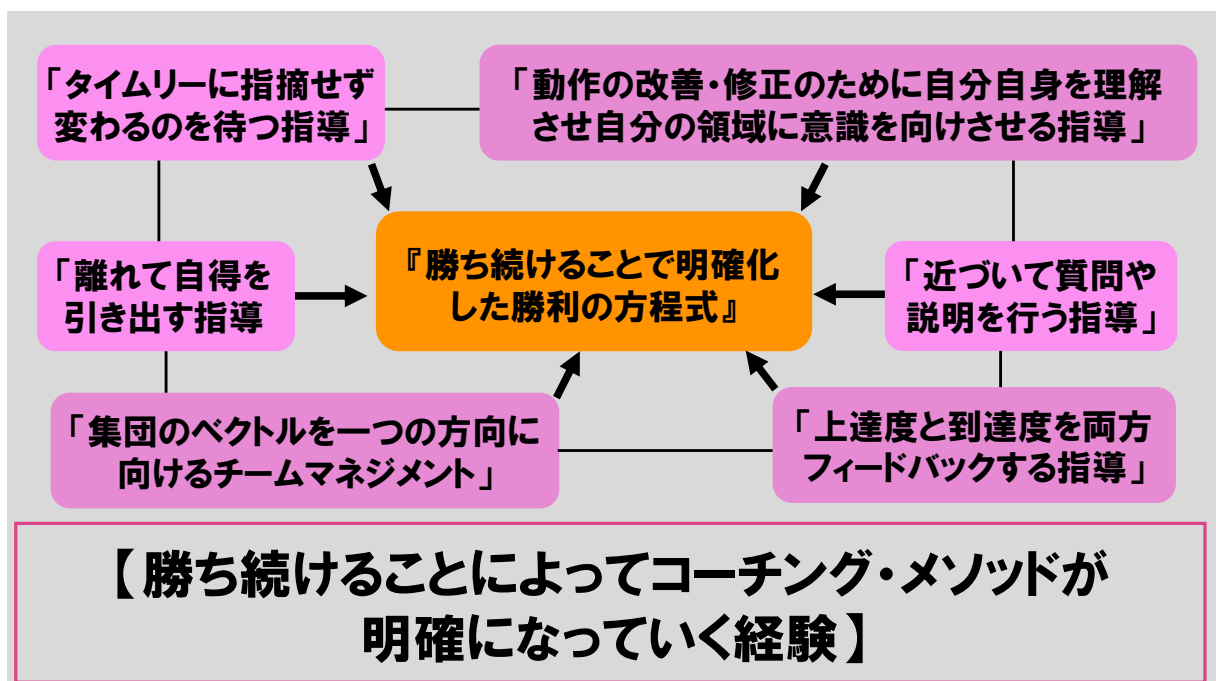


図 12. 第 4 期における体験と経験 ⑥

表 6. コーチングにおける自律性支援の成分と心理欲求との関係

成分	具体例	基本的心理欲求
構造	<ul style="list-style-type: none"> ○指導者が目標や期待を明確に伝える ○最適な挑戦の機会を提供する ○適切なフィードバックを与える ○努力や進歩をほめる ○選手に一人一人に合わせた指導を行う 	有能さへの欲求
自律性支援 (狭 義)	<ul style="list-style-type: none"> ○選手に選択の機会を提供する ○選手に自ら工夫することを促す ○選手に意見を聞いたり, 選手の意見を尊重する ○選手を意思決定に参加させる ○選手自ら練習の必要性を認めるまで待つ ○指導者の価値を選手に押し付けない 	自律性への欲求
関与	<ul style="list-style-type: none"> ○一人一人の選手に注意や関心を示す ○一人一人の選手に肯定的感情をもつ ○自らの能力や知識を選手に提供する ○できるだけ選手とともに過ごす ○特定の選手をひいきしない ○性格や能力に関わる罰や批判を回避する 	関係性への欲求

伊藤 (2017) から薦田作成

表 7. 橋本コーチが連覇期で体得したコーチング・メソッド
(表 6 で示した伊藤 (2017) との対比)

成分	橋本コーチのコーチング・メソッド	基本的心理欲求
構造	○上達度と到達度を両方フィードバックする指導	有能さへの欲求
自律性支援 (狭 義)	○タイムリーに指摘せず変わるのを待つ指導 ○動作の改善・修正のために自分自身を理解させ 自分の領域に意識を向けさせる指導 ○離れて自得を引き出す指導	自律性への欲求
関与	○近づいて質問や説明を行う指導	関係性への欲求

きる．伊藤（2017．p187）は，自己決定理論を基に，人は生得的に持っている有能性，自律性および関係性の3つの基本的心理欲求が充足されることで，自律的な動機づけが高まると述べている．これらのことは，勝利渴望期（前期）において統制的行動で外発的に動機づけしていた橋本コーチの行動が，連覇期ではダブルゴール・コーチングに転換し，競技者の3つの心理的欲求を満たす行動になっており，競技者の内発的動機づけを高める自律性支援行動になっていたことを示唆している．したがって，コーチがおかれている環境や指導対象に応じた競技者の内発的動機づけを高める自律性支援行動をとれるかどうか，勝利至上主義から脱却して勝利の方程式を確立するための重要な鍵になると考えられる．

また，中川（2011）は，コーチングに関わるマネジメント活動の中で，最も重要なものはクラブやチームの組織化であり，コーチは主力選手・控え選手など異なる立場にあるアスリートに1つの目標を共有させ，目標達成のために有意義な役割を持たせていかなければならないと述べている．松元（2017）も，チーム文化に直接触れる機会を設けチームへのロイヤリティーの創造やシンボリックな言葉の統一など，チーム固有のモノを通してメンバーの一体感を図るといったアイデンティティーの確立の重要性を指摘している．さらに，個人競技でもチームマネジメントの重要性は指摘されており，ロンドン五輪で競泳日本代表のヘッドコーチを務めた平井伯晶コーチは，チームが選手個人をサポートしながら，選手個人がチームを引っ張っていく体制は，個の強さを最大限に引き出すためのチーム作り，すなわち個を伸ばすチーム力や組織作りとしの重要であると述べている．橋本コーチの勝利の方程式の中にも「集団のベクトルを一つの方向に向けるチームマネジメント」が含まれている．これらのことから，本来は個人競技であるカヌー競技のコーチングだが，各レースのポイントの総合得点で学校対抗を競うインカレで優勝するためには，単に競技者個人の内発的動機づけを高める思考と行動だけでなく，「インカレ最終日」に「ワンチーム」に仕向ける

「組織的ピーキング」を強く意識する思考と行動が重要であると考えられる。

7) 勝利の方程式に満足せず新しいコーチング・メソッドを探求する成長欲求を抱き続ける経験

図 13 に示した第 4 期目「連覇期」では、大学スポーツならではの『毎年構成メンバーが変わり同じ方法では対応できないという学年間の特性の違い』から「コーチとしての引き出しの少なさ」を痛感しており、自分ではまだ『熟達途中』であると認識している。また、橋本コーチは、『勝ちが封じる変革』すなわち勝っているから大きくコーチングを変えることができない、あるいは『負けが生み出す変革』、すなわち負けたら大きくコーチングを変えることができるなど、「新しい挑戦への欲求」が芽生えている。さらに、「連覇が途切れることで再生する勝利欲求」を感じたいとも思い始めている。これらのことから、橋本コーチのコーチングを変化させる第 7 の経験は、【勝利の方程式に満足せず新しいコーチング・メソッドを探求する成長欲求を抱き続ける経験】と解釈した。

2020 年全国ラグビー大学選手権大会を 11 シーズンぶりに優勝で飾った早稲田大学ラグビー部・相良南海夫現監督は、選手権の連覇に対して大学生は毎年チームが変わるので、連覇ということは意識せず、一步一步いこうよと学生には言いたいですねと応えている（斎藤，2020）。また、日本スポーツ協会（2019）は、スポーツ指導者像には選手のニーズや要望に合わせ指導者は同じことを伝えるにも、選手に応じて話し方を工夫するなど、個々人の特徴に対応した一対一のコミュニケーションを図ることが求められると述べている。さらに、俵（2003）は、選手の要求に対し最もいい答えを出すための手段や方法を、従来の経験則だけに頼るのではなく、科学的根拠をベースに、どれだけたくさん持っているか、一つのことを教えるのにも幾つもの引き出しがあり、様々な角度から持っている引き出しを使いこなせる指導者を目指さなければならないと指摘している。これらのことから、プロスポーツとは異なり学校運動部でのスポーツ指導が多い日本の環境では、このメンバーでもう 1 年戦う

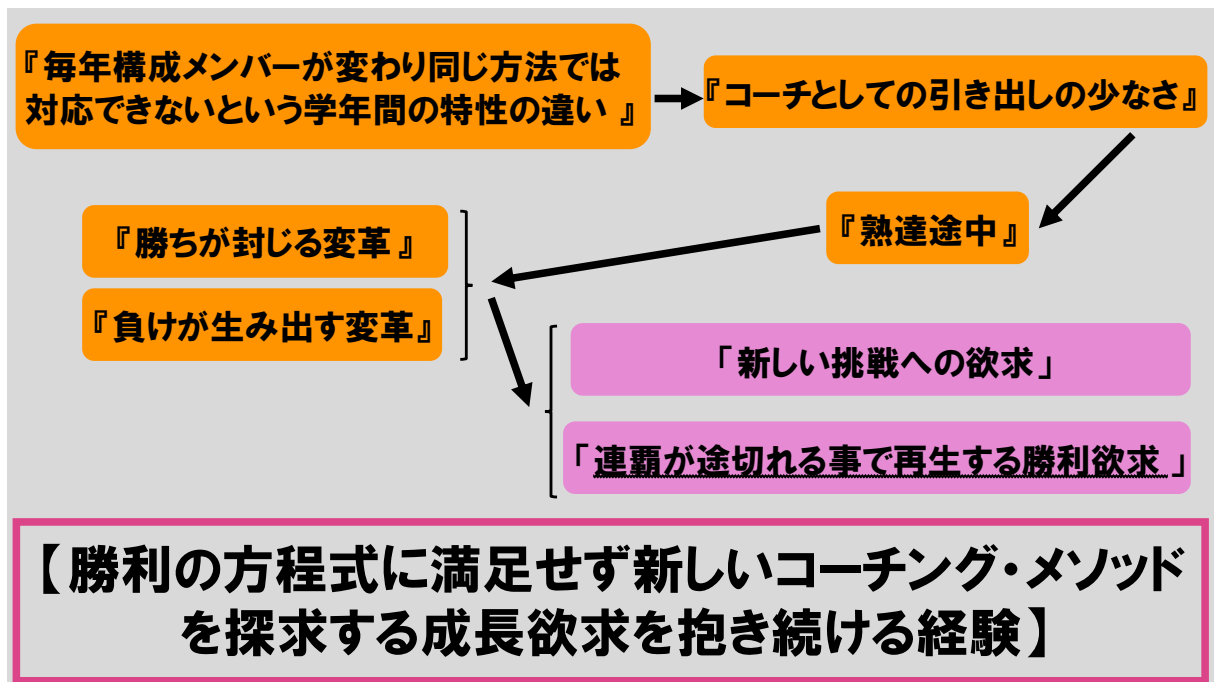


図 13. 第 4 期における体験と経験 ⑦

ということとはできないことを考えると、『毎年構成メンバーが変わり同じ方法では対応できないという学年間の特性の違い』は、特に学校運動部のコーチが克服しなければならない一般化できる構成概念であると考えられる。

また、サッカー元フランス代表監督ロジェ・ルメール氏が我々は学ぶことをやめたときに、教えることをやめなければならないと述べているように、スポーツ指導者は多様なニーズに的確に対応するため、常に自己研鑽を図り、自ら成長・発展し、周囲から尊敬・信頼される人間であることが日本スポーツ協会でも求められている。橋本コーチが感じた『コーチとしての引き出しの少なさ』は、更なる自己の成長を促すものであり、インカレ連覇にも満足せず、自身のコーチングについて『熟達途中』と自覚する思考と行動も、全てのコーチが常に自己研鑽をし続けるために必要となる構成概念であると解釈した。さらに、進化したければ、成功体験を捨てよ（午藤，2014）という言葉があるように、うまく行った旧来の方法にしがみつくと、もっと効果的な新しい方法を採用できなくなってしまうことがある。堺屋（1993）は、成功体験が逆に環境の変化に対応できなくなる原因になってしまうことを成功体験への埋没という言葉で表現している。橋本コーチは、連覇が続いている状況の中だからこそ現在の方法を改善することはできても、思い切った新しい方法を試す変革ができないというジレンマを感じている。また、橋本コーチが感じている「連覇が途切れることで再生する勝利欲求」は本来勝ち続けたいと思うことを、一度負ける事でもう一度勝利欲求を味わいたいという、橋本コーチの熟達過程において特徴的であると考えられる。このことは、どのような水準での勝利体験であっても、コーチがその成功体験へ埋没しないよう自覚的に危機意識を持つために必要となる『勝ちが封じる変革』と『負けが生み出す変革』が、一般化できるという構成概念になることを示唆している。

2. 勝利至上主義コーチングに陥らないための現場への提言

SCAT 法では，複数の調査対象者にインタビュー調査を行うことができる。調査対象者ごとに作成された複数のストーリーラインから共通な構成概念を抽出することによって理論記述を行い，複数のインタビュー結果から得られた知見を一般化していく作業が可能になる。しかし，本研究は橋本コーチの一事例であるため，ストーリーラインも一事例となる。全てのコーチが，橋本コーチと全く同じ経緯を辿ることは不可能であるため，橋本コーチの一事例から全てのコーチに一般化できる理論記述を行うことはできない。本節では，考察 1 を基に橋本コーチの熟達過程を概観し，勝利至上主義コーチングを克服するために必要な思考と行動という視点から，現場のコーチに有用となる視点の抽出を試みた。

図 14 に，橋本コーチの熟達過程を，『経験』と『体験』に分けて時系列的に示した。4 期の中には 7 つの【経験】が含まれ，現場のコーチへ一般化できる計 24 個の『体験』があることを表している。また，24 個の体験のうち『 』で表した 9 個の『体験』は，先行研究の知見から勝利至上主義コーチングを克服するために必要な体験であると解釈できたものを示している。

橋本コーチが勝利渴望期（前半）に勝利至上主義コーチングに陥ったように，現場のコーチは，勝てない時期に勝利至上主義コーチングに陥ってしまう可能性が極めて高いと考えられる。しかし，橋本コーチは 9 個の『体験』うち 5 個を，勝利渴望期（後期）以降に体験している。このことは，コーチの思考と行動次第では勝利至上主義コーチングに陥らずに勝利渴望期を超えて初優勝期を迎えたり，連覇期を経験したりすることが可能であることを示唆している。

そこで，図 14 に示した橋本コーチの熟達過程から抽出された現場のコーチに一般化できると考えられる 24 個の『体験』と，その中に含まれる勝利至上主義コーチングを克服するために必要と考えられる 9 つの『体験』を，ストーリーラインとして再文脈化するこ

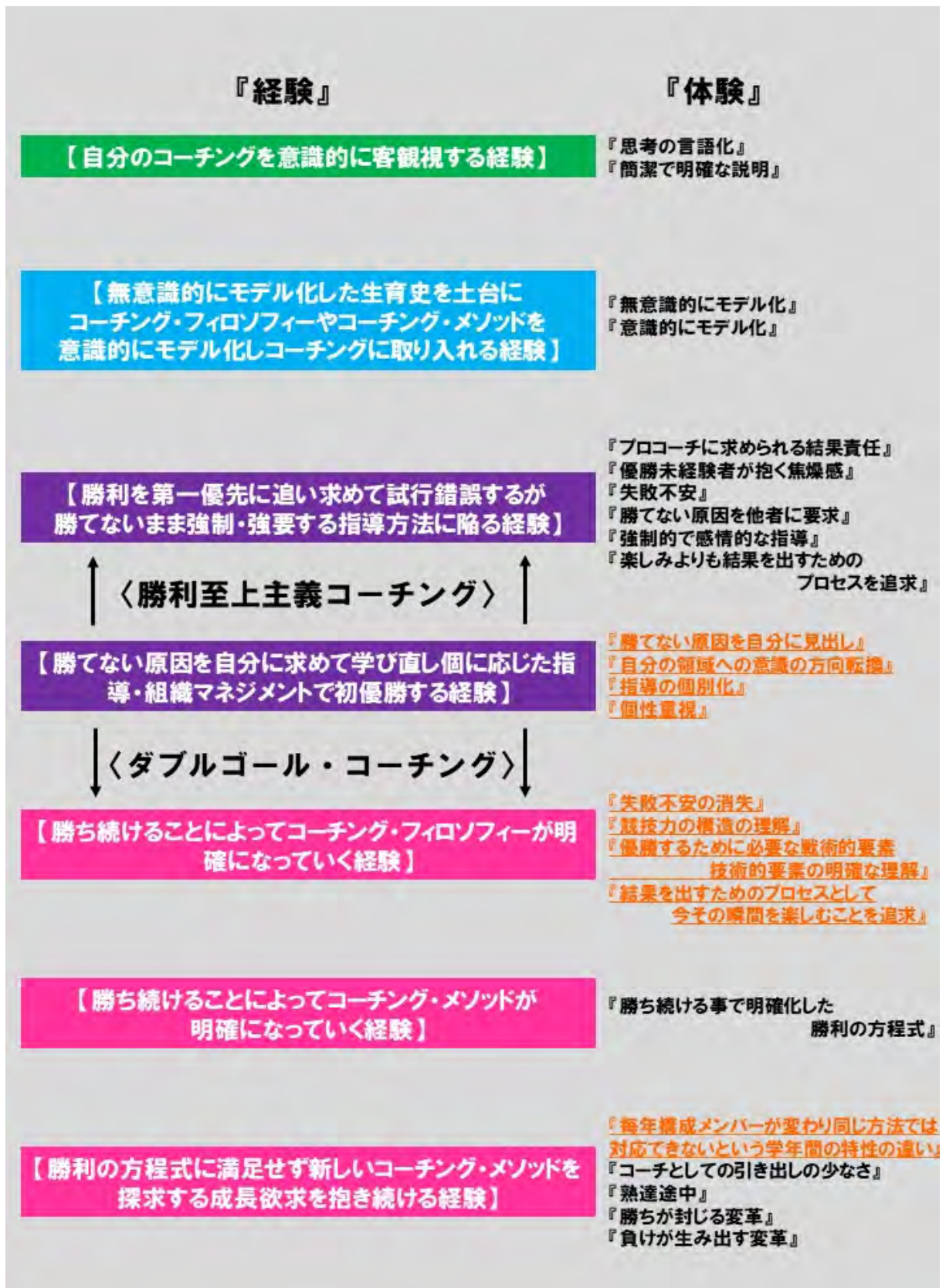


図 14. 橋本コーチの熟達過程で起こった経験と体験

とで，勝利至上主義コーチングに陥ることなくポジティブコーチングが実践できるトップコーチへと熟達していくための道筋を表 13 に提案する．

本研究の結果から，Masteryの先にあるWinningを目指すというThompson（2003）のダブルゴール・コーチングの思考と行動を意識し，自分にコントロールできることに意識を向けることで失敗不安を低下させることが，勝利至上主義コーチングやバイオレンスを伴ったコーチングに陥ることなく，結果的に勝利へ近づく思考と行動であることが確認された．また，本研究の一事例から勝利至上主義を克服するために9つの思考と行動が必要であり，またそれは勝てない原因を自分に求めて学び直し個に応じた指導・組織マネジメントで初優勝するという経験を契機に獲得していくことが可能であり，全てのコーチがコーチング現場において適応できることであると考えられる．

表 13. 現場のコーチに一般化できる体験を再文脈化したストーリーライン

コーチがトップコーチへと熟達していくためには、コーチングの初期段階から自分のコーチングを意識的に客観化するために、『思考の言語化』と『簡潔で明確な説明』を習慣化することが必要不可欠である。また、コーチは他者のコーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドを『意識的にモデル化』して取り入れることだけでなく、他者の生き方や考え方から影響を受け自分が『無意識的にモデル化』しているコーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドが何かを省察して意識化する機会をつくることも重要である。

コーチングの熟達過程の中において、『プロコーチに求められる結果責任』や『優勝未経験者が抱く焦燥感』から勝利至上主義コーチングに陥ってしまう可能性が高く、勝利渴望期にはコーチ自身や選手の『失敗不安』が高まり、コーチは『勝てない原因を他者に要求』し、『強制的で感情的な指導』に陥ってしまう危険性や、『楽しみよりも結果を出すためのプロセスを追求』するコーチングを行ってしまう危険性がある。しかし、勝利渴望期でも、コーチは『勝てない原因を自分に見出し』、『自分の領域への意識の方向転換』を行うことで、『指導の個別化』や『個性重視』の指導が可能になると考えられる。

コーチの熟達と共に深まる『優勝するために必要な戦術的要素・技術的要素の明確な理解』や『競技力の構造の理解』は、コーチや選手の『失敗不安の消失』に繋がり、『結果を出すためのプロセスとして今その瞬間を楽しむことを追求』することができるようになる。

また、連覇期には『勝ち続ける事で明確化した勝利の方程式』が出来上がってくるが、成功体験に固執することは結果的に『コーチとしての引き出しの少なさ』を生み出し、学生スポーツの特徴である『毎年構成メンバーが変わり同じ方法では対応できないという学年間の特性の違い』に対応できない原因となる。連覇期においても、コーチ自身がまだまだ自分は『熟達途中』であるという自覚と謙虚さ持つことができれば、『勝ちが封じる変革』という現状維持思考を打破して新たな挑戦へと踏み出す勇氣も湧いてくる。たとえ連覇や連続出場などが途絶えたとしても、それを『負けが生み出す変革』のチャンスと捉えることができれば、コーチとしての更なる熟達へと繋がっていくと考えられる。

第 V 章． 結 論

本研究の結果から，橋本コーチは以下の 7 つの経験によって勝利至上主義コーチングを脱却し，ダブルゴール・コーチングのフィロソフィーとメソッドを確立していったと解釈することができた．

- 1) 自分のコーチングを意識的に客観視する経験
- 2) 無意識的にモデル化した生育史を土台に，コーチング・フィロソフィーやコーチング・メソッドを意識的にモデル化しコーチングに取り入れる経験
- 3) 勝利を第一優先に追い求めて試行錯誤するが勝てないまま強制・強要する指導方法に陥る経験
- 4) 勝てない原因を自分に求めて学び直し，個に応じた指導・組織マネジメントで初優勝する経験
- 5) 勝ち続けることによってコーチング・フィロソフィーが明確になっていく経験
- 6) 勝ち続けることによってコーチング・メソッドが明確になっていく経験
- 7) 勝利の方程式に満足せず新しいコーチング・メソッドを探求する成長欲求を抱き続ける経験

また，SCAT 法により抽出した 118 個の構成概念のうち以下の 24 個が，橋本コーチの熟達過程という文脈がなくてもコーチに一般化できる体験と解釈することができた．さらに 24 個の中の『 』で示した 9 個は，勝利至上主義コーチングを克服するために必要な体験と解釈することができた．

『思考の言語化』

『簡潔で明確な説明』

『無意識的にモデル化』

『意識的にモデル化』

『プロコーチに求められる結果責任』

『優勝未経験者が抱く焦燥感』

『失敗不安』

『勝てない原因を他者に要求』

『強制的で感情的な指導』

『楽しみよりも結果を出すためのプロセスを追求』

『勝てない原因を自分に見出し』

『自分の領域への意識の方向転換』

『指導の個別化』

『個性重視』

『優勝するために必要な戦術的要素・技術的要素の明確な理解』

『競技力の構造の理解』

『失敗不安の消失』

『結果を出すためのプロセスとして今その瞬間を楽しむことを追求』

『勝ち続ける事で明確化した勝利の方程式』

『毎年構成メンバーが変わり同じ方法では対応できないという学年間の特性の違い』

『コーチとしての引き出しの少なさ』

『熟達途中』

『勝ちが封じる変革』

『負けが生み出す変革』

謝 辞

本研究を行うにあたり，指導教員である武庫川女子大学健康・スポーツ科学部教授の坂井和明先生には懇切丁寧なご指導，ご鞭撻を賜りましたことを厚く御礼申し上げます．坂井先生と一緒に質的研究ができたことで，自分の中に本当にたくさんの魔法のような言葉と知識が入ってきて，最後の最後までストイックに向き合ってくださって，とても充実した研究の時間でした．坂井先生の研究室を選んでよかったです．本当にありがとうございました．

また，研究の実施にあたり調査への協力を快諾し，多大な時間と労力を要する調査用紙への回答およびインタビュー調査への対応をいただいた武庫川女子大学カヌー部橋本千晶氏に，心より感謝申し上げます．研究を通して改めて橋本コーチの下でカヌーができたことが誇りに思いました．そして，橋本コーチと戦えるくらいの名コーチになれるように精進していきます．これからもご指導をよろしくお願い致します．

文献

會田宏．ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質的研究：国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに．体育学研究，53（1），61-74，2008

會田宏．ハンドボールにおけるコーチング活動の実践知に関する質的研究：大学トップレベルのチームを指揮した若手コーチの語りを手がかりに．コーチング学研究，24（2），107-118，2011．

會田宏．コーチの学びに役立つ実践報告と事例研究のまとめ方．コーチング学研究，27（2），163-167，2014．

Byrne, D. The attraction paradigm. Academic Press. Festing, 1971.

Csikszentmihalyi, M. Beyond boredom and anxiety. San Francisco: Jossey-Bass. 1975.

Drewe, S. B. An examination of the relationship between coaching and teaching, Quest, 52(1), 83, 2000.

Erickson, K. and Fraser-Thomas, J. Sport experiences, milestones, and educational activities associated with high-performance coaches' development. The sport psychologist, 21(3), 302 -316, 2007.

Entine, J. Taboo: why black athletes dominate sports and why we are afraid to talk about it, Public affairs: New York, 340, 2000.

午堂 登紀雄． 1 つずつ自分を変えていく 捨てるべき 40 の「悪い」
習慣． 日本実業出版社刊． 2014．

後藤 正規， 杉山 洋二， 陸川 章， 小山 孟志． バスケットボール競技の
チームづくりにおける構成要素の検討． 東海大学紀要体育学
部， 40， 23-35， 2010．

堀部 政男． 情報公開制度・個人情報保護制度の回顧と展望． 10． 有
斐閣：東京， 1994．

ジム・トンプソン． ダブル・ゴール・コーチングの持つパワー：ス
ポーツでも人生でも勝者となる人材を育成する． NPO 法人スポー
ツコーチング・イニシアチブ， 2016．

Kabat-Zinn, J. Wherever you go, there you are: Mindfulness med-
itation in every-day life. New york: Hyperion, 1944.

Kenyon, G. McPherson, B. Becomeing involved in physical activity
and sport. Human growth and development, 303-332, 1973.

Luft, J. Group process: An introduction to group dynam-
ics. 1984.

神谷 拓． 運動部活動の教育学入門：歴史とのダイアログ． 321.
大修館書店， 2015．

金子 明友． わざの伝承． 明和出版， 46， 2002．

金子 明友． 身体知の形成（上）． 明和出版：東京， 97. 2005．

金谷 麻理子． 女性競技者の抱える問題：女性指導者増加のための具
体的な方策． 体育学研究， 60， 1-11， 2015．

檜塚正一，坂井和明，中道莉央．外国人サッカー指導者の言説から見たコーチングに関する研究．武庫川女子大学紀要（人文・社会科学），59，87-95，2011．

川谷茂樹．勝利至上主義：加藤尚武編「応用倫理学事典」．丸善856．2008．

岸俊行．野球における指導方法の差異が状況認識および意思決定に及ぼす影響の検討：中学野球部におけるコーチング指導とティーチング指導．福井大学教育地域科学部紀要（教育科学），201-219，2012．

北村勝朗．「教育情報」の視点による「コーチング」論：再考～ブラジル・プロフェッショナル・サッカー指導者の指導実践を対象として．教育情報科学研究，71-80，2004．

北崎悦子，會田宏．卓越したテニス指導者におけるグランドストローク指導の実践知に関する事例研究：ショットのコンビネーションに着目して．コーチング学研究，33（2），175-183，2020．

小井戸正亮，原仲碧，中村剛．サッカー競技会における監督のメンバー選考に関する実践知：短期トーナメント方式の大会における事例を例証として．スポーツ運動学研究，29，29-43，2016．

楠見孝．第2章実践知の獲得：熟達化のメカニズム．有斐閣，2012．

楠本繁生，田代智紀，會田宏．ハンドボールにおける卓越した指導者の指導力の熟達化に関する事例研究：高校・大学において全国大会で17回優勝している監督の語りを手がかりに．ハンドボールリサーチ，11-19，2015．

前田樹海．匿名は倫理的配慮か．日本看護倫理学会誌，3（1），74-75，2011．

Mageau, G. A. and Vallerand, R. j. The coach-athlete relationship: a motivational model. J sports Sci, 21(11), 883-904, 2003.

松村明．大辞泉第2版．小学館：東京．2468，2012．

Messner, M. Including more women coaches in youth sport: Why it matters. Retrieved , 2009.

文部科学省．スポーツ指導の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）報告書．
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/017/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/06/12/1337250_01.pdf（参照2020年10月31日）

村田正夫．スポーツ学再考：新しいスポーツコーチング学の創出．びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要．9，2012．

無藤隆・森敏昭・池上知子・福丸由佳．よく分かる心理学．ミネルヴァ書房．86，2009．

無藤隆，山田洋子，南博文，麻生武，サトウタツヤ．研究における質対量：質的心理学．新曜社：東京，2004．

長門智史．バスケットボール指導者のコーチングフィロソフィーに関する研究：男子チームと女子チームの共通点と相違点に着目して．筑波大学大学院修士論文，2004．

波平恵美子，道信良子．質的研究 step by step：すぐれた論文作成をめざして．医学書院，2005．

日本コーチング学会．コーチング学への招待．株式会社大修館書店，15-23，2017.

西倉実季．ライフストーリー・インタビュー．せりか書房：東京，161-162，2005.

小田博志．ドイツ語圏における質的健康研究の現状．日本保健医療行動科学会会報，14，223-239，1999.

大嶽真人．私の考えるコーチング論：選手を導く・個性を引き出す．コーチング学研究．24（2），99-105，2011.

岡部祐介．勝敗の倫理学．友添秀則編著『よくわかるスポーツ倫理学』ミネルヴァ書房，50-63，2017.

大峰光博，友添秀則．野球部における指導者の勝利追求への責任に関する一考察．体育・スポーツ哲学研究，36（2），73-82，2014.

大野篤史．バスケットボール競技における コーチング・フィロソフィーの明確化：元リトアニア代表ヘッドコーチ アンタナス・シレイカ氏に着目して．早稲田大学大学院修士論文，2013.

大谷尚．4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案：着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き．名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学），54（2），27-44，2007.

大谷尚．明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的分析手法．感性工学，10（3），155-160，2011.

大谷尚．質的研究の考え方：研究方法論から SCAT による分析まで．名古屋大学出版会，2019.

ポラニー．暗黙知の次元．紀伊國屋書店，17，1980．

坂井和明．私の考えるコーチング論：球技のコーチング．コーチング学研究．25（1），7-11，2011．

堺屋太一．組織の盛衰：何が企業の命運を決めるか．PHP研究所．1993．

関朋昭．勝利至上主義批判に対する批判の反証：スポーツの定義と価値から．北海学園大学経営論集，17（3），117-129，2020．

宗宮悠子，寺山由美，會田宏．卓越したダンス指導者のコーチングフィロソフィーの構造に関する質的研究：18歳以上のダンサーの指導に実績のある指導者に着目して．コーチング学研究，29（2），169-180，2016．

桜井厚，小林多寿子．第1章ライフストーリー・インタビューをはじめめる．せりか書房：東京．48-50，2005．

武田健．コーチング．誠信書房．87，1985．

武田健．コーチング読本．ベースボール・マガジン社．210，1997．

俵尚申．スポーツにおけるコーチング：一考察．嘉悦大学研究論集．46（1），189-209，2003．

Thompson, J. THE DOUBLE-GOAL COACH. 31-34. Harper Colins Publishers, 2003.

Thompson, J. The Power of Double-Goal Coaching: Developing Winners in Sports and Life. Harper Colins Publishers, 2010.

Werthner, P. Making the case: Coaching as a viable career path for women. Canadian Journal for Women in Coaching, 5(3). Retrieved, 2009.

Werthner, P. and Trudel, P. A New Theoretical Perspective for Understanding How Coaches Learn to Coach. Sport Psychologist. 20(2), 198-212, 2006.

山田亜沙妃．工藤康宏．野川春夫．笠原一也．一流指導者におけるキャリア形成過程の仮説モデル構築に関する研究：スポーツ的社会化要因に着目して．笹川スポーツ財団．113-121，2016．

山口香．私の考えるコーチング論．コーチング学研究，30，83-87，2017．

吉井四郎．バスケットボール指導全書1 コーチングの理論と実際．5．大修館書店：東京，1986．

結城匡啓．私の考えるコーチング論：科学的コーチングを目指して．コーチング学研究，25（1），13-20，2011．

図子浩二．コーチングモデルと体育系大学で行うべき一般コーチング学の内容．コーチング学研究，27（2），149-161，2014．

図子浩二．体育方法学研究およびコーチング学研究が目指す研究のすがた．コーチング学研究，30（3），129-135，2017．

資料

「大学女子カテゴリーにおいて全日本学生選手権大会優勝を経験したコーチの実践知
：ダブルゴールコーチングに着目して」に関するアンケート

武庫川女子大学大学院
健康・スポーツ科学研究科 健康・スポーツ科学専攻
修士課程1年 薦田遥
指導教員 坂井和明

この度は、ご多忙にも関わらず調査にご協力いただきまして誠にありがとうございます。

本調査は、「大学女子カテゴリーにおいて全日本学生選手権大会優勝を経験したコーチの実践知：ダブルゴールコーチングに着目して」に関する調査です。バイオレンスを伴わずに全日本学生選手権優勝を達成したコーチが、どのようなコーチングフィロソフィーやコーチングメソッドを持って大学日本一を達成したのかを明らかにし、日本のスポーツコーチングにおける有用な知見を得ることが本研究の趣旨です。そこで、大学日本一を達成したコーチにこれまでのコーチングについてお聞きします。

質問項目の中には、過去にさかのぼって、指導方法を思い出していただくものが含まれています。記憶間違いを心配されたり、面倒臭く思われるかもしれませんが、ご協力のほどよろしくお願いいたします。なお、生育史などに関わる質問で、答えたくないと思われた質問にはお答えいただかなくても結構です。その場合には、質問番号に×印をつけてください。

回答年月日 2019年10月29日

氏名 (橋本千晶) 性別 (男・女) 年齢 (満50歳)

競技 (カヌー(スプリント))

あなたの指導成績ベスト3をあげてください。

(年齢には、当該成績達成時のコーチの満年齢を記入してください)

	年	大会名	チーム名	成績	年齢
(例)	2019年	全日本学生選手権大会	〇〇大学	女子総合優勝	25歳
ベスト1	2019	全日本インカレ	武庫川女子大学	女子総合優勝	50
ベスト2	2018	"	"		49
ベスト3	2017	"	"		48

1. コーチ生活全般について

(1) あなたのコーチ歴を以下の表に年代順に記入してください。

年・月・ 満年齢	指導対象	立場	プロ/アマチュア
(例) 2019年4月 満23歳	〇〇大学〇〇部	アシスタントコーチ	アマチュア
1996/6 27才	台湾桃園市	コ-4	ア272P
1997/6 28才	北海道 南富良野高校カヌー部	コ-4	ア272P
1998/4 29才	武蔵川女子大学 カヌー部	コ-4	ア272P(学外)
2009/4 40才	"	"	79口

(2) コーチをするきっかけは何でしたか

選手を引退して、自分は何かをすべきか、いろいろ経験を重ねながら、
 気づいて「やはり人に何かを教えるにいい!」「私にはカヌーが似合う」と
 心の底から思えたから。

(3) 何歳頃までコーチを続けようと思っていますか

(_____ ? _____ 歳頃)

その理由は:

何歳とかは考えてない。

情熱が選手に負けた時。

(4) コーチをしていて最も楽しかったのは何歳頃ですか

(35 ~ 40 歳頃)

その理由は: 何もしなくてもいいから

その時は苦しく悩んで辛かったけれど

一番楽しかったのがむしろはい。

(5) コーチをしていて最も苦しかったのは何歳頃ですか

(35 - 40 歳頃)

その理由は: (4) と同じで面白い。

とにかく何をやってもいいから

でも 4セリングをやりだすと大変だった。

から、必死だった。

2. 自分のコーチングフィロソフィーの特徴について

(1) 現在コーチングする中で、あなたが一番大切にしていることは何ですか。

「のび」 と思ってる。

(2) あなたはなぜそれを大切にしていますか

本気で向き合っているから。

(3) それはいつ頃 (何年頃、何歳頃) から大切にしていますか

コーチに任せきりだった時から心に決めた。

(支援学校で先生としていた時に感じてのが始まりかな)。

(4) それを大切にしようと思ったきっかけは何でしたか

子供、学生には、絶対、正しい力がある。

その力を引き出すために、見通しは必要ないと思ったから。

3. 他者のコーチのコーチング方法と、自分のコーチング方法を比較して

(1) あなたのコーチング方法の特徴は何ですか

変化を感じて。

(2) 同じようなコーチング方法と感じるコーチはいますか

岩出さん (東京、うなぎ)。

(3) 異なるコーチング方法だと感じるコーチはいますか

たしはら 大野さん (札幌、体操)。

(4) コーチング方法であなたが参考になっているコーチはいますか

コーチ: 井村 雅也さん、エディ・ジョーンズ 仰木 彬さん

理由: 参考にしたいところと違うところに、この2人ならどうすれば? と
考える時がある。

4. 全日本学生選手権大会で優勝するためには

(1) 優勝するためには、チームもしくは個人に何が必要だと思いますか

(チーム) 帰属意識。
チーム愛。

(個人) 自分は何をすべきかを探究する心。
優先順位。

(2) それはいつ頃 (何年頃、何歳頃) 気づきましたか

2012年頃 43才頃。

(3) 気づいたきっかけは何でしたか

帰属意識(どう)の中は 半分以上か。
老々たり。勉強にリリ。時の学生の変化。
この方法を試して。

(4) またそれを選手にどのように指導していますか

- あれこれ教えない、待つ、信じる。
- 全てのことに対し、全てで取り組む。
- 全ての感情はハートワークから生み出す。

(5) あなたが指導するチームもしくは個人が全日本学生選手権大会で初優勝した後、コーチングがどのように変わったかを全く変化なしの場合を0とし、劇的に変化した場合を7とします。該当する番号に○印を付けてください。

全く変化なし							劇的に変化した
0	1	2	3	4	5	6	7

(6) 変わった要素はどんなことですか

何が:

選手の練習に取り組む姿勢と内容

なぜ:

自信と誇りが本当に目に見えてわかりました。

どう変わったか:

選手1人1人の集中がレベルに関係なく上がった。

(7) 変わらない要素はどんなことですか

何が:

なぜ:

5. ダブルゴールコーチングについて

(1) 本研究では、コーチングを「Winning」を第一優先に追い求める勝利至上主義コーチングと、「Winning」と「Mastery」の2つの目標に焦点を当てるダブルゴールコーチング (Thompson, 2003) に大別しています。「Winning」「Mastery」はそれぞれ英和辞典で「勝利」「熟達」と定義されています。あなたならばコーチングの2つのゴールである「Winning」(勝利)と「Mastery」(熟達)をそれぞれどのように解釈しますか。

「Winning」(勝利)とは

目標を達成すること。

「Mastery」(熟達)とは

プロセス。

でもプロセスは、目標達成できるときに止まる。

(2) あなたは、あなた自身が考える「Winning」(勝利)と「Mastery」(熟達)をどのくらいのバランスでコーチングしていますか(していましたか)。全日本学生選手権大会を初優勝したシーズンを基準に3つの時期に分け、「Winning」(勝利):「Mastery」(熟達)の比率と理由をお答えください。

例) 3 : 7

初優勝したシーズンよりも前 8 : 2

なぜ: 勝てばいいという思いが強くあって選手育成を細部まで気がつくことができていたから。

初優勝したシーズン 6 : 4

なぜ: 勝てばいいという思いに変わりはなかったけど、自分がやりたいことが見えてきた。それを選手と共有できたから。プロセスを見る余裕があった。

初優勝したシーズンの後 5 : 5 (今は 4 : 6 ぐらいかも)。

なぜ: 選手の成長(スキル、メンタル)に注い。目標達成はありえない。ことと選手との経験から学びをもらっていたから。
共有の

6. コーチングにおける厳しさについて

(1) ダブルゴールコーチングであっても「Winning」(勝利)を目指す以上コーチングには厳しさが必要であると考えられます。しかしその厳しさが、体罰、暴言など、バイオレンスを伴った指導を誘発し社会問題になっています。あなたにとって、全日本学生選手権大会優勝を目指すコーチングに必要な厳しさとは何ですか。

小はは 努力の積み重ねが成功を招く？
その小はは 努力をするためには、やらなければいけないことをやる。
ということが必要。 それをやらせるために、^{選手}「変化するのを」
指導する。

(2) あなたはどのような方法でその厳しさを達成していますか

具体的なこと|に|関して、タイムリーに指導する。

(3) 厳しさの捉え方、その達成方法は変化していますか。変化がある場合それは何ですか

厳しさの捉え方は大きく変化しました。
すみません、現在悩んでいる最中です。
厳しさを どうやって選手に伝えるのか、試行錯誤中です。

(4) それはいつ頃(何年頃、何歳頃)から変化しましたか

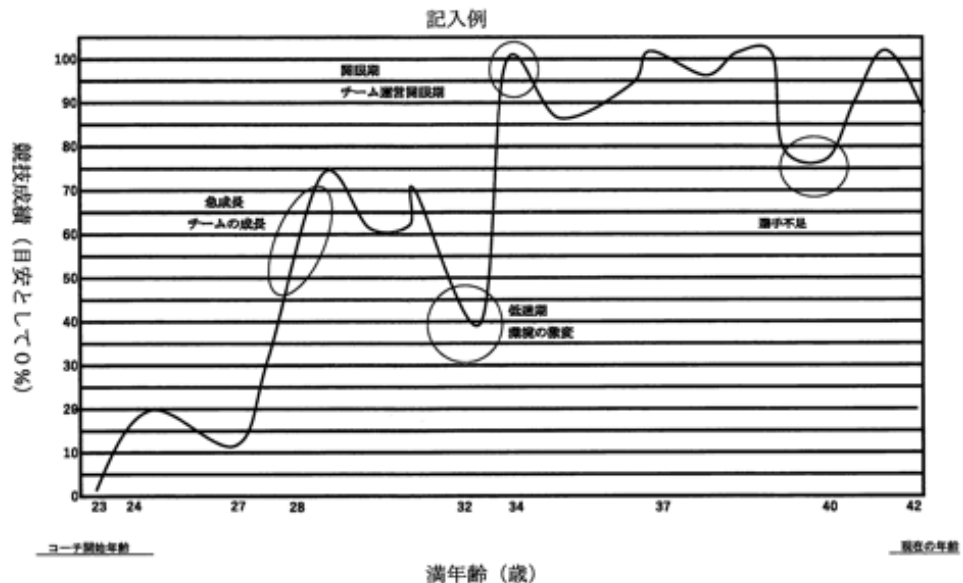
4ヶ月前

(5) 変化したきっかけはありましたか

わかりません。

7. 競技成績や指導方法の変化について

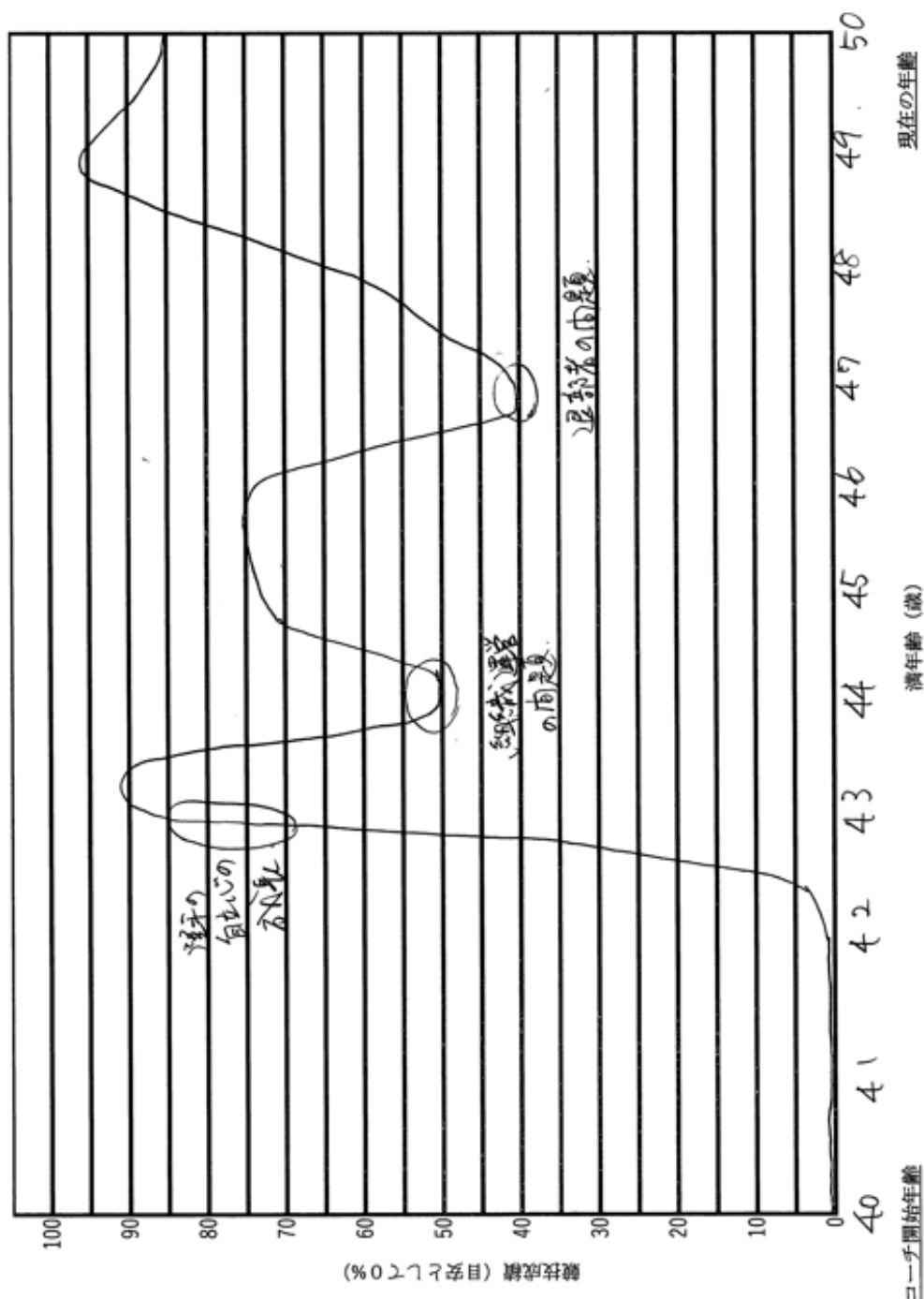
(1) これまで、あなたが指導してきたチームの競技成績やあなたの指導方法の変化はどのようなものでしたか。競技成績の最低水準を 0%、最高水準を 100%として相対的に評価し、下の例にならって大まかな変化をグラフに示してください。そして、チームに急激な伸びを示した時期、低迷期や停滞期など、競技など変化があった時期に○印をつけて、その原因や特徴、トピックスと思われるものを簡単にメモしてください。横軸の年齢はコーチ開始年齢から現在の年齢までの範囲でお書きください。



(2) 質問7でマークした、急激な伸びを示した時期、伸びは急激ではないが競技の成功につながるような変化があった時期において、コーチングの手掛かりになったものを、下記から選んで、その番号を図に書き入れてください(複数回答可)。

手がかり

1. 選手の言葉
2. 自分の感覚
3. 選手の練習姿
4. 選手の写真やビデオ
5. 一流選手の動き・プレー
6. 他のコーチの姿
8. 講習会など
9. 書籍や雑誌
7. その他 ()



9. コーチング目標について

(1) あなたのコーチングの最終目標、またはコーチングの夢は何ですか。

世界のメダルをとる。

カヌーをメジャーにする。

(2) (1) に迫り着くためにあなたはコーチングをどのように変化させていきたいと思いますか。またそれはなぜですか

まず自分の成長。

選手との相互効果をあげるためには、指導者のスキルアップが必要
だけではいけない。

目標レベルを上げるためには必然的にコーチのスキルアップが必要である。

お時間と労力をさいていただき、また、非常に貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

修論が人になるFさん。

番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言いかえ	〈3〉左を説明するようなテキスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
1	聴き手	「あなたの人生で最初にコーチになりたいと思ったきっかけは何ですか」					
2	コーチ	きっかけは一般企業で働いている時に、それまでも何かに教えたいと思っていたんですけど、自分にはまだそんな知識も何もなかったんで、自分に引き出しを色々つけてからそういう職業に就きたいなと思っていたのが、その一般企業で働いている時に、今やと思ったからです。	きっかけ/何かに教えた い/今やと思った	最初のきっかけ/自分の夢/直観	生涯の中でやりたいこと/自分の人生を変えようとした瞬間	自分の中にある本当の欲求との出会いの瞬間	・一般企業での経験で生かされていることは何か
3	聴き手	「その今や、は急にですか」					
4	コーチ	事務作業という普通のオフィスで働いていたので、ここでは自分の何か可能性が見つけられないと思ったもので、やっぱり何か教えたいとすぐ思いました。その何日後には社長室に行って辞めさせて言いに行きました。	事務作業/オフィスで働いていた/自分の何か可能性が見つけられない/何かに教えたい	一般企業のOL/蓋をされた未来/自分の夢/違和感	一般職への違和感/未来への閉塞感/転機/決断	企業の一般事務職への違和感と未来への閉塞感から辞職を決断	・どんな気持ちだったのか/バックパッカーの経験について
5	聴き手	「それいくつの時ですか」					
6	コーチ	26. ちょっと待ってください。あまりにもいろんなことがありすぎて26か7です。どっちか忘れました。					
7	聴き手	「27歳でコーチになったということですよ。いきなりコーチになったのが台湾のコーチと言うことですよ」					
8	コーチ	海外に興味があったので、できることなら海外のコーチとか先生になりたかったです。	海外に興味/海外のコーチ、先生になりたかった	国際的/自分の夢/国際交流/グローバル/教師	グローバルな活動	グローバルで活躍するコーチ	・海外への興味はいつからあったのか
9	聴き手	「これはどんな縁が台湾にあつてですか」					
10	コーチ	海外に行きたかったんで、カヌー連盟に自分で問い合わせをして、台湾がカヌーを始めた頃だったので、もしかして行けるかなと思い聞きました。これは夏限定とかで1年も行っていないです。そういう契約でした。	海外に行きたかった/自分で問い合わせ/台湾	グローバル/積極性/縁	主体的な行動で得た海外での指導機会	縁を手繰り寄せる主体性	・初めての指導が海外に決まった時の迷いや不安
11	聴き手	「じゃあ北海道の南富良野高校はそこから帰ってきて、これも何かの繋がりで?」					
12	コーチ	帰ってきた時に、連盟の人にじゃあこれも探してるけど行ってくれへんと言われて、探していたのでやりますという感じで、これも夏限定で。	連盟の人/じゃこれも/行ってくれへん/探していた	再び訪れた指導機会/タイミング/指導が評価される	海外での指導が評価され次に得た国内での指導機会	コーチングが自分の職へと転換していったきっかけ	・高校生への指導で得たこと
13	聴き手	「これは先生とかじゃなくてコーチだけですか」					
14	コーチ	コーチだけで、カヌー部を教えていた先生がいなくなったかなんかで、カヌー部はもともとあったので、それに行きたいという感じです。台湾の時も一応カヌー部というより、学校単位ではなく市とか省とかなんているんな子が集まっているクラブチームみたいな感じでした。	コーチだけ/カヌー部はもともとあった/台湾の時/クラブチーム	専門職/国際的/地域の触れ合い	コーチング/グローバル化	カヌーを教えるという夢と海外で教えるという夢の同時スタート期	・台湾のどう受け入れられたのか/ホワイトボードで説明するのはこの時の経験からなのか
15	聴き手	「台湾だと中国語ですよそれは何か通訳が何かについているんですか」					
16	コーチ	お世話になったお家のおばあちゃんが少し喋れました。あとは筆談で、漢字を書けば理解してくれるので、筆談で、ノートを常に持って、メニューの説明とかをしていました。	お世話になった家のおばあちゃん/筆談/メニューの説明	言葉の壁/できる限りの指導方法	今、できる最大限の方法を使った指導	説明責任 思考の言語化	・台湾の指導で得たこと
17	聴き手	「一般企業で働いていて、教えたいという欲求がもともとあったと思うんですけど、この台湾に行った夏ですね、それから北海道の高校生に対する集中的な指導この2つは教えたいという欲求を満たすきっかけにつながったんですか」					
18	コーチ	もっと教えたいと思いました。なかなか思っていることができなかったし、知識とかもなかったんで、もっとやりたいのもっとやりたいと思いました。けどカヌーのコーチというものが日本にはなかなか無かったんで、それだったら先生になって、どこかにカヌー部を作ろうと思って考えました。	もっと教えたい/もっとやりたい/もっとやりたい/カヌー部を作ろうと思って	自分の欲/自分の夢をかなえたい気持ち	教師志望ではなくカヌー指導を強く志望	更なる指導意欲のめばえ	・先生になってカヌーを教えたいと具体的にどのような行動を起こしたのか
19	聴き手	「それで武庫川女子大学のカヌー部に就いてそこから10年くらい学外コーチだと思うんですけどそれはどんな縁で」					
20	コーチ	私が選手だった時にコーチだった方がおられたんですけど、その人に手伝ってと言われて行く様になって、最初はずっと海外に行かれていることが多かったのでお留守番みたいな感じで、コーチが退かれたので私一人になったのでそこから、一人で見えるようになりました。	手伝ってと言われて/コーチが退かれた	アシスタントコーチ/外部コーチになる	母校に戻る/チームの引き継ぎ	アシスタントコーチからヘッドコーチ	・母校のカヌー部に戻れた時の思い
21	聴き手	「一人の期間は学外コーチの間どのくらいあったんですか」					
22	コーチ	10年くらいですか?8年くらいですかね。その時はすごく1番苦しかったです。なにか。	8年くらい/すごく1番苦しかった	指導経験の中で一番苦しかった時期	コーチ生活の苦難の時期	苦節10年	・苦しさをどう力に変えたのか ・その苦しさは今どんな場面で活かしているのか

40	コーチ	全然違います。なんか押し付けっぽいですね。知的障害の子への指導って。やりなさい! みたいな無理やりやらず感じて、なかなか授業も進まないの、その先生はちょっと違って、なんかもうすごくその子が段階をおってできるようにしていくのが目に見えて分かったの	押し付けっぽい/知的障害の子への指導/無理やりやらず感じ/段階をおってできるようにしていくのが目に見えて分かった	強制的/無理矢理徐々に見えるような/	強制的にやらせる指導スモールステップ	他律的で強制的な指導法 自律を生む支援的な指導法	・同時に大学生を指導しながら、その時に生かしたものは何か
41	聴き手	「じゃあそのやらせるような指導も一方で見える機会もあったんですか」					
42	コーチ	はい、ありました					
43	聴き手	「その指導をみてなにかどんなふう感じたんですか」					
44	コーチ	仕方ない面もあるんですけど、成長などはなくて、その場限りのできた、できないだけで、その本人の幸せとか充実にはつながっていったのかなと思いました。なのでそれは教員の自己満足でないかと思いました。	その場限りのできた、できない/本人の幸せとか充実にはつながっていかない/教員の自己満足	身についていない/生徒の思い通り、望み通りではない/自分主体	段階や一貫性のない指導	支援学校での両極端な指導者との出会い	・外からこのような指導を見た時に何を感じたか ・ベテラン教師と比較して何の違いがその指導を生み出したと考えるのか
45	聴き手	「じゃあもしそのベテランの先生との出会いがなければ、どんなになってたと思いますか」					
46	コーチ	もうちょっと言葉が多くて、ガミガミいうタイプになってたのかもしれない。	言葉が多く/ガミガミいうタイプ	威圧的な指導者/指導者の思い通り	コーチ自身の経験がコーチングモデルになる世代間伝達	意識的にモデル化	・選手と指導者の関係はどうあるべきだと思っているのか
47	聴き手	「その支援学校で見返りを求めることができない環境だったと思うんですけど、そういう非常勤の生活から時間を奪って武庫川女子大学のコーチになるわけですけども、実際に大学生と接してコーチングしている時もやはりそのままのかたちでいれたんですか。相手が要求できないという状況から、要求できますよね。実際大学生であれば、それでもやっぱりのって いうのをもったまま、コーチングされてたわけですか」					
48	コーチ	はい、もってました。ただ、まあでもうまくいかないとは思っていましたが、のにも思わないとか、見返りを期待したあかとか、思いますけど、実際それではなかなかうまくいなくて、だから最初のうちはうまくいなくて、待とう待とうとだけしていたので、なかなか待ってしなかなかならないうちだと思いが、それらあ最初うまくいかなかった2年間は、全部言葉で、特別支援の押し付けっぽい方になってたと思います。	実際それではなかなかうまくいなくて/最初のうちはうまくいなくて/うまくいかなかった2年間は、全部言葉で、特別支援の押し付けっぽい方になってた	挫折/思い通りにいかない/よくないと思う指導方法	知的理解/実践的理解	武庫川女子大学カヌー部プロコーチ就任 プロコーチに求められる結果責任 プロコーチに求められる結果責任が生み出す焦燥感 勝てない原因を他者に要求	・押し付けの指導を行うことで選手はどんな反応や行動、態度をとったのか
49	聴き手	「のによって言わないだけでは無理」					
50	コーチ	無理でした。最初は。言葉だけでわかって言っていたと思います。	無理でした/言葉だけでわかって言っていた	仕方がない/指導手段が不十分	理想と離れていても指導し続けなければならぬ現実	否定していたはずの他律的で強制的な指導法	・理想の思考と違う行動を取る現実はどうあるべきか抱えていたのか
51	聴き手	「そのあとどんな変化が訪れましたか」					
52	コーチ	途中くらいから、いや私が成長しないと、なんかダメやなという私が変わらなダメやなというのを思い始めて、そこから勉強したり、知識を増やそうって思ったり、まず私を充実させようと思いましたね。そしたら、なにかこういう手段を持って学生と向き合えるのかなと思いました。	私が成長しないと、なんかダメやな/私が変わらなダメやな/勉強したり、知識を増やそう/私を充実させよう	選手の成長より自分の成長に目を向ける/相手に求めず自分を変える	自分にコントロールできることに意識を向ける	勝てない原因を自分に見出す 自分の領域への意識の方向転換	・自分の思考を変えるきっかけは何だったのか
53	聴き手	「言葉で言うだけの段階から具体的にどんな風変わっていったんですか」					
54	コーチ	なにかこう綺麗にまとめるようと思って必死にやっていたことが、ばらけすぎがゆえにまとまることあるんじゃないかと思いついて、その時に大学院に行き始めたんですけど、バイメカとか生理学がすごく嫌いだったので、大学の時に、その辺の知識が少なすぎと思って入ったんですけど、その時にちょうど後藤先生に、心理学のカウンセリングの方が好きやったんで、学会を聞きに行こうって言われて行った時に、組織を作る時に、円を作ろうとするけど全部が結びつくのは難しいって話やあって、例えばここをここを強く強く結べば、ほかにいろんな結び付けができで、やがてはそれがひとつの円の中に入っていくって言う話やったんですけど、その時にあ!そうやって全てを上手く収めようとしてたなと思ったんです。それが考えを変えるきっかけになりました。	綺麗にまとめるよう/ばらけすぎがゆえにまとまる/大学院に行き始めた/心理学のカウンセリングの方が好きやった/全てを上手く収めようとしてたなと思った/考えを変えるきっかけ	丸く収める/個々を強くする方が団結する/新たな知識を学びに行った/知識が増えたことで新たな手段を身に付けることができた	スポーツ心理学/組織論/集団のマネジメント/集団も個人も完全な状態	知識を増やすために入学した大学院 組織論の知識 チームの効果的なマネジメント法	・理想があったのか、それはどんな理想だったのか ・集団、選手としての在り方をどう思っていたのか
55	聴き手	「それは選手との関係性についてなにか考え方が変わったんですか」					
56	コーチ	はい。					
57	聴き手	「それまで、まとめるというのをもっともう少し別の表現でできますかまとめるようにしてたとありますが」					
58	コーチ	結構な話を私の言葉でしてたので、みんなおんなじ考えのはずやと思ってたんですけど、ただでなかなかうまくいなくて、その時にいろんな考えがあって、みんな同じになくなっていいやと思いました。ありきたりかもしれませんが、個性を引き出して、生かす場所を作ろうとかは思いましたけど。	結構な話を私の言葉でしてた/みんなおんなじ考えのはずやと思ってた/個性を引き出して、生かす場所を作ろう	自分の考えを全て学生に言っていた/理想と現実のギャップからのアイディア/個の力を大切にしようとした	個性/個別化	指導の個別化 個性重視 構成メンバーの均質化 構成メンバーの異質化	・うまくいかなかった時に考えを変えるきっかけになったことは何か

59	聴き手	「待ってるだけではなかなかうまくいかないな、自分から言葉で伝えて伝えて伝えてひとつにしていこうかなかなかうまくいかないな、って言った時に個を一人一人生かしてあげよう、個性の生きる場所を作ってあげるようにしたということですか」					
60	コーチ	それはしました。ただその結び付けを強くしようということとは違う話かもしれませんね。なんかいま思い出したんですけど、ほっといてもやる子、全然話も伝わらない子、それ以外のなんとなくてきそうかなっていう子、そのなかの、できる方に近い子というのを自分の中で分けて、とりあえずこっちだけでもとって思ったかもしません。申し訳ないけど後回しにした時期もありました。今はしてないですけど。勝てなかった時にはそういうふうにしたこともあります。	ほっといてもやる子/全然話も伝わらない子/それ以外のなんとなくてきそうかなっていう子/とりあえずこっちだけ/後回しにした時期	できる方に近い子から順番に/選手の区別	coachable コーチングのレディネス	勝利のために指導対象に優先順位 結果を生み出すための最短距離の指導法 インカレ初優勝	・後回しにした時選手に不満や文句はなかったのか ・申し訳なさを持ちながらやった結果何か変わったのか
61	聴き手	「まず橋本コーチが思うスポーツコーチングに必要な厳しさってどんなふうに考えていますか。インカレの優勝を目指そうっていうステージで、競技をする、コーチングをする、というステージで考えていただいた時に厳しさってなんですか、どういうふうにとらえていますか」					
62	コーチ	学生に求めることは、細かいことをきっちりやる、1番学生は嫌なんですけど、それだけやと思います。それはプレーの面だけでなく、私生活、学校生活、礼儀、全部においてです。 厳しさが変わったのは今までは全部ダメなことは叱って来たと思うんですけど、最近、細かいことにはきっちりいうようにしてますけど、大雑把なことは本人たちに任せて、または大きな失敗に関しては、なんでそうなったかと話をしたり、なにかそこは守ってあげないかと思ったり	細かいことをきっちりやる/今までは全部ダメなことは叱って来た/細かいことにはきっちりいう/大雑把なことは本人たちに任せて/守ってあげない	選手がやらなければいけないことは全てやる/今までは押し付けの指導だった/的を絞った指導を行うようになった/学生を促してあげる/大事な場面は自分が責任をとる	その瞬間の指導 細部へのこだわり 指示的な行動の	指導行動が多く育成行動が少ない指導指令型コーチング ・指導行動が少なく育成行動が多い育成・スーパーバイザー型コーチング	・カヌーを指導する現場でプレー以外の事を細かく求める理由は何か ・それにはどんなメリットがあるのか
63	聴き手	「細かいことができていない競技者が悪いわけじゃないんですか。それが細かいことができていない、ようするに指導できていない私に意識が向くんですか」					
64	コーチ	そうですね。					
65	聴き手	「それを選手に伝えるのが難しくなっているということですか。変わってきているというのは」					
66	コーチ	わたしが多分年齢も上がってきて、優しくなったと思いますね。自分で言うのもなんなんですけど、あの子も考えたらできるしなよか、次も一回許してみても次もあんなかんたんな言ってみようとかが増えてきて、結構タイムリーの自分の開発力がなくなってきたのか、少し言葉を少なくしても、指導できるようになってきたのか、そこが分からなくて、迷ってます。	年齢も上がってきて、優しくなった/タイムリーの自分の開発力がなくなってきた/言葉を少なくしても、指導できるようになってきた/迷ってます	性格や気性が穏やかになった/言わなくても分かってくるであろう/言葉以外の指導手段/模索中	寛容さと柔軟性の誕生/マンネリ化/指導手段の増加/	タイムリーに厳しく指摘して変える指導	・優しくなったと思う背景には何があるのか
67	聴き手	「細かく気になる点があった時にコーチの若い時代は、目についたその時にタイムリーに指導していたんですか」					
68	コーチ	はい。しかもそれも強い口調で指導していました。	強い口調で指導していました	学生が受縮するような指導	押し付け/強制性	強制的で感情的な指導	・今とその時の口調の違いをどう思っているのか
69	聴き手	それがだんだん見逃すわけですか、待つわけですか」					
70	コーチ	待つですね。あっと何回かみてみて、とかそのかわり観察はすごくしてますけど、ちょっとでも変わってきたら、変わった中で自分の中で消化したり、それが自分の成長なのか、自分の衰えなのかを見極めてないです。	観察はすごくしてます/自分の中で消化/自分の成長なのか/自分の衰えなのかを見極めてない	ちょっとした変化を逃さない	待てるようになった	タイムリーに指摘せずに変わるのを待つ指導	・親になる経験がどんな影響を与えているのか
71	聴き手	「一般的にスポーツ指導で厳しさと言うと、悪い方に出ると、バイオレンス、身体的なバイオレンスもあれば言葉のバイオレンスもあると思うんですが、そちらには一貫して、いかにそう言う手段にはいかなかったんですか」					
72	コーチ	言葉ではあります。でも変わりましたね。具体的に叱るようになってきましたね。今の学生さんは、次どうしたらいいかとかも、なかなか出てこないで、今のはこうだから本当はどうしたら良かったと思うとか、そういう指導になってきたと思います。例えば今までは、アホだったから終わりやっただのが、そっからの説明をするようになりました。	変わりました/具体的に叱るようになってきました/今までは、アホだったから終わりやっただのが、そっからの説明をするようになりました	以前との変化/ポイントが分かるような指導/	厳しさに対する捉え方の変化	離れて自得を引き出す指導 近づいて質問や説明を使う指導	・アプローチの仕方を変えた時、良かったと思う出来事は何か
73	聴き手						
74	コーチ	なんかこう言葉じゃなくて、自分の中で段階があって、言葉じゃなくて次は目で教えられるようになるとか、次は心で教えられるようになるとかなんか段階があって、それが進んでいるのかなと思っています。	段階があって/言葉じゃなくて次は目/次は心で	指導の中でやりたいこと/何も言わなくても学生に伝える	コーチ自身の熟達段階の定義	コーチとしての熟達段階の定義	・いつ頃から思っているのか ・何をきっかけにそう思うようになったか
75	聴き手	「目で指導するとか心で指導するってどういうコーチング方法ですか」					
76	コーチ	なんかこうほんまに思っている時の目とかって学生ってすごく敏感なので、心はまだいけてないと思います。心に行く前に優しくするところにいるのかなとは悩んでいます。	心はまだいけてないと思います/心に行く前に優しくする	言葉や表情を無くして指導することが今はできていない/自分の指導に模索中	言葉一日一心 言葉一チームの文化を創る段階 目一チームの文化を共有し自主的に体現する段階 心一チームの文化、価値観が共有され浸透した段階	熟達途中	・具体的にどう違うのか

77	聴き手	「言葉で強く伝えたり、あるいは目で強く指導した時に学生たちがコーチの目とか言葉とか、コーチを気にするようになりませんか」					
78	コーチ	なります。見るのでそういうのすごく嫌いなので、でもそれが指導なんですかね。自分も自分に目を向けるんですけど、学生もなにかあったらこないだの森のこととかあった時も、じゃあ自分に目をむけたら、自分はもうどうだったのという自分に矢印を向けるというのは、常々言ってきていると思います。わたしをみてってなるとそうではないので、そうではないのでダメやなっています。	自分も自分に目を向ける/自分に目をむけたら、自分はもうどうだったのという自分に矢印を向けるというのは、常々言ってきている	自分にコントロールできることに意識を向ける/私は何ができるのか、私にしかできないことは何なのかということを考えさせる	自主性/主体性	動作の改善・修正のために自分自身を理解させ自分の領域に意識を向けさせる指導	
79	聴き手	「コーチの事が気にならない、コーチの言葉にビクビクしないとか、コーチの視線が気にならない、でも学生たちが細かなことに、気を遣ってきっちりできるようになってほしいって 思っているという事ですか。その方法がまだ今はわからないという事ですか」					
80	コーチ	そうですね。自分は自分でわかりなさいっていうのをずっと言っているんで、どうやってそこに持っていくのかっていうのを悩んでいます。	自分は自分でわかりなさい	自分を自分で充実させる	自分自身の理解	動作の改善・修正のために自分自身を理解させ自分の領域に意識を向けさせる指導	
81	聴き手	「優しすぎるなって思われる事はありますか」					
82	コーチ	めっちゃあります。なんで今言わなかったんやろうとか、タイムリーに言うべきやったなとありますね。	なんで今言わなかったんやろう/タイムリーに言うべきやった	後悔/その場で指導	タイムリーの指導	タイムリーの厳しさ	
83	聴き手	「言わなくて学生たちが気がついた時はそう思わないですよね」					
84	コーチ	そうですね。例えば、この学年やと、ほとんどなにもしなくても勝手にやるじゃないですか、今はもう全然そうじゃない学生さんたちじゃないので、わたしの指導を変えないといけないという難しさはあります。	わたしの指導/変えないといけない/難しさ	学生に応じて、その時の学生にあった指導を行う/問題	同じ方法では通用しない	学生スポーツ 毎年構成メンバーが変わり同じ方法では対応できないという学年間の特性の違い	
85	聴き手	反動はですか?優しくなったとかって思った後に次にまたあ、今、おかしいって思った時は反動で強くなったりとか、変わったりしますか」					
86	コーチ	それは経験した事が無いです。					
87	聴き手	「じゃあもつと個に応じてとか、学年に応じてっていうような方向で変えていく事ですか」					
88	コーチ	でもそれを見極めるのが今はちょっと、後手後手になっているような気がします。どういう学年で、どういう風に、見えないサポートをしてあげたら動けるのかとか、全くここはほんとにいいのかわかっていないのが、さっきの優しさというようにうまく機能していないのかなと思います。	見極め/後手後手/見えないサポート	見極めることが困難になっている/学生に見えないところで導いてあげる	新たなコーチング領域への気づき	コーチとしての引き出しの少なさ	・学年の役割(チーム運営)を変えたことによる問題とは
89	聴き手	「橋本コーチが実際に競技をされていた頃は、どんな厳しさをコーチングされたんですか」					
90	コーチ	先生じゃなくて先輩からですけど、無茶苦茶というか、高校時代ですけど、自分は嫌やなと思うことをそのままやっけても良くならんやんって思ってたんで、大学になって自分が現役の時も、弱かったんで、どんどん先輩に言っただえました。	先生じゃなくて先輩から/無茶苦茶/嫌やなと思うことをそのままやっけても良くならんやんって思ってたんで、大学になって自分が現役の時も、弱かったんで、どんどん先輩に言っただえました	上下関係/不合理/嫌つたをそのままやっけても良くならん/どんどん先輩に言っただえました	組織のルールの排除・徹底 年功序列制民主主義	体育会系に内在する絶対的上下関係への嫌悪感 負の世代間伝達の断ち切り	
91	聴き手	「厳しくされると自分が上級生になると同じようにしてしまう事が多いんですけどもそうは ならなかったんですか」					
92	コーチ	そうですね。ほんとに強くなりたかったの、それに必要ないことは、排除したいと思っていました。だけど今教える立場になって、無駄なことも必要だし、全てが合理的じゃなくて もいいと思うので、そういうちょっと間違ったことも必要なのかなと思っています。理不尽なことも好きなんで、理不尽も必要やと思っています。	必要ないことは、排除したい/無駄なことも必要だし、全てが合理的じゃなくてもいい/理不尽なことも好きなんで、理不尽も必要	必要なことを全うする/非合理を経験することで、合理的なことが明確になる/筋の通っていないことも必要	全てが合理的でなくていい	非合理性の排除 非合理性の持つ有用性	
93	聴き手	理不尽になにか対応をうえからされるっていうのは競技にかなり影響ありますか」					
94	コーチ	なんか嫌なことも分かりますし、それによって横の繋がりが出ると思うんですけど、縦のつながりはそこでギクシャクしますけど、自分が上になった時に、理不尽じゃなかったなと感じる時もありますし。	嫌なことも分かります/横の繋がりが出る/ギクシャク/自分が上になった時	相手の気持ちがわかる/同期の関係が強くなる/先輩・後輩の関係に違和感を感じる/見えなかったものが見える	理不尽な要求に対する不満 下級生にの時に見えなかったものが上級生になって見える	先輩の理不尽な要求が生む後輩の結束力	
95	聴き手	「あえて横の繋がりを作るために、きつく理不尽な要求をすることってありますか」					
96	コーチ	1番上の学年がまとまってないとか、うまく行っていない時に無理やり無茶苦茶にしてやろうとか、問題提起を無理やりバンでだしてもめさすように、もめたら喋るじゃないですか、もめさせます。	無理やり無茶苦茶にしてやろう/問題提起を無理やりバンでだしてもめさす/もめたら喋る	あえて困難な課題を出す/学生に本音で語る機会を与える	本音で話し合わなければ解決できない状況設定/本音で話し合わせるための外圧	理不尽な要求 意図的に問題を創出する確信犯 コーチが演じる悪役	
97	聴き手	「揉め事を起こさないようにおさめるのではなくて揉め事を意識的に起こす。その事で結果的に話をさせる事、お互いに本音で話し合わせる事それが厳しさなんですかね。学生たちって今、本音でものをいうことを嫌いますよね。」					
98	コーチ	バスケット部ですか					

99	聴き手	「本音でものを言えている代は強いですからね」					
100	コーチ	うちは地方の子が多いのでどちらかと言えば内向的な子がすごく多い。それも関係するのかなとも思っていましたけど。そうではないんですね	地方の子/内向的な子	本音で言えない	マイナス面	内向的である事のマイナス面が作り出す本音を言えないチーム	
101	聴き手	「壊すくらい問題を投げかける、それで学生たちはなにか変わっていきますか」					
102	コーチ	ちょっとずつですけど。	ちょっとずつ	小さな変化	小さな変化の積み上げ	スモールステップ	
103	聴き手	「本当にばらばらになったことはないんですか」					
104	コーチ	あります。この間ばらばらになりました。					
105	聴き手	シーズンの最後に空中分解で終わっちゃったみたいなのはありますか」					
106	コーチ	あーそれはないですね。最後の1日だけまとまったらええとはいつも言います。仲の悪い学年とかでも、最後の一日最後の日にわたしら頑張ったって言えばそれでいいんですよと言います。	最後の1日だけまとまったらええ/最後の一日最後の日にわたしら頑張ったって言えばそれでいい	終わった時に満足感や達成感を味わわせてあげたよ	終わりをければすべてよし	インカレ最終日組織的ピーキング	
107	聴き手	「なにかチーム愛が大事だっているのを書かれていますか」					
108	コーチ	それがふと人生の中に残らないですか。色濃く。なんか自分だけの満足やと、そんなに残らない気がするので、せっかく入ってきてくれたので、なんか入ってよかったなとか、4年間しんどかったけど楽しかったなと思って欲しいなと思っているので、そのためにはやっぱり自分じゃなくて、人のためになにかできるかと、形のいいものを見てほしいなと思います。それがチーム愛だと思います。	自分だけの満足やと、そんなに残らない/自分じゃなくて、人のためになにかできるか/チーム愛	誰かと一緒に味わった満足感は将来語り合える/共有できる/自分の居場所がここにあったなと思ってほしい/誰かのために自分を犠牲にしても戦ってほしい	チーム ・目的がある ・献身的 ・役割 ・責任	ワンチーム	
109	聴き手	「カヌーって基本的には個人の種目だと思うんですけど、いま伺っているとう一貫してチームですよ。個を伸ばしていくという視点を持ちながらも、チームの方が大事なんですか」					
110	コーチ	やっぱり人のために何かできる人っていうのは結局最後は自分のことも見えてくるので、とは思っています。あと、カヌーの特性として、水のスポーツなので、大衣装ですけど、命をかけてやっている、そういう一体感っていうのは競技的にあるのかなと思います	人のために何かできる人/自分のことも見えてくる/カヌーの特性/命をかけてやっている/一体感	自分の視野を広げると自分の事も深く見えるようになる/水上は命にかかわる場所	貢献感が生む効力感 種目特性が生む結束力	セルフイメージを明確化	自分のことが見えるとは具体的にどういうことなのか
111	聴き手	「優勝することに対してどう捉えていますか」					
112	コーチ	全てのことを教えてくれる。抽象的ではありますが	全てのことを教えてくれる	再確認/新しい発見/課題の発見	答え合わせ	究極のフィードバック	
113	聴き手	「勝ちたいっていう欲求は強いほうですか、弱いほうですか」					
114	コーチ	強いです。					
115	聴き手	「負けず嫌いですか」					
116	コーチ	はい。					
117	聴き手	「コーチングをしていていま勝ちたいと思う欲求が強くなりすぎている瞬間ってありますか」					
118	コーチ	最近ないですけど、昔はもう思っていました。	昔は/思っていました	以前は勝ちたいという欲求が強くなりすぎていた	勝利欲求	勝利渴望期	
119	聴き手	「それはインカレ優勝する前ですか、どのくらいの頃ですか」					
120	コーチ	前ですね。一回勝ったあたりもありました。2、3連覇くらいまでは。	2、3連覇くらいまでは	勝ち続けたい	勝ち続けたいと思う欲求	優勝未経験者が抱く焦燥感	
121	聴き手	「そのあと勝ちたいという欲求が無くなったのかそれとも勝つということに対する意味づけが変わってきたのか、プロコーチですから、勝つという結果は当然求められているわけで すよね。その中で勝つという意識が変わってきたということなんですけどどんな風にかわってきたのか」					

122	コーチ	今までよく結果は後からついてくるからとあって言うじゃないですか、世間的に、凄く嫌いだったんですね、それやったら絶対結果なんかとられへんはと思ってたんですけど、なんか今は、何でしようっから変化したのかは分からないですけど、あそこまでの道のりを楽しまなかんはとか、結果はその日しか分からないとあって考えるようになっていました。 知らないうちに	結果は後からついてくる/凄く嫌いだった/あそこまでの道のりを楽しまなかん/結果はその日しか分からない	以前までは/結果だけに意識を向けていた/現在は/結果に向かうまでの日々/目を向けるようになった/やり切ってみないと結果はわからない	今その瞬間を楽しむ	楽しみよりも結果を出すためのプロセスを追求 結果を出すためのプロセスとして今その瞬間を楽しむことを追求	
123	聴き手	「勝ったコーチはそれは自分が優勝しない、迫りつかなかったことですか。優勝したから 思うことなんですかねえ。」					
124	コーチ	そのような気がします。楽しんでとあって言うのも自分の中ではなかなか分からなかったんですが、楽しむってなにとあって思ってたんですけど、今はそういう、そのために練習できるってすごい楽しいやんって思うようになりました。連覇ってわたし本当に意識した事がなくて、本当に嫌じゃなくて本当に、なんかその時間を楽しめているのかなとは思いますが。	楽しむってなにとあって思ってた/そのために練習できるってすごい楽しいやんって思うようになりました/その時間を楽しめている	勝負を楽しむは分からない/勝負のために練習できることは楽しい	自分にコントロールできない最後の瞬間ではなくその瞬間を楽しむということ	連覇期 結果を出すためのプロセスとして今その瞬間を楽しむことを追求	
125	聴き手	「学生たちの勝ちたいっていう欲求はみてて、優勝する前、連覇のあたり、続いていてい るけど、学生たちの意識は変わっていつているんですか、勝つということに対して。」					
126	コーチ	なんか最近では負けたらどうしようとか思っているような気がします。学生をみていると。私たちの代でとぎらせたらどうしようとか、なんかそう思わせたら可愛そうやなとは思ってますけど。	最近では負けたらどうしよう/そう思わせたら可愛そう	連覇/重圧	連覇の重圧	学生スポーツが生み出す代の重みで増幅する連覇の重圧	
127	聴き手	「先程勝つということは全てを教えてくださいということでしたけど、逆に負けることってというのは、コーチにとってどんな意味があるんですか」					
128	コーチ	負けて学ぶ事が多いってありますけど、私の中では負けてもちろん学ぶし、苦やしさが成長のなにかになる、エネルギーになるとか思いますが、結構学生は苦やしさはすぐに忘れるんですけど、喜びとか感動とかはずっと力になって、エネルギーになっている気がするので、負けるっていうことは、 、 、 なんやろ。ずっと負けてはきていたんですけど、もうあそこに行きたくないとかは、思いますけど、なんですかね。	負けてもちろん学ぶし、苦やしさが成長のなにかになる、エネルギーになる/学生/喜びとか感動とかはずっと力になって、エネルギーになっている気がする/もうあそこに行きたくないとかは、思います	負けた人にしか分からないものを得ることが出来る/それが力になる/いいことが力になる/負ける苦しみを味わうより、勝つ喜びや感動を味わう方がいい	勝ちの記憶/負けの記憶	負ける事は戻りたくない場所	
129	聴き手	「負けたらどうしようっていう不安はあまりないほうですか」					
130	コーチ	ないですね。					
131	聴き手	「昔からない?」					
132	コーチ	勝てなかった時期はうわどうしようとかはありましたね	勝てなかった時期はうわどうしよう	負けていた時は悩むしかなく、やりたいことが見つかってない		失敗不安	
133	聴き手	「なんで今なくなったんですかね」					
134	コーチ	負けてもまた頑張ったらええやんとかは思うようになりますけど、一応そんなことも想定はするんですけど、インカレ前とかには、もしかしら負けるかもとか。まあでもまた頑張ったらええかとか。	負けてもまた頑張ったらええやんとかは思うようになります/想定はする/でもまた頑張ったらええかとか	開き直りの考えを持てるようになった/いろんな状況を予想できるようにになった		失敗不安の消失	
135	聴き手	ずっとその勝てなかった時代は、負けたらどうしようって不安になるんですよね。違うんですかね」					
136	コーチ	全然ちがいますね。なんでやなんでやって思っていました。あれもしたし、これもしたし、とか思っていましたけど、いまはなんかじゃあどういやり方でやってみようかとは考えます。もし負けたら。でも今は結構勝っているんで、毎年いろんなやり方は変えてはいるんですけど、自分の中で新しく生まれ変わるとかいうのはなかなか思い切っできていないので、負けたら全部変えてみたいとか、楽しみにしているわけではないんですけど、そういう気持ちはあります。	新しく生まれ変わる/思い切っできていない/負けたら全部変えてみたい	新しいことを始めるにはまだ勇気と覚悟はできていない	負けることの意味の変化	成功病の自覚 負けが生み出す変革 新しい挑戦への欲求 勝ちが封じる変革	
137	聴き手	今の状態でこれだけやっておけば負けないとかっていうのはあるんですか」					
138	コーチ	戦術とかテクニック面ですか?それはあります	戦術/テクニック面/それはあります	勝った後分かったこと	連覇後の理解	優勝するために必要な戦術的要素・技術的要素の明確な理解 競技力の構造の理解	
139	聴き手	それって優勝する前は見えていたものですか					
140	コーチ	みえてないです。どれが正しいか自分の中ではっきりしてなくて、やっぱりあかんかった、やっぱりこれかなとか、いろんな本を読みまくったり、トレーニングを自分で習いに行ったりとか、全然自分の足元が固まっていなかったと思います。	どれが正しいか自分の中ではっきりしてなくて/全然自分の足元が固まっていなかった	模索中/やりたいことが明確になっていなかった		結果に繋がらない試行錯誤 裏付けのない試行錯誤	
141	聴き手	「そうするとそれが勝った、優勝した、連覇したということ、あ、これでいんだという感じで自信になったんですね」					
142	コーチ	そうですね。それと選手の動きとか滑ぎのレベルとかをみて、ああこのやり方でいけばこういう風になるんだなというの、計算できるようにはりました	このやり方でいけばこういう風になるんだなというの、計算できるようにはりました	想定できるようにになった	やりたいことが明確化	勝ち続ける事で明確化した勝利の方程式	

143	聴き手	「勝つことと、学生たちを上手くしてあげるそれは違うことですか。勝つために上手くしていくのか、それとも徹底してとにかく上手くしていくのかという方法で勝ちとかをあまり意識しないのか」					
144	コーチ	それはないですね。意識します。なのであんまりこう何も気にせずに無意識にやる練習とか、そういうのも組み込みながら。カヌーのテクニクって意識したらできることで、もほとんどはレース中に意識できないんで無意識の練習をいれる。意識してやる練習の方が多いんですけど、いれるようにはしています。全くの競争とか、ただきついでとか。結構パーセンテージを低くしてずっと漕がしているの、それやとだいぶ頭を使えるので、それをつかえないような練習をしています。	無意識にやる練習/競争とか/		ダブルゴールコーチング 運動学/心理学/組織論	意識を結果に向けさせる競争的練習	
145	聴き手	「その割合って変わってきているんですか」					
146	コーチ	変わってきました。もって無意識の練習がめっちゃめっちゃ多くなって、限界を超える!的な練習でしたけど、今は少ないです。特にシーズンオフはそういう練習がほとんどです。	無意識の練習/限界を超える!的な練習/	量的練習/感情的な練習	量から質への転換がむしろ無我夢中	動作の改善・修正のために自分自身を理解させ自分の領域に意識を向けさせる指導 追い込む指導	・考える練習にしたことで、練習以外で何か変化もあったのか
147	聴き手	「チームの状態があまりいい状態じゃない時にそういう無意識でやらせるんですか」					
148	コーチ	とかは多いですね。うわー。ってインターバルとか、感情が出てくるんで、私たちがやったし!って私に対して圧を出してくるんですね。そうしたらしめして思いますけど。	インターバルとか、感情が出てくる/私に対して圧を出してくる/	勝ちたい、抜かしたいの感情が大切/立ち向かっていく	意図的な練習方法	意識を自分の動作の改善・修正に向かわくさせる練習 意図的な無意識 意図的な感情の破壊 量で追い込む指導	
149	聴き手	「答えるのが簡単ではない質問だと思いますけど、カヌーを教えることと、インカレ優勝することを教えることって違いますか。言葉になりますか」					
150	コーチ	カヌーを教えるっていうのは自分の中にも答えがないくらいすごい難しいんですけど、カヌーを教えるのは100人いたら100個のアプローチがあると思うんですけど、インカレを勝つことは、先程のチーム愛にも繋がりますけど、なんかこうどうやったら失印を一つにできるかなとか、それだけでいいですね。温度差を最小にするとか。	自分の中にも答えがないくらいすごい難しい/どうやったら失印を一つにできるか/温度差を最小にする	模索し続けている/方向性を同じにするにはどうしたらいいの/か/学生の熱を同じにする	集団の凝集性 集合的効力	集団のベクトルを一つの方向に向けるチームマネジメント	・目標像がたくさんあるのか ・ルートがたくさんあるのか
151	聴き手	「その事が身体的な準備とか、技術的な準備とか、戦略的な準備とかそういったものを全て引き上げてくれるんですか。優勝する水準まで」					
152	コーチ	上げてくれると思います。なんか学生の上手くなりたいとか、テクニクあげたいとかっていう欲求は高いので、それはインカレ優勝にも繋がっているとは思っているとは思いますが、私よりは、私はその辺ちょっと離れてはいまずけど、学生の中では繋がっていると思います。考えさせる練習が多いので、そういう熟達欲求の話をされていますけど、そういうのは多少はあるのかなと思いますけど。	上手くなりたい/テクニクあげたい/欲求は高い	学生のカヌーに対するモチベーションが高い	学生が持つ熟達欲求の高さ	高い熟達欲求	
153	聴き手	「学生たちが熟達していく、上達していく、上達度とこの水準に到達しない限りインカレ優勝はないってなった時に上達度の評価と到達度の評価はどう区別されていますか」					
154	コーチ	できてない時もありますけど、できるようになったことは、言うようにしてはありますが、もしできていない時ははっきり言います。でもこれやったら関カレ決勝にもいけるんじゃないかな。	できるようになったことは、言う/できていない時ははっきり言います	出来たことは認める/	熟達目標（熟達度）の明確な評価/到達度の明確な評価	上達度と到達度を両方フィードバックする指導	
155	聴き手	「じゃあやっぱり2つはわけて返すときに評価をするんですね。」					
156	コーチ	私の指導は、変化を感じるだと思っているので、ちょっとした目標の変化だとかを逃さないようにとは思っています。勝てなかった時は見えてなかったと思います。小さな変化というのは、視野を広くして今は見えているんですけど、その時はグーって!点だけを見ようとしていたんで他のことが何もみえていなかった気がします。森の中でカメレオンだけを探しても見つけれないから、森を見ようというのは思っています。	変化を感じる/ちょっとした目標の変化/視野を広くして今は見えている	小さな変化を逃さない	全体視 ズームイン/ズームアウト	変化を感じる事ができる指導者 学生のあらゆる変化を広角レンズのような広い視野と多様な視点で見逃さないコーチング	
157	聴き手	「森を見たら小さな変化はわかるんですか。こう見るから小さな変化がわかるんじゃないかな」					
158	コーチ	はい、森をみたらカメレオンは見つかるとおもうんですけど、カメレオンだけを見つけないとしたら多分見つからないと思います。勝てないときにそれを学びましたけど。	森をみたらカメレオンは見つかる/勝てないときにそれを学びました	広く物事を見ると小さいことも見えてくる/勝てない時の経験	フォーカスイン/フォーカスアウト	自分が求める変化を望遠レンズのような狭い視野と1つの視点で見出そうとするコーチング	
159	聴き手	「見ようとしたときに、みてないところに実は変化があったけど、それを見落としていたということですか」					
160	コーチ	あ。そういうことです。全体視をすればなにが特別なことも、入ってきますけど、なにがこれだけを見ていたら、他の全体視はできないと思います。まあそうになっている時は多々あります。カメレオンだけを見つけないといけない時は。	全体視	広く物事を見ること	全体視一部分視	学生のあらゆる変化を広角レンズのような広い視野と多様な視点で見逃さないコーチング	
161	聴き手	「言葉でわーって言うそうするとやっている事がどうなっているかなってみますよね、そうするとこうなりますよね。(狭く)それは個性とかいろんなやり方があっていいとかっていう余裕が出てくると先入観なく見えるんですかね。」					
162	コーチ	ただ、個性と言っても学生って甘えると言うか、ラインがどんどんあふふになつていくので、学生の側では個性とかはあんまり言わないようにしています。個性を大事にとかは言わないです。	個性/甘える/ライン	曖昧な基準/学生を開き直させてしまう		妥協できない到達基準を設定した理想の漕ぎの追求	

163	聴き手	「勝つことと上手になっていくことのバランスが変わってきていると書かれているんですが、これは本当にこんな変化ですか」					
164	コーチ	はい。そうだと思います。でもそれが正しいかどうかは迷います。最近のチームをみている と8:2のときに戻したい!と思う時があるんですけど	正しいかどうかは迷います/8:2/戻したい	悩み中/模索中	成績目標 (Winning) と熟達目標 (Mastery) の追求比率	ダブルゴールの目的	
165	聴き手	それは学生の勝つという執着心が下がっているということですか」					
166	コーチ	だから技術の練習が多いのでそっちに目が向きすぎていて、1番大事なことを忘れてる気がする、戻したいけど、どうして戻そうとか、私がわーと言っても仕方ないで、昔やったら勝つぞ!とかっていう感じやったんですがそうじゃないよとか迷っているうちにどんどん時間は経ちます。	1番大事なことを忘れてる気がする/迷っているうちにどんどん時間は経ちます	根本的な、競技で勝とうとする心/時間は止まってくれない	熟達至上主義の否定/ファーストゴール追求の模索/ファーストゴールが学生から出てくる探求	外発的な勝利の要求 内発的な勝利の追求 低い勝利欲求	
167	聴き手	「負けないとわかんないことなんですかねそうすると」					
168	コーチ	そうおもいます。					
169	聴き手	「なにかのきっかけで負けたときにふとやっぱり勝ちたいっていう欲求が全面に出てくるんですかね」					
170	コーチ	だからなんかもう一人の悪い自分は、負ければいいのにと思っています。ここだけの話なし。	もう一人の悪い自分/負ければいいのに	新しいことに挑戦したい	第三者視点	連覇が途切れることで再生する勝利欲求	
171	聴き手	「連覇することで学生たちの勝つことに対する意識は下がっている。でも逆にまけたらどうしようは上がっているんですかね」					
172	コーチ	そうですね。ちょっと可哀想ですけどね。そこをなんとかしてあげたいとおもいます。	なんとかしてあげたい	選手優先の気持ち	失敗不安/連覇の重圧	学生スポーツが生み出す代の重みで増幅する連覇の重圧	
173	聴き手	「学生たちからそんな発言は出てくるんですか」					
174	コーチ	でてこないですね。みてて感じるという感じです。 なにかどんどん私が抜いたのか可愛くなるんですけど、お母さんですね。学生の言葉の中にも実際に出てくるんですけど、わたしのことお母さんみたいでっていうのをよく聞くので、お母さんになってしまってるんかと思う時は多いです	みてて感じる/お母さん/	母親的存在	選手にとって母親的 コーチ的存在	コーチにとっての子ども世代 学生にとっての親世代	
175	聴き手	「それは良くないなとおもいます?」					
176	コーチ	でもやっぱり地方から出てきているので、そういう場面もあっていいんですけど、頼れる、でも優勝目指すとかジャパンを目指すとかになったらちょっとその色が濃すぎるのかなとおもいますね。本来なら、先輩を頼ればいいところをわたしに全部こうくるんで、先輩後輩の関係の希薄さというか、まあ感じます。	先輩後輩の関係の希薄さ	人間関係の希薄さ	選手同士の関わり方の変化	コーチと学生の擬似親子関係が生み出す先輩と後輩の関係の希薄さ	
177	聴き手	「勝ちたい勝ちたいと思っていたときに勝てなかったとして、勝って初めて分かったことってなんですか」					
178	コーチ	それまでは分かっているとっていたんですけど、学生ってすごいなと思います。学生ってほんまは力あるはずって思っていたんですけど多分心の中ではおもってなかったんで、わたしがなんとかしてやろうと思っていたんですけど、あ。この学生ってほんまに凄いやなと思いました。今の子今の子って言われるじゃないですか、もちろん変わったことはあるんですけど、でも絶対に力を持っているからっていつも思ってます。だからその力をなんとか引き出すためにわたしはおるんやと考えます。	わたしがなんとかしてやろうと思っていた/学生ってほんまに凄い/絶対なにか力持っている/その力をなんとか引き出すためにわたしはおる	コーチ主体/学生を認める/学生を信じてあげる/信用してあげる	学生の持つ力への疑いから学生の持つ力を信じることへの変化	無力な学生を教えるコーチ 有力な学生の力を引き出す コーチ	
179	コーチ	桜宮高校でバレーをしていたんですけど、バレーは全然で補欠やったんです。で、自分の中でそれでも頑張れない自分が嫌で、3年間、なにが違うこととして絶対上まで行ってやるとおもっていたので、その気持ちで4年間力ヌーしたんですけど、その時の嫌な気持ち、高校3年間の頑張れなかった自分とか補欠とか、Bチームとかの気持ちとかは今の指導にだいふ生きてます。 高校の時の担任の先生が顧問の先生やったんですけど、手紙を書いて、先生にもそんな相手にされていなかったんで、絶対先生見返してやるみたいなことを、じゃあ先生が卒業アルバムに、白鳥は水面下で必死に足を動かしているって書かれたんですよ。それをずっと見て考えていて、なににかこう自分の中で何かが変わりました。自分は頑張れてなかったのに、なにを言ってるんやみたいな、だから4年間本当に真剣にやってみてみたいに思いました。いまもカヌーの指導の時にたまに白鳥の話は思い出します。	バレーをしていた/補欠やった/頑張れなかった自分とか補欠/Bチームとかの気持ち 高校の時の担任の先生/白鳥は水面下で必死に足を動かしている/いまも/思い出す	過去の自分の経験/Bチームの部員の気持ち/顧問との関係	コーチングの本質の理解・体験	Bチームの競技者としての自分を評価し認めて欲しかった苦い経験 自分には見えていない本質を見抜く先生との出会い	
180	聴き手	「父親の考えが相当根っこですね」					

181	コ ー チ	<p>すごく好きで、お父さんが。大阪のだんじりの祭りの頭みたいいな人やったんですね。なので 若い時から若い衆がいっぱい家に来て、勝手に食べたり飲んだりっていう家で育ってきているので、そういう組織をまとめるのを見ていたので、ああそうやってまとめるんやってのを勝手に思っていたと思います。お父さんが絶対に人のことを悪く言わない人で、みんなが悪いことを言ってもせやけど、あいつはこういうところあるで、とか言う人やったんで、そういうところはわたしの中にも入っているかもしれません。</p>	<p>お父さん/大阪のだんじりの祭りの頭/組織をまとめるのを見ていた/絶対に人のことを悪く言わない人</p>	<p>自身の親/大人数をまとめる役/父親の考え方/人のいいところを見つけるのが得意/必ず強みを評価する父</p>	<p>リーダーのモデルとしての父親</p>	<p>無意識的にモデル化 父の口癖 強みを発見するリーダー像</p>	
番号	発話者	テキスト	<p>〈1〉テキスト中の注目すべき語句</p>	<p>〈2〉テキスト中の語句の言い換え</p>	<p>〈3〉左を説明するようなテキスト外の内容</p>	<p>〈4〉テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)</p>	<p>〈5〉疑問・課題</p>

SCAT 分析によるストーリーライン

橋本コーチは、「自分の中にある本当の欲求との出会いの瞬間」を経て「企業的一般事務職への違和感と未来への閉塞感から辞職を決断」し「コーチングが自分の職業へと転換」していった。「カヌーを教えるという夢と海外で教えるという夢の同時スタート期」では「縁を手繰り寄せる主体性」を活かし「グローバルで活躍するコーチ」となる。台湾では日本語が通じないため、「思考の言語化」を行なった上で「簡潔で明確な説明」を算段によって行うことを体得すると同時に、「更なる指導意欲のめばえ」を感じた。

武蔵川女子大学カヌー部の「アシスタントコーチからヘッドコーチ」になっただけにもかかわらず、「ダブルゴールの未達成」を痛感する「苦悩の日々」は支援学校に勤務しながら「ボランティアコーチの限界」を感じつつも、「母校愛」と「忠誠心」によって「義務感・責任感でのコーチング」を続ける「苦節10年」であった。橋本コーチは高校時代の「Bチームの競技者としての自分を評価し認めて欲しかった苦い経験」と「自分には見えていない本質を見抜く先生との出会い」すなわち「指導観・コーチングフィロソフィーの基礎との出会い」から「変化を感じる事ができる指導者」を目指していたが、「他律的で強制的な指導法」と「自律を生む支援的な指導法」という「支援学校での両極端な指導者との出会い」は、カヌーを指導する「健康な大学生と特別支援学校の生徒とのギャップ」および「父の口癖」から「無意識的にモデル化」されていた「見返りを求めない生き方」「強みを発見するリーダー像」が土台となり、支援学校で学んだ指導方法を「意識的にモデル化」していく「指導観・コーチングフィロソフィーの基礎の形成期」となる。

「武蔵川女子大学カヌー部プロコーチ就任」後は、「プロコーチに求められる結果責任」から「楽しみよりも結果を出すためのプロセスを追求」し「自分が求める変化を望遠レンズのような狭い視野と1つの視点で見出そうとするとプロコーチに求められる結果責任が生み出す焦燥感」や「優勝未経験者が抱く焦燥感」から「失敗不安」は高まり、「無力な学生を教えるのがコーチ」という前提から「指導行動が多く育成行動が少ない指導指令型コーチング」になり「勝利のために指導対象に優先順位」を付けるなど「結果を生み出すための最短距離の指導法」をとった。しかし、その方法は「強制的で感情的な指導」を生む原因となり、「否定し続けたはずの他律的で強制的な指導法」で「構成メンバーの均質化」を求め、「勝てない原因を他者に要求」し、「結果に繋がらない試行錯誤」、「裏付けのない試行錯誤」の日々は、同時に「勝てない原因を自分に見出す」「自分の領域への意識の方向転換」を発生させ、「知識を増やすために入学した大学院」で「組織論の知識」や「チームの効果的なマネジメント法」に出会い、「指導の個別化」、「構成メンバーの異質化」で「個性重視」の指導を行えるようになり「インカレ初優勝」し「負ける事は戻りたくない場所」になった。

その後、現在に至るまでの7回の優勝経験は「究極のフィードバック」となり「優勝するために必要な戦術的要素・技術的要素の明確な理解」すなわち「競技力の構造の理解」は「失敗不安の消失」に繋がって「結果を出すためのプロセスとして今その瞬間を楽しむことを追求」できるようになり「学生のあらゆる変化を広角レンズのような広い視野と多様な視点で見逃さないコーチング」を行う「連覇期」が続いている。学生には「学生スポーツが生み出す代の重みで増幅する連覇の重圧」が押し掛かっているが、コーチは「有力な学生の力を引き出すのがコーチ」という前提に立てるようになり「指導行動が少なく育成行動が多い育成・スパーバイザー型コーチング」に変わった。橋本コーチは、高校時代のバレー部で「体育会系に内在する絶対的上下関係への嫌悪感」を抱き、大学時代には自ら「非合理性の排除」を行い「負の世代間伝達の断ち切り」を行った。しかし、コーチの立場になり、「先輩の理不尽な要求が生む後輩の結束力」という「非合理性の持つ有用性」に気づき、あえて学生に「理不尽な要求」をするために「意図的に問題を創出する確信犯」を演じることも多い。「内向的である事のマイナスイメージ」を消す「集団のベクトルを一つの方向に向けるチームマネジメント」によって「スモールステップ」で「インカレ最終日」に「ワンチーム」に仕向ける「組織的ピーキング」を目指す「集団のベクトルを一つの方向に向けるチームマネジメント」すなわち「勝ち続ける事で明確化した勝利の方程式」が出来上がっていった。しかし、「学生スポーツ」ならではの「毎年構成メンバーが変わり同じ方法では対応できない」という学年間の特性の違いによって「コーチとしての引き出しの少なさ」を痛感し、自ら定義した「コーチとしての熟達段階の定義」ではまだ「熟達途中」と認識している。また、「勝ちが封じる変革」という「成功病の自覚」から「新しい挑戦への欲求」が芽生え、「負けが生み出す変革」を求めたい、あるいは「連覇が途切れることで再生する勝利欲求」を感じたいとも思いつ始めている。

学生に対しては、「妥協できない到達基準を設定した理想の滑ぎの追求」のために行う「動作の改善・修正のために自分自身を理解させ自分の領域に意識を向けさせる指導」や「セルフイメージを明確化」し「上達度と到達度を両方フィードバックする指導」すなわち「質で追い込む練習」を生み出していき「高い熟達欲求」を生み出していきと理解しつつも、「低い勝利欲求」には物足りなさを感じている。そのため、「ダブルゴールの追求比率」を変えるために「意識を結果に向けさせる競争的練習」や「意識を自分の動作の改善・修正に向かわせる練習」すなわち「量で追い込む練習」を用いて「意図的な無意識」「意図的な感情の破壊」を引き出そうとするが、それは「外発的な勝利の要求」になってしまいうので「内発的な勝利の追求」が現れてくる指導を模索している。また、「コーチにとつての子ども世代」と「学生にとつての親世代」に近づいていくコーチと学生の関係性の変化は、コーチが行なってきた「タイムリーの厳しさ」に影響を及ぼし、「離れて自慢を引き出す指導」すなわち「タイムリーに厳しく指摘して変える指導」から「近づいて質問や説明を使う指導」すなわち「タイムリーに指摘せずに変わるのを待つ指導」に変わっていき、インカレ優勝を目指すチームとしては「コーチと学生の疑似親子関係が生み出す先輩と後輩の関係の希薄さ」に物足りなさを感じている。